



Title	日本語と中国語の対照から見たアイヌ語の時間表現 : 中国語の「過」とアイヌ語の「a」を中心として
Author(s)	馬, 長城
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15069号
Issue Date	2022-03-24
DOI	10.14943/doctoral.k15069
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91527
Type	theses (doctoral)
File Information	Changcheng_Ma.pdf



[Instructions for use](#)

令和3年度博士学位論文

日本語と中国語の対照から見た
アイヌ語の時間表現

—中国語の「過」とアイヌ語の「a」を中心として—

北海道大学大学院文学研究科

専攻：言語文学

指導教員：佐藤 知己

学生番号：05185029

氏名：馬 長城

目次

第1章 序論	1
1.1. 研究背景と目的	1
1.2. 研究方法	4
1.3. 言語データの扱い	7
1.3.1. 沙流方言と千歳方言	7
1.3.2. アイヌ語データの言語特徴	11
1.3.3. 本論で使用したアイヌ語のデータ	13
1.3.4. ローマ字転写と表記	17
1.4. 本論の構成	19
第2章 「a」と「過」の従来の記述とその問題	21
2.1. アイヌ語の「a」に関する従来の記述と問題	21
2.1.1. John Batchelor 1903	21
2.1.2. 金田一京助 1931	22
2.1.3. 知里真志保 1936	23
2.1.4. 田村(福田)すゞ子 1960	24
2.1.5. 佐藤知己 2006, 2007, 2008	26
2.1.6. 吉川佳見 2020	29

2.1.7.	先行研究における「a」の問題と本論の立場.....	32
2.2.	中国語の「過」に関する研究と問題	33
2.2.1.	Chao Yuanren 1968.....	33
2.2.2.	朱德熙 1982	35
2.2.3.	Li and Thompson 1981	36
2.2.4.	呂叔湘 1999[1980].....	38
2.2.5.	孔令达 1986	41
2.2.6.	刘月华 1988	44
2.2.7.	劉綺紋 2006	46
2.2.8.	先行研究における「過」の問題と本論の立場.....	49
第3章	文レベルにおける「a」と「過」の意味機能.....	51
3.1.	「a」と「過」のアスペクト研究における位置づけ	51
3.2.	日本語から見たアイヌ語と中国語の動詞分類	55
3.2.1.	「a」と共起する動詞の分類.....	57
3.2.2.	「過」と共起する動詞の分類	59
3.3.	「a」の意味機能：「Perfective」と「Perfect」およびその他	62
3.3.1.	本論における「Perfective」と「Perfect」の定義	62
3.3.2.	述語動詞の直後に立つ「a」の意味機能.....	64

3.3.3. 継続形式と共起する「a」の機能	67
3.4. 中国語の「過 ₁ 」と「過 ₂ 」の意味	71
3.5. 本章のまとめ	75
第4章 文レベルにおける「a」と「過」の構文問題.....	77
4.1. モダリティ研究における平叙文と疑問文	78
4.2. 平叙文における「a」と「過」の構文	80
4.2.1. アイヌ語の「a」の構文と機能.....	80
4.2.2. 中国語の「過」の構文と機能	85
4.3. 疑問文における「a」と「過」の構文	90
4.3.1. 諾否疑問文における「a」と「過」の構文.....	91
4.3.2. 疑問詞疑問文における「a」と「過」の構文.....	94
4.4. 本章のまとめ	95
第5章 テキストにおける「a」と「過」の機能.....	97
5.1. テキストとテキスト文法 (Text Grammar)	99
5.2. タクシス機能と継起性	100
5.3. 田村 (福田) (1960) と佐藤 (2006) の示唆的な記述.....	102
5.4. 従属節における「a」の機能：継起性	103
5.4.1. 動詞直後に現れる「a」	103

5.4.2. 意志（未来）を表わす助動詞と共起する「a」	105
5.4.3. 継続形式「wa an」と共起する「a」	107
5.4.4. 継続形式「kor an」と共起する「a」	109
5.5. 連体修飾節における「a」の機能	113
5.5.1. 動詞直後に現れる「a」	113
5.5.2. 継続形式「wa an」と共起する「a」	116
5.5.3. 継続形式「kor an」と共起する「a」	118
5.6. 主節における「a」の問題	119
5.7. 中国語の「過」の連続性問題	122
5.8. 本章のまとめ	125
第6章 結論とまとめ	127
謝 辞	130
参考文献	132

本論で用いた略語と記号

1	first person	1 人称
2	second person	2 人称
3	third person	3 人称
INDF	indefinite	不定人称
INTER	interjection	感嘆詞
CAUS	causative	使役
COP	copula	コピュラ
DUR	durative	継続形
EXP	experience	経験
NEG	negation	否定
OBJ	object	目的格
PASS	passive	受動
PFV	perfective	完結
PL	plural	複数形
PRF	perfect	完了
PRON	personal pronouns	人称代名詞
PROG	progressive	進行形
REDU	reduplication	反復
REFL	reflexive	再帰
SBJ	subject	主格
SFP	sentence final particle	文末助詞/終助詞
SG	singular	単数形

「*」(アステリスク)

対象言語において、文法的に誤った形式、あるいは実際には存在しないが、理論的な仮説によって作られたもの。

第1章 序論

1.1. 研究背景と目的

アイヌ語に関する研究は、記述的な観点から多くの成果が出されている。そのうち、金田一 (1931)、知里 (1974[1936])、静内方言に関する Refsing (1986)、沙流方言に関する田村 (1997a)、カラフト方言に関する村崎 (1979)、千歳方言に関する佐藤 (2008) はその代表的なものである。しかし、これらの研究がなされる一方、アイヌ語母語話者数は年々少なくなり、フィールド調査を行って複数の話し手からデータを収集して従来の研究を補正するという研究手法でアイヌ語を研究することは、すでにできなくなっている。

しかしながら、幸いにも、これまで先人研究者の努力によってアイヌ語は数多く記録され、いろいろな形で公開されている。これらのデータを用いてアイヌ語の文法研究を行うことはまだ可能だと思われる。また、アイヌ語の母語話者に細かく確認したりすることは困難になっている以上、アイヌ語をアイヌ語の周辺言語と対照し、アイヌ語文法の説明を補うことは有益な、実行可能な方法だと考えられる。

アイヌ語の周辺言語といえば、地理的に最も近いのは日本語である。しかも、アイヌ語と日本語は、例 (1) ~ 例 (4) に示されるように、類型論的に基本的な語順が似ており、修飾構造やアスペクトの点において類似しているところがある。

- (1) ekasi huci¹ ø-nukar².
おじいさん おばあさん 3SG.SBJ-を見る
「おじいさん (が) おばあさん (を) 見た。」 (田村 1997a : 9)

- (2) おじいさんがおばあさんを見た。 (田村 1997a : 9 改変)

- (3) opitta nisatta hunak un ø-paye kuni
みんな 明日 どこ へ 3SG.SBJ-行く.PL と

¹ 「huci」の「u」の上にある「´」はアクセントです。それがついている音節が前の音節より高く発音されるとされている (田村 1996 : v)。

² アイヌ語の動詞は義務的に人称が表示される。ただ、3人称の標示はゼロ形態の接辞で表される。本論では、そのことを見やすくするために3人称接頭辞を「ø-」で表示することにする。また、本論で引用した例文における3人称接頭辞「ø-」、形態素の間のハイフン、グロス、下線、また括弧の中に表示された文脈内容はすべて論者の手によるものであり、誤りはすべて論者の責任である。

ø-ye kor ø-an.

3SG.SBJ-言う ながら 3SG.SBJ-いる

「皆明日どこかへ行くことを話している。」(田村 1997a : 38)

(4) 皆明日どこかへ行くことを話している。

(田村 1997a : 38 下線は論者による)

アイヌ語の例(1)と日本語の例(2)を比較すれば、アイヌ語の基本語順は日本語の基本語順と同じで、両方とも「SOV」構造、すなわち「主語+目的語+動詞」になっている。また、動作継続という意味を表わす場合、例(3)と(4)のように、アイヌ語は「kor an」という専用形式を持ち、日本語は「ている」という専用形式を持っている。

しかし、Refsing (1986) が指摘するように、アイヌ語と構造的に似た日本語の観点から見ただけでは、アイヌ語の特徴を見落とす可能性があり、異なる言語構造を持つシナ・チベット語族などの言語の観点から見れば、アイヌ語の記述に「新たな光を持ち込める」可能性がある(Refsing 1986 : 49-50)。

論者はちょうどシナ・チベット語族に属する中国語の母語話者である。中国語はアイヌ語と比較すれば、例(5)と例(6)のように基本語順が異なる。

(5) káni ka icanuy ku-koyki rusuy.

1SG.PRON も マス 1SG.SBJ-を獲る したい

「私もマスを獲りたい。」(佐藤 2008 : 24)

(6) 我 也 想 抓 鱒魚。

1SG も したい 獲る マス

「私もマスを獲りたい。」

アイヌ語の基本語順が「SOV」なのに対して、中国語の基本語順は「SVO」、すなわち、「主語+動詞+目的語」になっている。また、アスペクト表現においても、中国語とアイヌ語には類似したところがある。

(7) 他 在 吃 飯。

3SG PROG 食べる ご飯

「彼はご飯を食べている。」

(8) 我 开 着 车 呢。

1SG 運転する DUR 車 SFP

「私は車を運転しているのよ。」

(9) yorosiku sekor hem a-nuyé wa ø-an.

よろしくとも INDF-書く て 3SG.SBJ-いる

「よろしく（日本語）とも書いてある。」（田村 1997a : 43）

(10) to ø-okere ø-sinot kor ø-an.

日 3SG.SBJ-終わる 3SG.SBJ-遊ぶ ながら 3SG.SBJ-いる

「1日いっぱい遊んでいた。」（田村 1997a : 32）

中国語は例（7）と例（8）のように、継続表現において「在」、「着」という2種類の形式を持っているが（Smith 1994, Huang & Shi 2016 など）、アイヌ語も例（9）と例（10）のように、「wa an」、「kor an」という2つの形式を持っている（田村 1997a, 佐藤 2007）。

また、完了表現においても、中国語には例（11）のように、「過³」という形式があり（孔 1986, 刘 1988 など）、アイヌ語には例（12）のように、助動詞「a」⁴がある（金田一 1931, 佐藤 2007, 佐藤 2008）。

(11) 我 吃 过 了。

1SG 食べる PRF SFP

「わたしは食べたよ。」

(12) Icar kopak un ø-paye a wa.

イチャル のほうへ 3SG.SBJ-行く PRF SFP

「イチャル（恵庭市の旧名）のほうへ彼は行ったよ。」（佐藤 2008 : 37）

例（7）～例（12）のアスペクト表現に限って言えば、アイヌ語と中国語の文法形式はほぼ対応しているように見える。そのうち、アイヌ語の「kor an」と「wa an」については、すでに多くの研究成果が出されている（田村 1997a, 佐藤 2006,

³ 中国語では「過」は簡体字で「过」と表記される。ただ、本論では、本文の中で見やすくするため、直接引用を除き、「过」は日本漢字の「過」を用いる。

⁴ 本論はアイヌ語の完了を表わす助動詞「a」に関する研究である。佐藤（2008）がいう条件を表わす接続助詞「akusu」と「awa」は継起性の証拠には必ずしもならないので、共時的な観点から、それぞれ「a kusu」、「a wa」として扱わないことにする。通時的にはその可能性は十分あるが、本論の範囲を超えるため、通時的な議論については立ち入らない。

2007 など)。

しかし、アイヌ語の完了表現「a」⁵は後述する先行研究の紹介をする第2章で示すように、まだいくつかの検討すべき問題が残っている。また、中国語の「過」についても数多くの研究がなされてきたが、「a」と比較した場合、従来の解釈では不十分なところがある（詳細は第2章を参照されたい）。

このような背景のもと、本論はアイヌ語の「a」と中国語の「過」の対照研究を行いたいと考えている。ただ、論者がアイヌ語と中国語の対照研究を行うのには、もうひとつの理由がある。アイヌ語は現在、消滅危機に瀕しており、フィールドワークという方法を用いてアイヌ語の文法形式の使い方を考察することはすでに難しくなっている⁶。論者の母語は中国語であるため、他の言語と対照するよりも、中国語の方が具体的な情報が得やすい。アスペクトの研究において、その文法形式がどのような意味特徴を持っているのか、を理解するには、文脈上の要因が時に重要な役割を果たすことがある。論者は少なくとも対照を行う一方の中国語のネイティブであることから、そのニュアンスを把握することができる。

1.2. 研究方法

本論は中国語とアイヌ語の対照研究である。そこで、対照研究についてすこしばかり触れておきたい。言語研究において、「対照」という用語は従来からあるが、「比較」という用語もよく使われている。本論は寺村（1982：2-3）に従い、以下のように対照言語学と比較言語学の研究内容を区別する。

○対照 (contrastive) 言語学：言語間の親縁関係や系統をまったく問題とせず、それぞれの共時態をつき合わせて異同を観察してみようとするものである。

○比較言語学 (comparative philology)：(特に印欧諸語において) 音韻の規則的な対応を発見し、それを手がかりとして言語間の親縁関係を立証し、祖語を再構することを目的とするものである。

⁵ Comrie (1976：52) によると、アスペクト (Aspect) は「has been concerned with different ways of representing the internal temporal constitution of a situation.」。しかし、完了 (Perfect) は「is rather different from these aspects, since it tells us nothing directly about the situation in itself, but rather relates some state to a preceding situation.」。厳密に言えば、完了表現 (Perfect) はアスペクト (Aspect) と言えないが、本論は、Comrie (1976) の定義を拡張して、完了 (Perfect) を特殊な表現としてアスペクト (Aspect) に含めて議論することにする。

⁶ ユネスコ (国連教育科学文化機関) が発表した“Atlas of the World’s Languages in Danger” (第3版) には、アイヌ語は【極めて深刻】な言語とされている。

アイヌ語と中国語はまったく異なる言語であり、系統的にもつながりを持たない。中国語はシナ・チベット語族に属しているが、アイヌ語の系統は現在でもまだ明らかになっていない。本論では「対照言語学」の枠内で、アイヌ語の助動詞「a」と中国語の助詞⁷「過」の考察を行い、それぞれの言語の観点から、共時的な統語的、意味的な類似性と相違性を明確にするものである。

具体的には、例 (13) と (14) のように、アイヌ語の「a」と中国語の「過」がなぜ、類似した構文を示すのか、またこのような類似した構文は類似した機能によるものなのかどうかを明確にする。

- (13) ø-aptokar kor ø-ek a wa.
 3SG.SBJ-雨に当たる ながら 3SG.SBJ-来る PRF SFP
 「ずぶ濡れになって来たよ。」 (佐藤 2008 : 46)

- (14) 他 吃 过 了。
 2SG 食事する PRF SFP
 「彼は食事した。」

例 (13) のように、アイヌ語の「a」は動詞の後に現れ、その後ろには必ず終助詞「wa」がつく (佐藤 2006 : 64)。また、例 (14) のように、中国語の「過」も動詞の後に現れるが、その後ろに「了」がないと、文が終わらない感じになる (孔 1986 : 274)。アイヌ語の「a」と中国語の「過」は、このように平叙文において似たような構文を示している。

一方、アイヌ語の「a」は、例 (15) と (16) のように、継続形式と共起することがあるのに対し、中国語の「過」はそのような形式と共起しない。

- (15) tap pakno ku-ype kor k-an a wa.
 今 まで 1SG.SBJ-食事する ながら 1SG.SBJ-いる PRF SFP
 「今まで私は食事をしていたよ。」 (佐藤 2008 : 185)

- (16) *到 现在 我 吃 着 过 饭 啊。
 まで 今 1SG 食べる DUR PRF ご飯 SFP
 「今まで私は食事をしていたよ。」

例 (15) では、アイヌ語の「a」は継続形式「kor an (ている)」と共起してい

⁷ 中国語学では「動態助詞」と呼ばれている。

る⁸が、例(16)のように、中国語の「過」は継続を表わす形式「着(ている)」と共起しない。

このようにアイヌ語の「a」と中国語の「過」の構文的な特徴を比較して研究するのは、井上(2002)でいうところの「対応記述型」の対照研究である。井上(2002:3)は、対照研究を「対応記述型」と「類型設定型」の二つに分類している。

○対応記述型：二つの言語の類似と相違を共通の枠組みのもとで整理して記述することに重点を置くのは「対照記述型」の対照研究である。

○類型設定型：二言語間の類似と相違の背景にある一般的な原理や傾向性について考えることに重点を置くのは「類型設定型」の対照研究である。

井上(2002)によると、「対応記述型」の対照研究の典型は、対訳上対応関係にある表現をつきあわせて、その類似と相違を共通の枠組の中で整理するというものである。アイヌ語の助動詞「a」は、中国語に訳する場合、中国語の助詞「過」に対応することが多い。

(17) kuneywa cep k-e a wa.
今朝 魚 1SG.SBJ-食べる PRF SFP
「今朝魚を私は食べたよ。(だからもう食事を済ませている。)」
(佐藤 2008 : 188)

(18) 我 早上 吃 过 鱼 了
1SG 今朝 食べる PRF 魚 SFP
「私は今朝魚を食べたよ。(だからもう食べない。)」

(19) a-kor a seta ne noyne ø-an.
1PL.INCL-持つ EXP 犬 COP らしい 3SG.SBJ-いる
「私たちが持っていた犬であるらしい」
「前に飼っていた犬…」(田村 1997a : 35)

(20) 好像 是 我们 养 过 的 狗
らしい COP 1PL 飼う EXP の 犬
「私たちが飼っていた犬らしい。」

例(17)の助動詞「a」と例(18)の助詞「過」は、いずれも過去に発生した

⁸ 北海道大学文学院教授佐藤知己先生のご教示による。

ことが発話時現在に対して影響を持っているので、同じく「現在パーフェクト」という意味で解釈できる。例 (19) の助動詞「a」と例 (20) の助詞「過」は、いずれも過去に発生したことで、「現在そのことがもう行われていない」という含意を持っているので、同じく「経験」という意味で解釈できる。

以上で述べた理論は本論が拠って立つ対照研究の基本的な立場と位置づけである。勿論、アイヌ語と中国語を対訳する際に、アイヌ語の助動詞「a」と中国語の「過」が異なる構文を示すこともある。その類似性と異同性の考察も本論の中心的な内容である。

なお、本論では日本語との対照研究は行わないが、日本語のアスペクト研究、および、それと関わるモダリティ研究にはたくさんの成果の蓄積がある。特に理論面において、本論はその有益な成果をアイヌ語の「a」と中国語の「過」の対照研究に応用することにする。また、アイヌ語の「a」の構文の中には、中国語には存在しないものがあるが、その場合は、中国語や日本語以外の言語の研究成果を応用することもある。

1.3. 言語データの扱い

1.3.1. 沙流方言と千歳方言

中国語は「普通話」という共通語を持っているが、アイヌ語は共通語を持っていない。アイヌ語は大きくカラフト方言、千島方言、北海道方言に分けられる。そのうち、北海道方言はさらに大きく北東部方言、南西部方言に分けられる (田村 1997a)。アイヌ語のいずれの方言においても、現在、話者数は少なく、実地調査は極めて困難である。そこで、本論では、実地調査を行う代わりに、これまでに公開されているアイヌ語の言語資料を研究データとする。また、公開されているアイヌ語の資料のうち、沙流方言の資料は最も豊富にあるため、本論はアイヌ語沙流方言を主な分析資料とする。なお、沙流方言と地理的に近いとされる千歳方言のデータも入手しやすいので、本論は沙流方言と千歳方言のデータを合わせて議論を行うことにする。



図 1：千歳方言と沙流方言の地理的な所在地
(Google Map をもとに論者が作成)

かつて、アイヌの集落は川に沿って作られ、同じ川の流域の人々は舟で往来していたため、その流域の方言には大きな差が見られない。一般的に、北海道の沙流川流域とその周辺の川の流域（日高地方の西部から胆振地方の東側にかけての領域）で話される方言は沙流方言と呼ばれている。また、今の北海道千歳市で話された方言は千歳方言と呼ばれている。

沙流方言と千歳方言は地理的に近いだけではなく、文法的にも大きな差異が見られないとされている。このことは、アイヌ語においてもっとも目立つ文法現象である「人称接辞」からうかがえる。表 1 は論者が田村（1997a）に基づいてまとめた沙流方言の主格人称接辞である。表 2 は同じく、論者が佐藤（2008）に基づいてまとめた千歳方言の主格人称接辞である。

表 1：アイヌ語沙流方言の主格人称接辞
(田村 1997a：17 に基づき論者が作成)

主格人称接辞				
	自動詞		他動詞	
	単数	複数	単数	複数
1人称	ku-	-as	ku-	ci-
2人称	e-	eci-	e-	eci-
3人称				
不定人称	-an	-an	a-	a-

表 2：アイヌ語千歳方言の主格人称接辞
(佐藤 2008：107-121 に基づき論者が作成)

主格人称接辞				
	自動詞		他動詞	
	単数	複数	単数	複数
1人称	ku-	-as	ku-	ci-
2人称	e-	eci-	e-	eci-
3人称				
不定人称	-an	-an	a-	a-

アイヌ語の主格人称接辞は、自動詞と他動詞⁹、単数と複数によって分けられる。また、3人称主格人称接辞はどの動詞においても現れず、ゼロ形態と呼ばれている。上記の表 1 と表 2 を比較すると、アイヌ語沙流方言と千歳方言の主格人称接辞は完全に同じであることが分かる。なお、アイヌ語の人称接辞は、主格を表わすもの以外に、目的格を表わすものもある。目的格人称接辞は他動詞に限られている。表 3 は論者が田村 (1997a) に基づいて、まとめた沙流方言の目的格人称接辞であり、表 4 は論者が佐藤 (2008) よってまとめた千歳方言の目的格人称接辞である。

⁹ 一般的に自動詞は主語だけを取り、他動詞は「主語」と「目的語」の両方を取るものと認識されている。アイヌ語の動詞はこれより複雑で、主語と目的語のどちらも取らないものもある。ゆえに、項 (argument) を取りうる数量で区分した方がより理解しやすくなる。例えば、sirpirka (天気が良い) は主語や目的語などを取らないので、ゼロ項動詞になる。「誰かから誰かに何かを与える」という「kore (与える)」は直接目的語と間接目的語の両方が求められる。つまり主語を含めて、3つの項が必要なので、3項動詞になる (アイヌ語学では、複他動詞とも呼ばれる)。

表 3 : アイヌ語沙流方言の目的格人称接辞
(田村 1997a : 17 に基づき論者が作成)

目的格変化 他動詞のみ							
	目的格	1人称		2人称		3人称	
主格		単数	複数	単数	複数	単数	複数
1人称	単数	/		eci-		ku-	
	複数					ci-	
2人称	単数	en-	un-	/		e-	
	複数	ecien-	eciun-			eci-	
3人称	単数	en-	un-	e-	eci-		
	複数						

表 4 : アイヌ語千歳方言の目的格人称接辞
(佐藤 2008 : 107-121 に基づき論者が作成)

目的格変化 他動詞のみ							
	目的格	1人称		2人称		3人称	
主格		単数	複数	単数	複数	単数	複数
1人称	単数	/		eci-		ku-	
	複数					ci-	
2人称	単数	en-	un-	/		e-	
	複数	en-	un-			eci-	
3人称	単数	en-	un-	e-	eci-		
	複数						

表 3 と表 4 を比較すると、沙流方言の目的格人称接辞と千歳方言の目的格人称接辞はほぼ同じである。ただ、薄い青色で示したところ、すなわち「あなたたちが私を」という場合は、アイヌ語沙流方言は人称接辞「ecien-」を使い、千歳方言は人称接辞「en-」を使っている。また、「あなたたちが私たちを」という場合は、アイヌ語沙流方言は人称接辞「eciun-」を使い、千歳方言は人称接辞「un-」を使っている。ただ、千歳方言の目的格人称接辞はゆれがあるようである。千歳方言を扱っている中川 (1995 : 10) は、「あなたたちが私を」と「あなたたちが私たちを」の場合は、それぞれ「ecien-」「eciun-」という人称接辞が使われていることを報告している。この形式なら、千歳方言の主格人称接辞と目的格人称接辞のいずれも沙流方言と完全に同じになる。

以上で述べたように、沙流方言と千歳方言は異なる方言同士ではあるが、文法

において大きな差は見られないので、本論は沙流方言と千歳方言のデータを合わせて使用することにする。

1.3.2. アイヌ語データの言語特徴

アイヌ語は固有の文字を持たない言語である（田村 1997a : 2、佐藤 2008 : 5）。しかし、アイヌ語は数多くの口承文芸（物語文学）を持っている。これらの口承文芸は、知里（1973[1954]）によると、下記のように大きく分類することができる。

アイヌの 物語文学	{	韻文物語（詞曲）	{	神のユーカラ（神謡）	[カムイユカル … (1)	
]	オイナ …………… (2)	
				人間のユーカラ（英雄詞曲）…………… (3)			
		散文物語（酋長談）…………… (4)					

（知里 1973[1954] : 156）

ここで言う韻文物語と散文物語は、それぞれ久保寺（1977 : 8）が言う歌謡文学と散文文学に相当すると思われる。韻文物語、すなわち歌謡文学とは、概ね、英雄叙事詩（yukar）、神謡（kamuyukar）などのことであり、ふしをつけながら唱えるもので、雅語を使う。散文物語、すなわち散文文学とは、会話（ukoysoytak）、民話（uwepeker）などのことであり、韻律なしで、日常会話のような形で語られるもので、日常語を使う。日常語と雅語の言語的特徴について久保寺（1977）は下記のように述べている。

日常語と雅語とでは、語彙にも相当違ったものがあり、語法にも相違する点がある。概して、前者の語形は、短く簡明で、分析的であるに対して、後者はやや複雑で、総合的な語形をとるものといえる。（久保寺 1977 : 1）

また、田村（1997a : 88）によると、雅語は口語（日常語）よりも地域差が少なく、古い語形や語法を多く保存しているとされる。例えば、例（21）と（22）のように、口語（日常語）では格の表示を格助詞で行うことが多いが、雅語では充当態接頭辞 e-、o-、ko-によって格表示が行われることが多い（佐藤 2008 : 263）。

- (21) tanto Ukurmem ta ku-sirepa.
 今日 ウクルメモ に 1SG.SBJ-着く
 「今日ウクルメモに私は着いた」（佐藤 2008 : 263）

- (22) kamuy menoko unihi tane anakne a-kosirepa na.
 神様 女 の家 今 TOP 1SG.SBJ-に着く SFP
 「女神の家に今や私は着いた」(佐藤 2008 : 264)

例 (21) は日常語の例である。格助詞「ta」は日本語の「に」に相当する要素である。この格助詞は日常語ではよく使われる。例 (22) は雅語を使った神謡から抽出した例文である。ここでは、日本語の「に」に相当する意味を表わすとき、例 (21) で使われている「ta」ではなく、動詞「sirepa (着く)」の前に充当態接頭辞「ko-」が使われている。

つまり、神謡などのふしをつけながら唱えるものでは韻律を考慮しているのであろう、充当態接頭辞を使った語の集約した形がよく出てくる。これらの資料は自然会話の日常語とはすこし離れているので、本論では雅語を使った歌謡文学(韻文物語)のデータは使用しない。もっぱら日常語で話される会話や散文文学のデータを使用することにする。

また、散文文学については、久保寺 (1977) は沙流方言の散文文学を下記のように、下位分類している。

表 5 : 久保寺 (1977) による沙流方言の散文文学の分類¹⁰
 (久保寺 1977 : 8 に基づき論者が作成)

散文文学	第一人称叙述 (自叙)	Kamui-uwepeker (神々の昔話)
		Ainu-uwepeker (人間の昔話)
	第三人称叙述 (側叙)	Panampe-uwepeker (川下の者の昔話)
		Shisam-uwepeker (和人昔話)
		Auta-weishisam-uwepeker (隣の貧乏和人昔話)

日常語で語られる散文文学には、田村 (1986) のはしがきによると、upaskuma (伝説) というジャンルもある。これは第一人称で体験談として語られるものと、第三人称で民族の起源として語られるものがある。いずれも日常語で語られるものである。

本論は記述言語学の観点から、自然会話に近い言語データを基本データとしたい。故に、上記で述べたアイヌ語口承文芸のさまざまなジャンルから、叙述人称に関わらず、uwepeker (昔話)、upaskuma (伝説)、ukoysoytak (会話) の三種

¹⁰ 表は論者の手によってまとめたものである。ただ、アイヌ語の表記は現在通用しているものに直している。

類のみを本論の基礎データとして使用することに¹¹。ただ、本論におけるこの分け方はあくまで便宜上のものである。田村(1985)のはしがきで述べられているように、upaskuma(伝説)とukoysoytak(会話)には連続性が認められる。いずれにせよ、uwepeker(昔話)、upaskuma(伝説)、ukoysoytak(会話)は、文学的にあるいは内容的に異なる種類に属するが、同じく自然会話のデータと見なしてよいであろう。本論が行う研究において、その価値は同等であると考えられる。

1.3.3. 本論で使用したアイヌ語のデータ

前節で述べたように、本論は記述文法の観点から、日常会話に近い言語データを必要するため、uwepeker(昔話)、upaskuma(伝説)、ukoysoytak(会話)の3種類のデータだけを使用することに¹¹。これまで公刊されているものの中から、下記のようなデータを入手した。それぞれの特徴について、沙流方言と千歳方言に分けた上で著者のアルファベット順に簡単に説明しておくことにする。

沙流方言資料：

萱野茂氏採録資料：

萱野茂(1998a)『萱野茂のアイヌ神話集成 ウウェペケレ編 I』4. 東京：平凡社。

萱野茂(1998b)『萱野茂のアイヌ神話集成 ウウェペケレ編 II』5. 東京：平凡社。

萱野茂(1998c)『萱野茂のアイヌ神話集成 ウウェペケレ編 III』6. 東京：平凡社。

この資料の特徴：

この資料は『萱野茂のアイヌ神話集成』の民話の部分である。先述のように、本論はuwepeker(昔話)、upaskuma(伝説)、ukoysoytak(会話)の3種類のデータしか使わないので、ここでは『萱野茂のアイヌ神話集成』の民話部分に限って説明することに¹¹。

内容は萱野茂氏が1963年から1971年にかけて複数のアイヌ語話者から採録したuwepeker(昔話)である。萱野茂氏自身もアイヌ語の母語話者であるため、この資料はアイヌ語母語話者自身が録音を聞き、文字化したものである。その録音はCD化されているので、アクセスが可能である。

文字化した資料はカタカナ表記とローマ字表記の両方で示され、使用しや

¹¹ これらの資料が録音された時の話者の年齢はすべて60歳前後であるが、本論は社会言語学における性別、年齢の問題は考慮しない。

すい。語ごとに日本語の注が付され、最後に、全体の日本語訳が掲載されている。日本語訳は母語話者（日本語とアイヌ語のバイリンガル）の手によってなされたもので、信頼性が高い。ただ、逐語訳（直訳）にはなっていない。ローマ字の分かち書きはアイヌ語学の研究者と異なるところがあるので、注意して使う必要がある¹²。

萱野茂（2002）『萱野茂のアイヌ語辞典（増補版）』東京：三省堂

この資料の特徴：

この資料はアイヌ語—日本語辞典である。この辞書は語の意味を説明する際に、例文を多く使用しているため、その例文をアイヌ語の言語資料として使用することは可能だと思われる。

語の見出しはアルファベット順ではなく、日本語の五十音順になっている。この「増補版」には例文の録音がない。また、辞典の中の例文はすべて日本語のカタカナで表記されていて、ローマ字表記がない。しかし、辞典の凡例部分で、カタカナとローマ字の対応関係が示されている。

萱野茂（2005）『新訂復刻 ウウェペケレ集大成』東京：日本伝統文化振興財団

この資料の特徴：

内容は萱野茂氏が1961年から1968年にかけて複数のアイヌ語話者から採録した *uwepeker*（昔話）である。萱野茂氏自身もアイヌ語の母語話者であるため、この資料もアイヌ語母語話者自身が録音を聞き、文字化したものである。アイヌ語のデータはすべてカタカナ表記になっている。この資料には録音データがあり、その録音もCD化され、市販されている。ただ、日本語訳は逐語訳になっていない。

佐藤知己氏採録資料：

佐藤知己（2012）『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』

1. 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

佐藤知己（2013）『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』

2. 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

佐藤知己（2014）『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』

¹² もっとも、ローマ字の分かち書きは、アイヌ語学の研究者の間でも異なることがあるので、いずれにおいても注意が必要である。

3. 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。
佐藤知己 (2015)『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』
4. 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。
佐藤知己 (2016)『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』
5. 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。
佐藤知己 (2017)『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』
6. 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。
佐藤知己 (2018)『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』
7. 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。
佐藤知己 (2019)『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』
8. 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。
佐藤知己 (2020)『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』
9. 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。
佐藤知己 (2021)『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』
10. 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

この資料の特徴：

このシリーズは、2012年から毎年、北海道大学アイヌ・先住民センターが報告資料として1冊ずつ出版しているものである。その内容は、佐藤知己氏がアイヌ語の母語話者である上田とし氏にアイヌ語の調査をした際の録音を文字化したものである。また、発話の区分け、番号付けおよび文脈つき索引がついていて、とても使いやすい。調査者とアイヌ語話者の間の言葉に関する会話によって、ある単語や文法現象がどのような文脈で使われるのかが、ほぼ明確になっている。また、報告資料の概説部分には、編者が気づいたアイヌ語に特有な文法現象などについても書かれているので、本論執筆の際に大いに参考になった。

アイヌ語の表記は現在通用しているローマ字表記が採用されている。外国人の論者にとっては見やすい。ただ、その音声は技術的な問題か、まだアクセスできる段階にはない。また、この報告書は発行部数が少なく、市販されていない。アクセスするには、北海道大学・アイヌ・先住民センターに問い合わせるか、大きな図書館で探すしかない。

田村すずこ氏採録資料：

- 田村すず子 (1984)『アイヌ語音声資料 1』東京：早稲田大学語学教育研究所。
 田村すず子 (1985)『アイヌ語音声資料 2』東京：早稲田大学語学教育研究所。
 田村すず子 (1986)『アイヌ語音声資料 3』東京：早稲田大学語学教育研究所。

田村すず子 (1988) 『アイヌ語音声資料 5』 東京：早稲田大学語学教育研究所.
田村すず子 (1989) 『アイヌ語音声資料 6』 東京：早稲田大学語学教育研究所.
田村すず子 (1997b) 『アイヌ語音声資料 10』 東京：早稲田大学語学教育研究所.

この資料の特徴：

『アイヌ語音声資料 1-12』は全部で 12 冊あり、このシリーズは ukoysoytak (会話)、uwepeker (昔話)、upaskuma (伝説)、upopo (輪唱歌)、horippa (踊り歌)、yaysama (即興詩)、kamuyukar (神謡)、yukar (英雄叙事詩) など、さまざまなジャンルのデータを含んでいる。これらは編者の田村すず子氏が、1956 年から 1976 年にかけての長期間にわたって、アイヌ語の母語話者に調査した際のデータに基づき、文字化した資料である。録音したデータも公開されており、インターネットでダウンロードすることができる。また、文字化する際に母語話者に確認したり、グループ作戦にしたりするなど、データとしてはかなり信頼性が高い。本文はローマ字表記が採用され、日本語訳はほぼ逐語訳になっている。

この資料は網羅的なものであるが、本論は自然会話の資料を必要とするので、数多くのジャンルの中から、ukoysoytak (会話)、uwepeker (昔話)、upaskuma (伝説) だけを選んでいる。すなわち、『アイヌ語音声資料 1,2,3,5,6,10』の中のデータだけを使用することにする。

田村すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』 東京：草風館.
田村すず子 (1997a) 「アイヌ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典コレクション：日本列島の言語』 1-88. 東京：三省堂.

この資料の特徴：

田村 (1996) は、アイヌ語—日本語—英語の辞典である。英語の解釈は語レベルにとどまるので、むしろアイヌ語—日本語辞典と見なした方がよいかと思われる。辞典には文法事項を含めて、たくさんの例文が挙げられて、とても参考になる。この辞書ではカタカナ表記とローマ字表記の両方が採用されている。例文の音声は CD 化がなされていないため、アクセスできない。

田村 (1997a) はアイヌ語に関する文法書である。文法を説明する際に、たくさんの例文が使われており、これらの例文はアイヌ語研究のデータとしても価値が高い。また、この資料における例文はすべてローマ字で表記されている。音声は付いていない。

ただ、上記の二点とも、日常会話の資料だけでなく、前節で述べた神謡な

どの資料も使われているので、使用するときには注意が必要である。

千歳方言資料：

中川裕（1995）『アイヌ語千歳方言辞典』東京：草風館。

佐藤知己（2008）『アイヌ語文法の基礎』東京：大学書林。

この資料の特徴：

中川（1995）は、アイヌ語—日本語の辞典である。語の見出しは日本語の五十音順になっている。例文にはカタカナ表記とローマ字表記の両方が備わっている。ただ、音声資料は付いていない。例文は複数人のアイヌ語母語話者から採録したものであり、日常会話の例文だけでなく、神謡の例文もある。

佐藤（2008）は千歳方言母語話者の白沢なべ氏から得られた調査データに基づいて書かれた文法書である。一つの文法現象に複数の例文が挙げられ、その数は700本以上にも上る。こちらも日常会話の例文と神謡の例文の両方が使われている。表記はローマ字表記だけで、音声はついていない。また、日本語訳はほぼ逐語訳になっている。

以上、本論で使用した資料の特徴を簡単に説明した。これらの中には、カタカナ表記の資料もあればローマ字表記の資料もあり、さらに両方を備えるものがある。本論は基本的にはローマ字表記を使用するので、カタカナ表記の資料から引用する際には、すべて次節で述べるカタカナ表記とローマ字表記の対応関係に基づき、ローマ字表記に転写することにする。

1.3.4. ローマ字転写と表記

アイヌ語にはまだ正書法は確立されていない。現段階でよく見られる表記には、ローマ字表記と日本語カタカナ表記の二種類がある。より見やすくするため、本論は基本的にローマ字表記を採用する。前節で述べたように、萱野（2002, 2005）の例文はカタカナ表記だけで書かれているので、本論は下記の『萱野茂のアイヌ語辞典（増補版）』によるカタカナとローマ字の対応関係に従い、カタカナ表記をローマ字表記に転写することにする。表6は論者が同辞典に基づいてまとめたものである。

表 6 : 『萱野茂のアイヌ語辞典 (増補版)』における
カタカナとローマ字の対応関係
(萱野 2002 : iv に基づき論者が作成)

カタ カナ	ロー マ字	カタ カナ	ロー マ字	カタ カナ	ロー マ字	カタ カナ	ロー マ字	カタ カナ	ロー マ字
ア	a	イ	i	ウ	u	エ	e	オ	o
カ	ka	キ	ki	ク	ku	ケ	ke	コ	ko
サ	sa	シ	si	ス	su	セ	se	ソ	so
タ	ta			ト	tu	テ	te	ト	to
チャ	ca	チ	ci	チュ	cu	チェ	ce	チヨ	co
ナ	na	ニ	ni	ヌ	nu	ネ	ne	ノ	no
ハ	ha	ヒ	hi	フ	hu	ヘ	he	ホ	ho
パ	pa	ピ	pi	プ	pu	ペ	pe	ポ	po
マ	ma	ミ	mi	ム	mu	メ	me	モ	mo
ヤ	ya			ユ	yu	イエ	ye	ヨ	yo
ラ	ra	リ	ri	ル	ru	レ	re	ロ	ro
ワ	wa					ウェ	we	ウオ	wo
母音を伴わず子音だけで終わる節＝閉音節 (カナ小文字)									
プ	-p	ツ	-t	ク	-k	シ	-s	ム	-m
ッ	-pp-	ユー	-iw	ッ	-kk-	ッ	-ss-	ン	-n
アル	-ar	イリ	-ir	ウル	-ur	エレ	-er	オロ	-or

例えば、萱野 (2005 : 15) にある例文は、本論では下記のように転写および分かち書きがなされる (転写したローマ字部分の形態素間の「-」は論者よるものである)。

イシカッ・タ シノ・ニシパ ア・ネ・ワ／
Iskar ta sino nispa a-ne wa,
ア・ヤイ・コ・トム・カ ピリカ・メノコ
a-yaykotomka pirka menoko
ア・エトン・ワ ア・コロ ワ／オラーノ オカ・アン／／
a-etun wa a-kor wa, orano oka-an.

また、アイヌ語の発話には音素交替という現象がしばしば起こる。すなわち、前の語の語末が子音で終わる時、その子音が次の語の語頭の子音の影響で、異なる音になる。本論は、特にカタカナ表記をローマ字表記へ転写する際には、以下

の音素交替にも注意し、分かち書きをしている。

○ -r + t- → -tt-

例 kukor 私が持つ + tasiro 山刀 → /kukottasiro/私の山刀

○ -r + c- → -tc-

例 kukor 私が持つ + cise 家 → /kukotcise/私の家

○ -r + n- → -nn-

例 kukor 私が持つ + nonno 花 → /kukonnonno/私の花

○ -r + r- → -nr-

例 kukor 私が持つ + rusuy...したい → /kukonrusuy/私がほしい

○ -n + s- → -ys-

例 pon 小さい + sisam 和人 → /poysisam/小さい和人

(田村 (1984 : 8) に基づき論者が整理)

例えば、/kukottasiro/という発音は、萱野 (2002, 2005) で「クコッタシロ」と表記されているが、本論では「kukor tasiro」のように転写する。また、前節で挙げた資料のアイヌ語のカタカナ表記でよく見られる「オッタ/otta/」、「アンマ/amma/」、「アニ/ani/」、「アニネ/anine/」はそれぞれ、ローマ字の「or ta」、「an wa」、「an hi」、「an hine」と転写する。

なお、カタカナ表記からローマ字へ変換する際には、論者の能力と理解の限界によって誤りが発生する可能性があるが、それはすべて論者の責任に帰するものであることをあらかじめ断っておく。

1.4. 本論の構成

本論は 6 章で構成されている。第 1 章は序論であり、主に本研究の背景と目的について説明している。また、本論でのアイヌ語のデータの扱い方、およびそのデータのアイヌ語における位置づけについても触れている。なお、アイヌ語のデータを使用する際に、注意すべきデータの特徴、表記についても述べている。

第 2 章は、アイヌ語の「a」と中国語の「過」に関する先行研究である。本論は主にアイヌ語の「a」と中国語の「過」に関する対照研究を行うものであるため、先行研究における問題点を指摘し、その解決方法を明確にする。

第 3 章、第 4 章、第 5 章は、本論の中心的部分である。従来の先行研究では、アイヌ語の「a」に関しても、中国語の「過」に関しても、文レベルとテキストレベルに分けての分析があまり見られない。本論は不十分なところもあるが、基本的に文レベルとテキストレベルのデータに分けることにする。

第 3 章は、文レベルでアイヌ語の「a」と中国語の「過」の意味機能を再検討

するものである。特にアイヌ語の「a」の時間表現に関する機能については色々な主張があり、研究者間で一致を見ていない。具体的には、できごとの前後関係なのか、Perfectiveなのか、Perfectなのかという議論がなされている。中国語の「過」についても似たような議論がなされている。この章では、まずアイヌ語の「a」のアスペクト研究における位置づけを明確にし、そして日本語の動詞分類を参考しながら、アイヌ語の「a」や中国語の「過」と共起する動詞を分類し、それぞれの形式の意味機能について検討を行う。また、アイヌ語の「a」が継続形式「wa an」、「kor an」と共起した場合、機能の変化があるのか、およびどのように変化したのかについても英語学の成果を基に議論する。

第4章は、アイヌ語の「a」と中国語の「過」の文レベルにおける構文問題を議論するものである。アイヌ語の「a」は従来指摘されているように、平叙文の文末には立たないが、疑問文の文末には立つことができる。これに対して、中国語の「過₁」は平叙文の文末に立つことができず、疑問文の文末にも立つことができない。また、中国語の「過₂」は文脈の支えがないと、そのまま使うことができない。なぜ、アイヌ語の「a」と中国語の「過」が構文上、類似したところがあり、異なるところがあるのか、その原因についても議論を行う。そして、アイヌ語の「a」と中国語の「過」のもとの機能が「継起性」であるという仮説を立て、文レベルにおいて、「a」と「過」の継起性が働くので、先述の構文現象が現れるのではないかという推測を述べる。

第5章は、テキストレベルのデータに基づき、第4章で仮説を立てた「a」と「過」の継起性機能をテキストレベルで検証する。「a」の継起性については、従来とくに踏み込んだ議論はなされておらず、田村(福田)(1960)と佐藤(2006)の研究でその機能が示唆されているにとどまる。第5章では、まず、テキスト言語学、タクシス機能や継起性の定義について先行研究を参照しながら明確にする。そして従属節と連体修飾節における「a」の継起性を検証し、「a」と他の時間表現、例えば、「wa an」や「kor an」と共起する場合の機能も検証する。また、「a」が主節のできごとの後ろに現れない現象について、中国語の「過」の観点から議論する。最後に、従来の先行研究で分けられている完結の「過₁」と経験の「過₂」の連続性を取り上げ、「過₁」と「過₂」はいずれも「継起性」という機能から分化したものであり、使用文脈によって異なる意味になることを指摘する。

第6章は本論の研究結果をまとめる部分である。本論ではアイヌ語の「a」と中国語の「過」を対照して、文レベルとテキストレベルに分けて議論を行うが、得られた結果にはさらなる検討の余地がないわけではない。第6章の最後で、その問題点を提示し、今後の課題を述べる。

第2章 「a」と「過」の従来の記述とその問題

2.1. アイヌ語の「a」に関する従来の記述と問題

前節で述べたように、アイヌ語は共通語を持っていない。これまでの研究成果は方言ごとに挙げられている。ただ、アイヌ語の助動詞「a」に関する研究はそれほど豊富ではない。そこで、以下では、沙流方言と千歳方言以外の方言についての研究成果も参照することにする。なお、どの方言なのかを明記していない研究もあるが、それも合わせて参照することにする。

2.1.1. John Batchelor 1903

英語の観点から、初めて体系的にアイヌ語の形態と統語現象を記述したのは Batchelor (1903) である。ただ、アイヌ語の「a」については、助動詞ではなく、下記のように、疑問助詞 (particle) として記述している。

174.—Questions may also be asked by means of the particle *a* or *ya*: —

……

E oman a? “Have you been?”

(Batchelor1903 : 97 省略は論者による)

また、同書では、「a」は動詞の後ろに立つ場合、しばしば疑問を表わすとされている。

184.—After verbs the particle *a* often denotes interrogation; thus: —

E oman a? Have you been? Ek a? Has he come?

shisam ne a? Is it a Tan okaibe e koro pe a?

Japanese? Are these things yours?

(Batchelor1903 : 101)

このように、Batchelor (1903) は「a」を「疑問助詞」として記述しているが、「Tan okaibe e koro pe a?」以外の例文では、「a」はすべて動詞の後に立っていることがわかる。また、英語の訳文は、動作動詞「oman (行く)」、「ek (来る)」の場合、すべて英語のパーフェクト (Perfect) 形式で訳されている (ne はアイヌ語のコピュラである)。

この段階では、アイヌ語の「a」は明らかに助動詞とされていないが、その意味機能は英語のパーフェクト (Perfect) に相当するものであることがうかがえる。しかし、「a」は、現在にすでに明らかになっているように、疑問文よりも平叙文の方により多く現れる。「a」が疑問文において疑問の機能を持つとしているのは、おそらく文末に現れているからで、そのことからそのまま「疑問助詞」としたのだろう。ただ、平叙文に現れる場合、「a」がどのような機能を持っているのかについては、Batchelor (1903) では記述されていない。

2.1.2. 金田一京助 1931

日本人の研究者による、最初の体系的なアイヌ語の文法記述は、金田一 (1931) の『語法概説』¹³だと言える。ただ、金田一 (1931) はアイヌ語の音韻、形態、統語を全体的に記述したもので、**「a」**についてはとくに詳しい論述はしていない。金田一 (1931) は「a」を完了態 (Perfective) の助辞とし、下記のように述べている。

a (単数) , rok (複数) は坐すると云ふ動詞である。助辞に用ゐられ、人称辞を採らずに用ゐられて、「ちやんと……した」意、即ち完了の様な意味を表す。而もその結果の今まで及んであるやうな心持を持つてゐることがある。(金田一 1931 : 161 漢字表記は現在通用の表記に直して引用している)

この記述では、「a」は動詞の「a (座る)」から文法化し、「助辞」という文法的な成分になったとされている。また、その意味機能はアスペクトの完了態 (Perfective) とされている。「ちやんと……した」という意味記述は、過去という意味のことを言っているのであろう。そして、「而もその結果の今まで及んである」は「現在との関連性」のことを言っていると考えられる。これらの特徴からすると、この記述における「完了態 (Perfective)」は Comrie (1976) でいう「Perfect」の定義に相当するので、金田一 (1931) は「a」は完了 (Perfect)¹⁴を表すとしていると考えられる。また、「心持」という言葉が使われているが、これはムードと関わるものだろう。金田一 (1931) はこの記述を証明するため、下記のような例文を挙げている。

¹³ これは南西部方言に基づいた研究だろうと思われるが、断定できない。アイヌ語の南西部方言とは、服部・知里 (1960) がいう新冠・平取・貫気別・幌別のあたりの方言のことである。すなわち、今でいう沙流川流域の周辺、および幌別の近くの方言のことである。

¹⁴ 本論では、他の文献から引用する場合を除き、「完了」は「Perfect」の訳語に、「完結」は「Perfective」の訳語として用いる。

Shramkutturi chiki aike Oina kamui

よくよく考へて見 たる に オイナ 神が

kene inumpe kan rok oka.

榛の 爐ぶちを 作つ たのであつた

.....

Echi-moshma-okaipe aeramu kusu yaitupare-an ma

外からぬ汝等をこそ 我思ふ 故に 用心 (我) し て

anuina a chep echi-e shiri-an!¹⁵

(我) かくして あつた 魚を 汝等食つた のだなあ

(金田一 1931 : 161 省略は論者による

なお、漢字表記は現在通用の表記に直して引用している)

ここに挙げられた二つの例文における「a」をよく見てみると、「a」が現れる階層がそれぞれにおいて異なっていることがわかる。一つ目の例文にある「rok」は「a」の複数形式であるが、主節の動詞の直後に現れている。一方、二つ目の例文にある「a」は連体修飾節の動詞の直後に現れている。ここから金田一(1931)は、「a」は統語的な位置が異なっているけれども、同じくパーフェクト (Perfect) を表わすと考えているようである。

しかしながら、アスペクト研究の蓄積が多い日本語学では、「タ」は終止する文の文末では「現在パーフェクト」を表わす¹⁶が、修飾節の場合は、「困った人」のように、ただの状態を表わすということがすでに明らかにされている。論者はアイヌ語の「a」が日本語の「タ」と同じだとは考えていないが、金田一(1931)とは異なり、「a」に関する記述は主節の場合と連体修飾節の場合に分けて、行う必要があるかと考えている。

2.1.3. 知里真志保 1936

知里(1974[1936])も、アイヌ語の音韻、形態、統語の全体的な記述である。金田一(1931)が「a」を「態の助辞」に分類しているのに対して、知里(1974[1936])は「a」を「法 (mood)」の確説法の助詞としている。その機能については下記のように述べている。

¹⁵ この例文におけるアイヌ語のローマ字表記は、今の音節表記と異なるところがある。例えば、shi⇒si, chi⇒ci のように簡素化されている。また、閉音節の末の i は y で表記されている。なお、研究者の間でも表記の分ち書きの仕方は一定していない。本論では例文を引用する際には、例文の表記は引用元のままにする。

¹⁶ 工藤(1995 : 128) の「シタ」のパーフェクト機能の記述を参照されたい。

a は本来「坐つてゐる」といふ意味の動詞である。これが助詞化して、動作を確定したものとして述べるのに用ゐられる。従つてそれは動作の完了又は過去を示してゐることが多い：—

oman a? (=oman ruwe?)

行つ たか

oman a. (=oman ruwe-ne.)

行つ たよ

知里 (1974[1936] : 157)

知里のこの説明はあまりにも簡略で、よく分からないところが多い。動作の確定とは、モダリティ的に断定という意味だろうと思われる。とすれば、この記述にある「動作の完了」と「過去」という言葉に加えて、「a」はモダリティ、アスペクト、テンスという三つの機能を持っていると思われる。しかし、この記述で挙げられている例文はすべて文末に現れたものである。文末に現れる「a」以外の、例えば従属節や修飾節にある「a」はどうなるのか。論者は、この記述はそれらの場合にただちに適用することはできないと考える。本論で検証する必要がある。

2.1.4. 田村 (福田) すゞ子 1960

沙流方言の記述的な研究である田村 (福田) (1960) は「a」を助動詞として、下記のように説明している。

「現在問題になっている時よりも以前に行動が行われたこと」を表す《…した》. 現在からみて実際には過去のできごとであっても、それ以後のできごとが問題にされているのでなければこの助動詞は用いられない。

kumímaki 'ani kapú kukár wa ké 'a wa.

(わたしの) 齒 で 皮をむいてたべたよ

りんごの皮をむくためにほうちょうを持って行って渡そうとしたらこう云った. もうたべてしまったからほうちょうはいらない, という気持. ほうちょうを持って来た今と比較. (田村 (福田) 1960 : 71)

この記述から、「a」は意味的に過去を表わすことはわかる。また、この説明は「完了」という言葉を使っていないが、「a」はこれまでの先行研究と同じく、アスペクトの「完了」を表わすとしているようである。ただ、この点について、本稿でデータに基づく検証を行う必要がある。なお、「現在」という用語については、その脚注で「表現者」が「表現」をしている時」とされているが、下記の

例文から推測すると、発話者の発話時点を指していると見ていいだろう。

'a-kór a setá ne nóyne 'án.

わたしたちが持っていた犬であるらしい
どこかへ行ってしまっ見失っていた犬を見つけた時の
ことば. 今飼っていないが前に飼っていた, という気持.

.....

móymoyke kor án ap somó móymoyke.

動いていたものが動かなくなった
動かなくなった時と比較 (what has been moving
stopped moving.)

'ápto 'ás a kórka sirmeman ka somó ki.

雨が降ったけれど涼しくならなかった
雨が降ったあと涼しくならなかった, という気持. 涼し
くならなかった時と比較.

cf. núman 'ápto 'ás.

きのう 雨が降った

比較する時がないので, 昨日のことでも 'a は用いらない.

(田村 (福田) 1960 : 71 省略は論者による)

上記の例文にある「a」は、いずれも前のできごとと後のできごととの比較、
そういう気持ちを表わすものとされている。しかし、田村 (福田) (1960) でも
金田一 (1931) と同じく、「a」が位置する文の階層については議論していない。
「a」は一つ目の例文では修飾節内にあるが、二つ目と三つ目の例文では文の従
属節に位置している。

また、この記述からすると、「a」は「現在完了」を含め、二つのできごとの関
係を表わすというふうに理解できる。ただ、二つのできごとがどちらも言語化さ
れているわけではない。例えば、一つ目の文では、前のできごと「a-kor (わたし
たちがもっている)」はその文に現れ、言語化されているが、後ろのできごと「今
飼っていない」は言語として現れていない。一方、二つ目の例文では、前のでき
ごと「moymoyke kor an (動いている)」と後ろのできごと「somo moymoyke (動
かない)」はどちらも文に現れ、言語化されている。

なお、二つのできごとを繋ぐ役割があるというのなら、この記述ですでに言及
されている「現在完了」以外に、何か別の機能があるだろう。日本語のテキスト

研究において、アスペクト形式は「継起性」を表わすこともあるとされている¹⁷。この点から考えると、アイヌ語の「a」が表わす二つのできごとの関係はテキストレベルにおいて、類似した機能があるかどうか、検討する必要があると思われる。

2.1.5. 佐藤知己 2006, 2007, 2008

千歳方言の研究である佐藤（2006）は、「a」を助動詞とし、その機能について下記のように述べている。

(32) okkaypo onuman ipe ki wa ek a ruwe?

若者 夕食 する て 来る た の

「あんちゃん、晩ご飯食べて来たの」

tane ku-ype a wa.

今 1SG-食べる た よ

「もう私は食べたよ」

(33) ku-nukar pekor ku-yaynu a wa.

1SG-見る ように 1SG-思う た よ

「私は（確かに）見たように思ったよ。」（今、現に、そう思っている）

これらの例文における助動詞 a は通常は明白な結果を含意しない (A・3) 「主体動作動詞」に属すると思われる ipe (ku-の後で ype に交替) 「食事する」、(B) 「内的情態動詞」に属すると思われる yaynu 「思う」の後に現れて、明らかに「動作パーフェクト」を表わしている。(佐藤 2006 : 64)

この記述は「a」を動作パーフェクトの助動詞¹⁸としている。ただ、この記述があるページの脚注には、「a は明白に過去に属する事実に対しても用いられる」と書かれている。とすると、千歳方言の「a」はテンス的には過去という機能を持ち、アスペクト的には動作パーフェクトの機能を持っている、ということになる。

また、佐藤（2007）はさらに完了の意味を細分化した日本語の肯定、否定とアイヌ語の「a」とを比較する中で、「a」は動作結果が知覚不可能な完了だとしている。そして、佐藤（2007）も英語と日本語の完了形が表わす機能と比較して、「a」について下記のように述べている。

¹⁷ 工藤（1995 : 239）を参照されたい。

¹⁸ 佐藤（2007）がいうパーフェクトは本論における「完了 (Perfect)」に相当する。

アイヌ語の **a** は、「過程」を表わす場合に使用可能であることは疑いないが、「効力」の場合は事情が異なる。**henpak suy ka Sapporo ta k-arpa a wa**. 「何度か札幌に私は行ったよ。」という文は「行ったことがある」という効力を表わすとも考えられるが、他方、過去とも過程継続ともみなすことができ、効力を意味するかどうかはむしろ文脈に依存する、と言ったほうがより適切であろう。(佐藤 2007 : 11)

この記述にある「過程」は鷺尾・三原 (1997) がいう英語の「過程所有」に基づくものである。鷺尾・三原 (1997 : 131-132) によると、「過程所有」はできごとの効力が過程 (process) 的に存続することを指す。「過程所有」はあるできごとが様々な状況と結びつき、複合的に現れることがあり得るとされている。また、「効力」は「効力所有」のことである。「効力所有」とは、過去のできごとがある種の効力を伴って発話時と関連していることである。

「**a**」は完了 (Perfect) を表わす以上、「過程」に当たる意味を表わす。逆に「効力」に当たる意味を表わすのは文脈による。「**a**」が表わす「過程所有」は、田村 (福田) (1960) のできごとの間の関係性を想起させる。本論はこれらの成果を踏まえて、「**a**」のできごとの間の関係性を再度議論することにする。

また、上記の意味記述以外に、「**a**」の構文的な特徴を初めて指摘したのは佐藤 (2006) である。佐藤 (2006) は「**a**」の構文的な特徴について、下記のように述べている。

a は明白に過去に属する事実に対しても用いられる。例 : **k-onaha tapkar siri ku-nukar a wa** 「父が踏舞するのを私は見たよ。」他方、文法的な観点から言えば、**a** は平叙文を終止することがなく、接続助詞、名詞句、あるいは終助詞 **wa** が後続するのが一般的である。このことは、**a** を含む構造が文の階層構造から言って中間段階に属することを示すものと考えられる。(佐藤 2006 : 64)

「**a**」に接続助詞が後続するのは従属節の節末に現れる場合であろう。そして、「**a**」に名詞句が後続するのは連体修飾節の節末に現れる場合を指しているだろう。また、「**a**」に終助詞「**wa**」が後続するのは単文あるいは主節の末に現れた場合であろう。いずれの場合においても、「**a**」は文の最後に現れることがない。この事実は、論者が集めたデータで検証した際にも確認された。

「**a**」がこのような構文的特徴を示す理由について、佐藤 (2006) は「**a**」を含む構造が文の中間段階に属するからだというふうに考えている。本論はこの指摘から展開し、単文あるいは主節の節末、従属節の節末、連体修飾節の節末の各

場合に現れる「a」に分けて、それぞれにおける「a」が表わす機能を検証していくことにする。また、後述になるが、文レベルとテキストレベルという概念を持ち込んで議論することにする。

ちなみに、「a」は平叙文の文末では、終助詞の「wa」だけでなく、下記のように、「p un」、「ruwe tapan na」などの形式とも共起し、文を終止している。

- (23) ø-esisuyatpa kor ø-en-kore
 3SG.SBJ-を腕全体で急激に振る ながら 3SG.SBJ-1SG.OBJ-くれる
 kuni ø-ye a p un
 と 3SG.SBJ-言う PRF もの SFP
 「(彼は) 腕を大きく振りながら、
 私にしてくれると言ったんだよ」(田村 1996 : 127)

- (24) tapne kane uirwakne utar ka,
 このように 兄弟 人々 も
 a-ukóytak-te a ruwe tapan na
 1PL.INCL-互いに話す-CAUS PRF こと SFP
 「このようにきょうだいの人々にも、話し合いさせたのですよ。」
 (田村 1984 : 14-15)

例 (23) の「a」を含む文は「p un (ものよ)」で終止している。例 (24) は「ruwe tapan na (ことよ)」によって「a」の文が終止している。「ruwe tapan na (ことよ)」は「ruwe ne」の改まった言い方、強調した言い方だと思われる。これらの形式はいずれも「wa」と同じく「a」に後続して文を終結しているので、本論ではこれらの形式を文末要素として考えて議論することにする。

また、「a」は平叙文の文末に立つことがないが、佐藤 (2008 : 79) が指摘するように、疑問文の文末には立つことができる。

- (25) e-ype a?
 2SG.SBJ-食事する PRF
 「お前食事したか。」 (佐藤 2008 : 209)

例 (25) に示されるように、「a」の疑問文は、接続助詞、名詞句あるいは終助詞「wa」の後続がなくとも、自然な文になっている。このような構文現象は、他

の時間や意志を表わす助動詞には見られない¹⁹。なぜ、「a」は疑問文の文末に立つことができるが、平叙文の文末に立つことができないのだろうか。本論は、この現象を切口として「a」の機能を再検討することにする。

なお、従属節と主節²⁰から構成される複文においては、「a」は時間と関係する意味を表わすと思われるが、その機能について佐藤（2008）は下記のように述べている。

上記の二つのような例は、「履いたこと」、「いたこと」がやはり現在から見ると何か注目に値する行為であったという含意がある可能性もあるけれども、どちらかと言えば現在との関係が不明瞭であり、なお一考を要する。一般に従属節の時制は主節に頼る傾向が強いけれども、アイヌ語では主節にも時制がないので、a にはそのような場合に主節との時間的な関係を明確にするという機能があるかもしれない。（佐藤 2008：188）

この記述は、「a」が従属節と主節の時間関係を明確にする機能がある、という可能性を指摘している。また、現在との関係が不明瞭であるので、この時間関係が時間軸上の前後関係なのか、同時関係なのか、あるいはタクシス的な先行関係なのか、継起関係なのか、色々な可能性が考えられる。本論はこのような時間関係を念頭に置いて、「a」の例文を挙げながら、議論していくことにする。

2.1.6. 吉川佳見 2020

最後に、吉川（2020）は、沙流方言と千歳方言に基づいて「a」が「Perfective」と直接証拠性を表わすことを主張している。

a が従来説明されてきた perfect ではなく、perfective を示す性質があることを主張したうえで、アスペクチュアルな意味から離れた例外的な用例を証

¹⁹ 「a」のこのような構文的特徴はアイヌ語において特殊な存在だと思われる。なぜかという、他の時間や意志を表わす助動詞はすべて文末に立つことができるからである。本論ではいちいち例文を挙げないが、例えば以下の形式の例文については、佐藤（2008）や田村（1997a）を参照されたい。

「kor an（ている）」（佐藤 2008：39）、「wa an（ている）」（佐藤 2008：68）、「nisa（し終わったところ）」（佐藤 2008：84）、「rusuy（したい）」（佐藤 2008：93）、「kusu ne（つもりだ）」（田村 1997a：12）、「okere（終わる）」（田村 1997a：67）。

後述の内容になるが、「a」のこのような構文的特徴から、論者は文レベルとテキストレベルの意味を統合し、「継起性」が「a」の中心的な意味だということを提案している。

²⁰ 複文の場合は「従属節」と「主文」と呼ぶべきだが、本論では野田ほか（2002）に従い、「従属節」と「主節」で統一する。

拠性 (evidentiality) の観点から捉え、a は直接証拠性を標示しうる形式であると提案する。(吉川 2020 : 203)

この記述は、「a」がアスペクトとモダリティの二つの機能を持っていると主張しているが、この主張を証明するための例文は、文末の「a」のものではなく、ほとんどが下記の例 (26) のような従属節における「a」のものである。

- (26) a-kor Iskar anak pon uske ta anak nay pakno
 INDF.SBJ-を持つ 石狩川 TOP 小さい とき に TOP 沢 ほど
 ø-an oraun, ø-poro kor anakne to néno kane
 3SG.SBJ-ある そして 3SG.SBJ-大きくなる と TOP 沼 そっくり
 ø-an poro pet ne p ne a p, (nay s...) pet
 3SG.SBJ-ある 大きい 川 COP もの COP PRF が 川
 sat híne nay néno kane ø-an rápok ne hike
 3SG.SBJ-乾く て 沢 そっくり 3SG.SBJ-ある の間に COP が
 petkasu-an híne, okusne wa yán-an ruwe ne.
 川を渡る-1SG.SBJ て 向こう側 から 上がる-1SG.SBJ こと COP
 「石狩川は水が少ない時は沢ぐらいで、
 水が多くなると沼のような大きな川になるのですが、
 その時は川が水がなくなって沢のようにになっている時でしたが、
 私は川を歩いて渡って、向こう岸へ上がったのでした。」

(田村 1988 : 76-77)

もっとも、従属節における「a」に関しては、佐藤 (2007 : 11) が指摘したように、「相対時制」の問題があるので、文末の「a」と合わせて議論をすべきではないと思われる。吉川 (2020) は金田一 (1931) と佐藤 (2006) への反論としてこの例を挙げているが、この例は「a」が「完了」を表わすという従来の主張への反論としては適切な例ではないと思われる。

また、例 (26) の例文を見ればわかるように、「a」を伴う述語は「pne」(ものである) によっていったん名詞化されており、状態化された述語は完了を表わすことはできないだろう。工藤 (1995 : 26) が述べているように、時間のなかでの動き (運動) をとらえながら、文の述語としてはたらく動詞においてこそ、アスペクト・テンスの体系が成立するのである。故に、「a」のアスペクト機能を議論する場合、「a」が用いられた動詞を、動作動詞 (変化動詞を含む) のような時間軸上で展開のできる動詞を中心とする必要があると考えられる。吉川 (2020) にはそのような議論は見られない。

なお、吉川 (2020) ではアイヌ語の「a」は直接証拠性の機能を果たすとも指摘されているが、連体修飾の場合、必ずしも証拠性を表わさない。

- (27) ora roruyso ka ta,
 そして 東側の床 上 に
 Okikurmi kamuy ø-kor katkemat ø-eymek a rika
 オキクルミ 神様 3SG.SBJ-持つ 奥様 3SG.SBJ-配る PRF 脂身
 a-osúra tek híne ø-an ruwe ne.
 INDF-を投げる ちょっと て 3SG.SBJ-いる こと COP
 「そして東側の床の上に、オキクルミの奥様が
 配った脂肉がポイと捨ててありました。」(田村 1989 : 60-61)

- (28) tan senpe, as, as, a, tap a-kar
 この せんべい (言い間違い) 今 INDF.SBJ-を作る
 pe ne a noyne ka,
 もの COP PRF らしい も
 ø-kawnukawnu, wa, pirka.
 3SG.SBJ-かりかりする て 良い
 「このせんべい今作った
 ものであったみたいに
 かりかりしていい」(佐藤 2012 : 101)

例 (27) は、オキクルミの神の奥様が肉を貧乏な夫婦に配ったところ、その夫婦に引っ張られて姿が見られたので、オキクルミの神が怒って雷でその夫婦を殺したという話に出てくるものであるが、同じ村の若者たちがその夫婦の殺された現場に駆け付けた時に見た情景を述べたものである。吉川 (2020) によると、直接証拠性 (direct evidentials) は、話者が述べている動作やできごとについて知覚的な証拠がある場合に用いられる。この場合、オキクルミの神の奥様による「rika aosura (脂身を配る)」ことの結果は知覚できた可能性があるが、そのオキクルミの神の奥様が「eymek (配る)」動作は、話者は見てはいないから、知覚できないと思われる。ゆえに、この場合、「a」は直接証拠性を表わすとは言えないであろう。例 (28) も同じように、話者はせんべいを作った場面を見ていないと推測される。そのため、「kar (作る)」動作を知覚できないと思われるので、この場合の「a」も直接証拠性を表わすとは言いにくいと考えられる。

本論は「a」の時間表現について議論するものであるため、「a」のモダリティ機能についてはこれ以上の議論を行わない。

2.1.7. 先行研究における「a」の問題と本論の立場

以上、「a」に関する先行研究を概観した。その時間表現に関する主張およびその問題については以下のようにまとめることができる。

1. 「a」は過去を表す。この点についてはすべての先行研究において同じ認識であるため、議論する余地はない²¹。現在のアイヌ語研究では、アイヌ語はテンスを持たないとされている（田村 1997a : 12）。ゆえに、本論では「a」のテンス的な機能については必要なところで触れるが、詳しい議論はしない。なお、論者が手元にある資料を調べた限りでは、この結論の例外となる例文は見当たらない。
2. 「a」は完了あるいはパーフェクト (Perfect) ²²を表す。この主張は定論にはなっていない。金田一 (1931) は「完了態 (Perfective)」という言い方を用いており、おそらく、パーフェクト (Perfect) を指していると思われるが、確定はできない。知里 (1974[1936]) は「a」をムード助動詞として記述しているが、「a」が多くの場合に完了を表すことを否定していない。田村 (福田) (1960) は明確に「完了」という言葉を使っていないが、その記述から推定すると、「a」が完了を表わすとしていると理解される。佐藤 (2006) は「a」を動作パーフェクトとしている。さらに、佐藤 (2007) はそのパーフェクトが知覚不可能なもので、過程の意味を持つことを主張している。また、吉川 (2020) は「a」がパーフェクト (Perfect) を表わさないと主張している。
3. 「a」は「Perfective」を表わす。これを主張しているのは吉川 (2020) だけである。しかし、吉川 (2020) がこの結論を導く際に用いたデータはほとんどがテキストレベルのものであり、果たしてその結論が妥当かどうかは、再検討する必要がある。
4. 「a」はモダリティ (ムード) の助動詞である。この立場に立っているのは知里 (1974[1936]) と吉川 (2020) である。知里 (1974[1936]) は「a」を「ruwe ne」と同じように扱っていて、確説のムードに分類している。吉川 (2020) は「a」が直接証拠性のモダリティを表わすと主張している。

²¹ ちなみに、中川 (1995 : 1) も「a」を助動詞とした上で、それ以前に起こった出来事を表わすと述べている。つまり、「a」が過去を表わすということを認めている。

²² 本稿は引用文献以外に、「完了」という日本語の訳語をすべて英語の「Perfect」に対応させ、「完結」を「Perfective」に対応させている。

5. 「a」は前のできごとと後ろのできごとの関連性を表わす。この主張は田村（福田）（1960）だけである。できごとの間の時間関係というのが、その記述から推定される「完了」以外に、例えば、テキストレベルで何か別の機能があるのか、田村（福田）（1960）は議論していないので、更に検証する必要がある。

6. 「a」は平叙文の文末には立たないが、疑問文の文末には立つことがある。この構文的特徴を記述しているのは佐藤（2006, 2008）だけである。佐藤（2006, 2008）において示唆的な記述があるが、それ以後、詳しい議論は見られない。

7. 「a」に関するデータは多くの場合、ukoysoytak（会話）、uwepeker（昔話）、upaskuma（伝説）、upopo（輪唱歌）、horippa（踊り歌）、yaysama（即興詩）、kamuyukar（神謡）、yukar（英雄叙事詩）などのようなテキストレベルのものであるが、テキストレベルでの「a」の機能に関する議論は見られない。

以上の先行研究の問題をふまえ、本論では下記のような「a」の時間表現に関するものを本論の課題とし、検討していきたい。

I. 「a」の意味機能はパーフェクト（Perfect）なのか、それともパーフェクティブ（Perfective）なのか、あるいはそれ以外なのか、もう一度議論する余地がある。

II. 「a」が表わす前のできごとと後ろのできごととの関連性について、時間表現における位置づけをさらに明確にする必要がある。

III. 「a」は平叙文の文末には立つことができない、疑問文の文末には立つことがあるという構文現象について、その理由を探る必要がある。

IV. 「a」のテキストレベルにおける時間表現の機能を考究する必要がある。

後述するが、中国語の「過」は「a」と文レベルにおいてもテキストレベルにおいても類似した構文を持っている。本論は中国語の観点から、中国語の「過」と「a」の類似性に注目しながら、その異同についても対照研究を行っていくことにする。

2.2. 中国語の「過」に関する研究と問題

2.2.1. Chao Yuanren 1968

Chao（1968）は、下記のように空間表現と時間表現の「過」を分けている。そ

して、時間表現においては、統語と意味によってさらに「過」を2種類の「過」に分けている。

(6) 过_o-*guoh*. The verb *guoh* ‘passes’ in the spatial sense can be used as a directional complement, as in 乜, 你走过了! *Èh, nii tzoou-guohle!* ‘Say, you have walked past it!’ In the temporal sense, *-o-guohle* is a phase complement, as in 我吃过了饭就走。 *Woo chy_oguohle fann jioo tzoou.* ‘I will go as soon as I have finished my dinner.’ 你错过了一个好机会。 *Nii tsuoh_oguohle ig hao-ji.huey.* ‘You erred past, —missed a good opportunity.’ But in 我也吃过法国饭(的) 。 *Woo yee chy.guoh fah.gwo fann. (de)* ‘I have eaten French food, too.’, the neutral-tone *-o-guoh* is a suffix for the indefinite past aspect and is incapable of taking another suffix *-le*. Both this phase complement and the aspect suffix can occur in the same sentence, as: 他从来没有错过好机会过。 *Ta tsornlai mei tsuoh_oguoh hao-ji.huey-guoh.* ‘He never missed a good opportunity.’ 哪儿啊? 他错过过! *Naal a? Ta tsuoh_oguoh.guoh!* ‘Who said he hasn’t? He has!’ (Chao1968 : 450 なお、漢字表記は現在通用の表記に直して引用している)

本論は「過」に関する時間表現を対象とするので、時間表現の「過」だけを取り上げることとする。上記の記述から、「過」は二つの機能を持っていることになる。一つは、「過」が「了」を伴って「**phase complement**」となる場合である。

「**phase complement**」は時間表現に関する補語のことだと思われる²³。すなわち、この場合の「過了」はアスペクトを表わす補語である。もうひとつは、「了」を伴わない「過」で、不定過去アスペクトの接尾辞 (**suffix for the indefinite past aspect**) の場合である。

アスペクト補語について、この研究段階ではその機能が明確されているが、具体的に **perfective** なのか、**imperfective** なのか、あるいは別の意味なのか、まだ明確になっていない。不定過去アスペクトの接尾辞について、後述の先行研究における「経験」という意味として理解することができるだろう。

また、以上の記述から、「過」は時間表現において、統語的に「了」と共起するかどうかによって、異なる二つの「過」に分けられることがわかる。ただ、なぜこのような現象が起きるのか、その議論が行われていない。

²³ Chao (1968) の「**phase complement**」について、呂叔湘は「动相的补语 (動詞相の補語)」と訳している (趙 2005 : 210)。丁新邦は「状態補語 (状態の補語)」と訳している (趙 1980 : 230)。本論は「**phase complement**」を「相の補語」、すなわち「アスペクト補語」として理解する。

2.2.2. 朱徳熙 1982

朱(1982)は、「過」という形式を接尾辞の「過」と動詞の「過」に分けているが、時間表現に関する「過」は接尾辞だけだと主張している。時間表現の「過」については下記のように述べている。

5.15.7 “过”表示曾经发生过某事或曾经经历某事，跟后缀

“了”不同。比较：

你动了手术没有？

你动过手术没有？

(「過」は、かつてあるできごとが発生したこと、あるいは、かつてあるできごとを経験したことを表わす。接尾辞「了」とは異なる。比較せよ：

あなたはすでに手術をしましたか？

あなたは手術をしたことがありますか？)

(朱 1982 : 72 訳は論者による²⁴)

この記述からすると、時間表現において「過」は過去と経験の意味を持っていることになる。その統語的な特徴は、動詞の「過」と比較すると、以下のようになる。

5.15.8 要注意后缀“过”和动词“过”的区别。比较：

爬・过山没有？

爬过山就到了。

前一句里的“过”是动词后缀。这句话的意思是问有没有爬山这种经历。后一句里的“过”是动词做补语，这个“爬过”是越过的意思。前一句的“过”本身是后缀，后头不能在加后缀“了”，后一句的“爬过”是述补结构，后头还能加后缀“了”。

(接尾辞「過」と動詞「過」の違いには注意しなければならない。比較せよ：

山を登ったことがありますか？

山を越えたら、すぐ着くよ。

一つ目の文にある「過」は動詞接尾辞である。この文の意味は「山に登る(爬过)」という経験があるのかどうかというものである。二つ目の文にある「過」は動詞が補語になったものであり、この「越えたら(爬过)」は越えてすぎるという意味である。一つ目の文にある「過」はそれ自身が接尾辞であり、後ろに接尾辞「了」を付加することができない。二つ目の文にある「過」

²⁴ 本論では、朱(1982)の引用部分を日本語に訳す際、すでに刊行されている日本語の訳本である朱(1995)を参照した。

は述補構造なので、後ろには接尾辞「了」をさらに付加することができる。) (朱 1982 : 72 訳は論者による)

動詞接尾辞の「過」は接尾辞「了」と共起することができない。動詞であり、補語として働く「過」は「了」と共起することができる。この記述におけるこのような「過」の統語的特徴は、Chao (1968) とほぼ同じである。Chao (1968) よりも「過」の意味を明確に述べていると言えよう。ただ、「了」を伴う「過」の意味解釈については、Chao (1968) の「アスペクト補語」とは異なり、「動詞が補語になったもの」と主張している。そして、その動詞としての意味は「越える」という意味だとしている。

また、Chao (1968) がいう「過」と「了」の共起は、動詞の後ろの「了」のことであり、朱 (1982) の場合はその 2 番目の例文で分かるように、「了」は動詞の後ろの「了」ではなく、複文の主節の末の「了」のことである。この点において、両者は異なる。しかし、Chao (1968) においても朱 (1982) においても、意味を説明する際に使われた例文は、単文であったり、従属節を含む複文であったりして、明確に文レベルとテキストレベルを区別していない。

2.2.3. Li and Thompson 1981

先述の研究に対し、Li and Thompson (1981) は唯一、「過」を文レベルとテキストレベルに分けて記述したものである。ここでいう文レベルは「過」が文の述語部分に現れる場合のことである。すなわち、単文の文末か、複文の主節の末に位置する場合のことである。Li and Thompson (1981) は「過」が経験のアスペクト接尾辞 (experiential aspect suffix) であるとして下記のように述べている。

The aspect suffix *-guo* means that an event has been *experienced* with respect to some reference time. When the reference time is left unspecified, then *-guo* signals that the event has been experienced at least once at some indefinite time, which is usually the indefinite past.

(169) wǒ chī - guo Riběn fàn
I eat - EXP Japan food
I've eaten Japanese food (before).

(Li and Thompson 1981 : 226)

この記述は接尾辞の「過」(suffix *-guo*)²⁵の意味を明確にしている。すなわち、

²⁵ 「guo」は「過」のピンイン表記である。

明確な参照時点がない場合、「過」はあるできごとが過去に少なくとも1回起こっていることを表わす。また、複雑な文（テキストレベル）における「過」について、Li and Thompson (1981) は下記のように触れてはいるが、詳しくは議論していない。

Third, *-guo* is not used in a context in which the focus is on the simple fact that an event or a series of events occurred.

.....

(188) wǒ zuótiān wǎnshàng kàn $\left[\begin{array}{l} -le \\ *-guo \end{array} \right]$ diànshì, féng $\left[\begin{array}{l} -le \\ *-guo \end{array} \right]$
 I yesterday evening watch $\left[\begin{array}{l} -PFV \\ *-EXP \end{array} \right]$ TV sew $\left[\begin{array}{l} -PFV \\ *-EXP \end{array} \right]$
 liǎng - shuāng wàzi jiu qù shuì
 two - pair sock then go sleep
 - jiào
 - sleep

Last night I watched TV, sewed two pairs of socks, and went to bed.

(Li and Thompson 1981 : 230-231 省略は論者による)

この記述は、「過」はできごとまたは一連のできごとが発生したという単純な事実に焦点が当てられている文脈では使えないとしている。しかし、後述するが、この説明にある例文のような文は文レベルの文として扱うべきではなく、テキストレベルで扱うべきだと考えられる。ちなみに、論者の語感では、例文のようなテキストには「過」は普通に用いることができる。

また文レベルにおける「過」の構文的特徴について、Li and Thompson (1981) は下記の例文のように、「Perfective」の「了」と共起しないと述べている。

(29) wǒ chī - guo - (*-le) bāla
 I eat - EXP - -PFV guava
 I have eaten guava before. (Li and Thompson 1981 : 204 (77))

(30) tā qù - guo (*-le) Xiānggǎng
 3sg go - EXP -PFV Hong Kong
 S/He has been to Hong Kong. (Li and Thompson 1981 : 204 (78))

確かに、例 (29) と (30) が示すように、「了」と共起した場合は不自然な文になる。この記述はそれまでの研究の記述と同じである。しかし、同じような構文で、次のような文に変更すると、その文は自然になると思われる。

(31) (When asked whether you have had your lunch)

wǒ chī - guo - le
1SG eat - EXP - -PFV²⁶

I have had my lunch.

(Li and Thompson1981 : 204 (77) の改変)

(32) (When asked whether S/He has been to Hong Kong)

tā qù - guo - le
3SG go - EXP - PFV

S/He has been to Hong Kong.

(Li and Thompson1981 : 204 (78) の改変)

中国語学においては、「了」は、「Perfective」の「了」と sentence final particle の「了」の二つに分けて研究されることが多い²⁷。この Li and Thompson (1981) も同じである。しかし、上記の例 (29) ~例 (32) からわかるように、似たような構文においても「過」と共起した場合に、自然になる文とならない文がある。異なる「了」の機能によって、「過」の意味機能に変化が生じているのかどうかについては、これまでの研究では議論されていない。

また、Li and Thompson (1981 : 203) が挙げる例 (29) と例 (30) にある「過」は、確かに「過去にそのできごとが 1 回以上経験されている」(the event has been experienced at least once) という意味に焦点を当てている。しかし、論者の調査によると、例 (31) と例 (32) にある「過」は、すでに過去に経験したできごとではなく、現在のできごとに焦点を当てている。このような意味変化が起った理由についても、当然、これまでの記述では問題にされてこなかった。

2.2.4. 呂叔湘 1999[1980]

呂 (1999[1980]) は、「過」を動詞の「過」と助詞²⁸の「過」の 2 種類に分けて

²⁶ 本論では、先行研究から例文を引用したり、その例文をもとにした説明の例文を作成したりする場合、その助詞や助動詞についているグロスは、すべてその先行研究で認められている機能のままにする。これは論者が先行研究における機能をそのまま認めていることを意味しない。この点について念のためここで断っておく。

²⁷ 木村 (1997, 2006) などを参照されたい。

²⁸ ここでいう助詞は、呂 (1999[1980]) の注釈によると、動態助詞のことである。日本語の助動

いる。動詞の「過」は、Chao (1968)、朱 (1982) と同じく、他の動詞に後続して、その結果や方向などの意味を表わす。助詞の「過」はさらに2種類に分けられるとしている。

1. 用在动词后，表示动作完毕。这种‘动+过’也是一种动结式，但不同于一般动结式，中间不能插入‘得’、‘不’，也没有否定的说法。后面可以带语气助词‘了’。

吃～饭再去|赶到那儿，第一场已经演～了|等我问～了他再告诉你

2. 用在动词后，表示过去曾经有这样的事情。动词前可加副词‘曾经’。

这本小说我看～|去北京的事他跟我提起～|我们曾经谈～这个问题|我找～他不止一次|我们走～不少地方，就是没有到～桂林

(1. 動詞に後続し、動作の完結を表わす。この「動詞+過」も動詞結果型の一つであるが、一般的な動詞結果型と異なり、その間に「得」、「不」を入れることができず、否定の言い方もない。後ろには語気助詞の「了」を伴うことができる。

ご飯を食べてから行く。|そこに駆け付けると、第一の演目はすでに演じ終わっていた。|彼に聞いてからあなたに知らせる。

2. 動詞に後続して、過去にそのようなできごとがあったことを表わす。

動詞の前に副詞「かつて (曾经)」を付加することができる。

この小説は、私は読んだことがある。|北京に行くことは、彼は私に話したことがある。|私たちはかつてこの問題を議論したことがある。|私が彼を訪ねたのは一度だけではない。|私たちは多くのところに行ったことがあるが、桂林だけに行ったことがない。)

(呂 1999[1980] : 246-247 日本語訳は論者による²⁹⁾)

上記の記述を参考に、ここでは呂 (1999[1980]) がいう2種類の助詞「過」をそれぞれ「過₁」と「過₂」と仮に呼んでおく。「過₁」は上記の「1.」の意味を表わすもので、「過₂」は上記「2.」の意味を表わすものである。

この記述からすると、呂 (1999[1980]) の「過」の分け方は、意味によるものだと考えられる。「1.」の説明では、語気助詞「了」を後続することができることと述べているが、「過₁」と「過₂」になぜそのような違いがあるのか、この記述では掘り下げていない。また、挙げられている例文からすると、その意味の区分けは文の構造とはかかわりがないと思われる。それらの例文にある「過」は明らかに

詞に相当するものであろうが、ここで引用する際には、中国語学の用語に従うことにする。

²⁹⁾ 本論では、呂 (1999[1980]) の引用部分を日本語に訳す際、すでに刊行されている日本語の訳本である呂 (2003) を参照した。

文の異なるレベルに位置しているにもかかわらず、同じように扱われている。つまり、「過」は文レベル（文末）においてもテキストレベル（従属節の節末）においても同じ意味を表わすとされているのである。

しかしながら、例えば、同じく「過₁」の意味を表わす意図で作成した例（34）は自然な文であり、例（33）は自然ではない文に感じられる。

(33) *我 吃 过 饭。
1SG 食べる PRF ご飯
「わたしはご飯を食べ…」

(34) 我 吃 过 饭 再 去。
1SG 食べる PRF ご飯 また 行く
「わたしはご飯を食べてから行く。」
(呂 1999[1980] : 246 改変)

例（33）は例（34）の従属節だと考えることができる。実際、例（33）のように、「吃过饭（ご飯を食べて）」で終わると、聞き手は「それから」という疑問を持ち、話し手の話の続きを待つことになる。すなわち、聞き手は話し手の発話がまだ終わっていないように感じる。

しかし、例（33）の文に語気助詞「了」を追加すると、例（35）のように、自然な文に変わる。

(35) 我 吃 过 饭 了。
1SG 食べる PRF ご飯 SFP
「わたしはご飯を食べた。」

例（33）と例（35）を比較すれば、「過₁」は、呂（1999[1980]）の説明、すなわち、「語気助詞「了」をつけることができる」というだけで解釈できないだろう。むしろ、つけない場合は不自然になることがあると思われるが、そのような議論はこの記述では見られない。

さらに、例（33）、例（34）と例（35）を比較すれば、「過₁」は文レベル（文末）ではある種の制限を持ち、複文の従属節にある場合には、その制限が緩和されるというように考えることができるだろうが、これがどのような制限なのか、先行の諸研究では、議論が見られないので、本論は後ほど詳細に検討することにしたい。

また、呂（1999[1980]）は下記のように、「過₁」と「過₂」の意味的な違いはそ

の否定から判断することができる」と指摘している。

表示‘完毕’的‘过’和表示‘曾经’的‘过’相像而不相同，从否定式可以看出。

吃过饭了—— 还没吃呢(表‘完毕’)

吃过小米—— 没吃过小米(表‘曾经’)

(「完結を表わす「過」と「経験」³⁰を表わす「過」は類似してはいるが、同じではない。その否定構文から見分けられる。

すでにご飯を食べた — まだ食べていないよ(「完結」を表わす)

アワを食べたことがある — アワを食べたことがない

(「経験」を表わす)

(呂 1999[1980]: 247 日本語訳は論者による)

この記述で挙げられている二つの例文から分かるように、「完結」を表わす「過₁」は、否定構文では現れない。一方、「経験」を表わす「過₂」は否定構文に現れる。本論では、このことを意味的に「過₁」と「過₂」を区別する際の基準とする。

2.2.5. 孔令达 1986

孔(1986)は、呂(1999[1980])の助詞「過」の2分類を受け継ぎ、動作完結の「過」を「過₁」、「経験」の「過」³¹を「過₂」と名付けて、それぞれの使用に見られる制限を議論している。特に構文制限について、孔(1986)は下記のようにまとめている。

表 7: 孔(1986)による助詞「過」の共起制限

	了 ₁	了 ₂	了 ₁₊₂	已经	曾经
过 ₁	+	+	+	+	-
过 ₂	-	-	-	-	+

この表の「+」は共起できることを示し、「-」は共起できないことを示す。「過₁」はすべての「了」と共起できるのに対して、「過₂」はすべての「了」と共起しない。この点は「過₁」と「過₂」を区別する重要な特徴である。

³⁰ 「曾经」を表わす「過」は「かつて(…したことがある)」を表わすことから、本論では「経験」と訳す。

³¹ 孔(1986)は「過₂」は「かつて(…したことがある)」を表わすとしていることから、ここでは「経験」の「過」をしておく。

また、本論では誤解を招かないように、「了₁」、「了₂」、「了₁₊₂」という形式の違いについて簡単に触れる。孔（1986）は「了₁」、「了₂」、「了₁₊₂」に関して下記のように述べている。

“了₁”是表示动作完成的动态助词，出现在“V-N”框架中。“了₂”是肯定事态出现了变化或即将出现变化的语气助词，出现在“VN-”或“V-”框架中，后面有语音停顿。“了₁₊₂”兼有“了₁”和“了₂”的作用，出现在“V-”框架中，后面有语音停顿。

（「了₁」は動作の完結³²を表わす動態助詞である。「V-N」（論者補：動詞＋了＋名詞）の構造に現れる。「了₂」はできごとに変化が生じたあるいは、まもなく変化が生じるということを肯定する語気助詞である。「VN-」（論者補：動詞＋名詞＋了）あるいは「V-」（論者補：動詞＋了）の構造に現れる。その後ろには音声の停頓がある。「了₁₊₂」は「了₁」と「了₂」の役割を兼ねる。「V-」の構造に現れる。その後ろに音声の停頓がある。」（孔 1986：273 日本語訳は論者による）

この説明からわかるように、中国語において、「了」は統語および意味的な特徴から、「了₁」、「了₂」、「了₁₊₂」の3種類にわけることができる³³。それぞれの実際の用いられ方を例（36）、例（37）、例（38）に示す。

(36) 我 昨天 打 了 他。

1SG 昨日 殴る PFV 3SG

「私は昨日彼を殴った。」

(37) 他 去 北京 了。

3SG 行く 北京 SFP

「彼は北京に行った。」

(38) 我 读 完 了。

1SG 読む 終わる PFV+SFP

「私は読み終えた。」

³² 中国語の「了₁」に関する諸研究では、その機能を「完結」、「完成」、「完了」「完畢」などとしており、必ずしも一様ではない。本論では、孔（1986）のこの「完成」を「Perfective」として理解し、日本語の「完結」に訳す。

³³ 本論では、「了₁」、「了₂」、「了₁₊₂」の区別が孔（1986）の前提となっているため、ここで引用しているが、この区別を認めているわけではない。「了₁」、「了₂」、「了₁₊₂」については、中国語学では現在でも定論になっておらず、議論する余地がある。

例 (36) の動詞「打 (殴る)」の後ろに立つ「了」は「了₁」であり、動詞と名詞の間に挟まれ、動作「打 (殴る)」がすでに完結していることを表わすとされている。例 (37) の文末にある「了」は「了₂」であり、「動詞+名詞」の後ろに立ち、「去北京 (北京へ行く)」という変化を表わすとされている。例 (38) の「了」は「了₁₊₂」であり、動詞の後ろに立ち、かつ、文末に立っているので、この場合、「读完 (読み終わる)」という動作の完結および、その変化を表わすとされている。

この節の本題に戻るが、孔 (1986) によると、完結を表わす「過₁」は下記の例文のように、すべての「了」と共起することができる。

- (39) 他们在韩老家吃过饭, 又看了
 3PL で韓お爺さん家 食べる PRF PFV ご飯 また 見る PFV
 电视, 才道别回家
 テレビ やっと さよならを言う 帰る 家
 「彼らは韓お爺さんの家でご飯を食べてから、さらにテレビを見て、
 ようやくさよならを言って家に帰った。」

(孔 1986 : 274 (9) グロスと日本語訳は論者による)

- (40) 告诉你, 我吃过饭了。
 教える 2SG 1SG 食べる PRF ご飯 SFP
 「あなたに言おう、わたしはすでにご飯を食べた。」

(孔 1986 : 274 グロスと日本語訳は論者による)

- (41) 暴风雪最初的淫威发作过了,
 吹雪 最初の威力 發揮する PRF PFV+SFP
 天地间从混沌状态澄清下来,
 天地間から混沌状態澄むてくる
 四野暂时恢复了寂静。
 広い野原しばらく戻る PFV 静か

「暴風雪の当初の猛威も過ぎ去ると、
 天地の間は混沌とした状態から澄んできて、
 広い野原はしばしのあいだ静寂をとりもどした。」

(孔 1986 : 275 (15) グロスと日本語訳は論者による)

例 (39)、例 (40)、例 (41) は、それぞれ「過₁」と「了₁」、「了₂」、「了₁₊₂」

が共起している例文である。確かに、すべての例文を発話と見なせば、発話時点において、それぞれの動作はすべて完結していると言える。しかし、例(39)と例(41)の例文が示しているように、「過₁」が複文の従属節に位置している時は、動作の完結を表わすというよりは、一連のできごとの時間的な前後関係に焦点が移っているように感じられる。すなわち、例(40)の単文における「過₁」と異なり、例(39)と例(41)の「過₁」は、単文よりも高いレベルの解釈が求められると考えられる。後述するが、このような場合は、劉(2006)がいうテキストレベルでのタクシス機能で解釈したほうが、より「過₁」の機能を適切に解釈できると考えられる。

これらの例文から見ると、孔(1986)はもともと「過₁」が文末に位置するか、従属節に位置するか、という区分をしていない。ただ、文レベルにおいて、「過₁」の後ろに「了₂」がないと、不自然になることがあるということを指摘している。

- (42) *我 吃 过 饭。
 1SG 食べる PRF ご飯
 「わたしはご飯を食べ…」 ((33)の再掲)

- (43) 我 吃 过 饭 了。
 1SG 食べる PRF ご飯 SFP
 「わたしはご飯を食べた。」 ((35)の再掲)

例(43)は「了₂」がある文で、自然な文に感じられる。例(42)は「了₂」を伴わない文であり、不自然に感じられる。しかし、なぜ、このような現象が起こるのか、孔(1986)では議論がなされていない。

2.2.6. 刘月华 1988

刘(1988)は先述の諸研究と同じく、助詞「過」を2種類に分けている。「過₁」は完結を表わすとしているが、「過₂」を「経験の過」と呼んでいる。これはおそらく Li and Thompson (1981) の「experiential」という言い方を借用したのだろう。意味的に「過₂」は、ただかつて起こったことだけではなく、発話時点でそのできごとがすでに終わり、その状態も存在しないことを表わすとされている。

文レベルの考察においては、刘(1988)はそれまでの先行研究とほぼ同じなので、ここではとくに触れないが、発話のコンテキスト(つまり、テキストレベル)において「過₁」と「過₂」には使い分けがあるとす。特に「過₂」の使用制限

について、下記のように述べている。

在什么情况下说话人要谈到发生过什么动作或存在过什么状态而用“过₂”呢？我们分析了六百万字语料中的“过₂”后发现，说话人用“过₂”时，总是为了说明、解释什么。在实际语言中，包含“过₂”的短语、分句或句子（以下称“过₂句”）总是与另一个语意相关的短语、分句或句子（以下称“相关句”）相联系，有时“相关句”可能不出现，但听话人可以意会。如果没有一定的语言环境，孤立的“过₂句”在语意上是不能自足的。

（どのような状況において話し手はある動作が発生したことあるいはある状態が存在したことと言おうとして、「過₂」を使用するのだろうか。我々は六百万字の言語資料における「過₂」を分析した結果、話し手「過₂」を用いる時は、すべてなにかを説明、解釈するためであることが分かった。実際の言語使用において、「過₂」を含んだフレーズ、従属節あるいは文（以下「過₂の文」と略称する）は、常に意味的に関連を持つ別のフレーズ、従属節あるいは文（以下「関係の文」と略称する）と関わっている。時には「関係の文」は現れないこともあるが、ただ聞き手にとってそれが自明のことである。もしある程度の言語的コンテキストがなければ、単独の「過₂の文」は意味上、自立することができないのである。）

（刘 1988：8 日本語訳は論者による³⁴）

この記述からすると、「過₂」は下記の例文のように、文脈がない、孤立した状態で使われると、文としてあまり不自然に感じられないが、発話としては不自然になる可能性が高い。

(44) (朝、知り合いに会った時に)

我 見 過 骆驼

1SG みる EXP ラクダ

「私はラクダを見たことがある。」

朝、会ったばかりのときに、話し手が「私はラクダを見たことがある」と発話すると、聞き手の頭の中には「なぜいきなりその話が出る？」あるいは「それからどうなる？」という疑問が湧いてくる。つまり、「私はラクダを見たことがある」という文は、他の関連する文、コンテキストがないと、聞き手にとって理解しにくいということである。

³⁴ 本論では、刘（1988）の引用部分を日本語に訳す際、すでに刊行されている日本語の訳である刘（2001）を参照した。

この「過₂」に関する記述は、佐藤（2007）と田村（福田）（1960）のアイヌ語の助動詞「a」に関する記述を想起させる。アイヌ語の「a」はできごとの関係性を表わす機能を持つとされている。本論はこの類似性について後で詳しく議論することにする。

また、「過₁」がどのように使用されるかについて、刘（1988）は下記のように説明している。

“过₁”具有特殊的表达功能，对语境有特殊的要求：“过₁”前的动词所表示的动作及所涉及的事物，必须是已知信息。这一点在对话中表现得最为明显：

（39）老套子盛上岗尖一碗山药粥，说：“大侄子，你先吃，我就是这一个碗。”

江涛两手捧着把碗递给他，说：“我吃过了，大伯，你吃。”

（「過₁」は特殊な表現機能を持っており、言語環境（コンテキスト）に対して特殊な条件を求める。すなわち、「過₁」の前の動詞が表わす動作およびそれが影響を及ぼすものごとは、既知の情報でなければならないということであり、このことは会話においては最も明白に現れる。

（39）老套子は長芋のお粥をお碗に山のように盛りつけると、「兄ちゃん君は先に食べなさい、我には一つの碗しかないので」と言った。

江濤は両手で碗をささげ持って老套子に渡し、「私はすでに食べました、伯父さん、食べてください」と言った。）

（刘 1988：10 日本語訳は論者による）

この説明にある例文のように、「過₁」の前にある動作「吃（食べる）」およびそれと関連する「山药粥（長芋のお粥）」は、コンテキストの情報構造において、話し手と聞き手にとってすでに既知の情報である。刘（1988）によると、この場合のみに「過₁」が使われる。

以上のように、刘（1988）は「過」の使用条件をコンテキスト（テキストレベル）のもとで議論している。本稿は、この分析を土台とし、「過₁」と「過去₂」の関連性に重点を置いて議論することにする。

2.2.7. 劉綺紋 2006

劉（2006）は、それまでの研究が言うような統語的・意味的な点から「過₁」と「過₂」にわけることができないことを指摘し、認知的に「過」が「終結点到達」と「終結点経過」を表わすマーカードと主張している。「終結点到達」と「終結点経過」は意味的にそれぞれ完結と経験に解釈されるとしている。すなわち、「過」はやはり二つの意味を持つことを認めている。また、劉（2006）の斬新な点は、「過」の機能をテキストレベルで議論し、それまでの研究で主張されてい

る完結と経験を、それぞれにテキストレベルで継起性と先行性に解釈しているということである。

継起性と先行性はテキストを対象とする研究で、タクシス機能とされているものである。タクシス機能は時間軸における複数のできごと間の位置関係であるとされている。劉 (2006) は、継起性を表わす「過」と先行性を表わす「過」は、以下の例文のように区別できると述べている。

- (45) 他 吃 过 饭, 看 过 电影, 打 过 保龄球,
3SG 食べる PRF ご飯 見る PRF 映画 打つ PRF ボーリング
又 去 逛 了 夜市。
また 行く 廻る PFV 夜市場
「彼はご飯を食べて、映画を見て、ボーリングをして、
さらに夜市場めぐりに行った。」
(劉 2006 : 254 (13) の改変 グロスと日本語訳は論者による)

- (46) 干 这些 事儿 的 本事 刘四爷 都 有, 前 清 的 时候,
やる これら こと の 本領 劉四爺 すべて ある 前 清朝 の 頃
他 就 打 过 群架, 抢 过 妇女。
3SG すでに 殴る EXP 殴り込み 奪う EXP 女の子
「これらのことをやる本領を、劉四爺はすべて持っている。先の清朝
の頃、かれはすでに殴り込みに加わり、女性を拉致したことがあった。」
(劉 2006 : 255 (15) の改変 グロスと日本語訳は論者による)

例 (45) にある四つのできごと、「吃饭 (ご飯を食べる)」、「看电影 (映画を見る)」、「打保龄球 (ボーリングをする)」、「去逛夜市 (夜市場めぐりに行く)」は、テキストにおいて、時間軸上次から次へと起こったことであるとして示されている。これはつまり事態が継起的に起こることである。この場合の「過」は継起性という機能を持つことになる。

例 (46) は例 (45) と異なり、「過」の前のできごと、すなわち「打群架 (殴り込みに加わる)」、「抢妇女 (女の子を拉致する)」は時間軸上において、そのお互いの先後関係がわからない。例 (46) の「過」の前のできごとは、いずれもひとつの時点 (例えば、発話時現在) より先行していることはわかる。この場合の「過」は先行性を表わすとする。

また、劉 (2006) は、継起性の「過」には構文制限があると指摘している。例えば、例 (47) は例 (45) の「去逛了夜市 (夜市場めぐりに行く)」の「了」を「過」に入れ替えたものだが、そのテキストは不自然なテキストになる。

- (47) *他 吃 过 饭, 看 过 电影, 打 过 保龄球,
 2SG 食べる PRF ご飯 見る PRF 映画 打つ PRF ボーリング
 又 去 逛 过 夜市。
 また 行く 廻る PRF 夜市場
 「彼のご飯を食べて、映画を見て、ボーリングをして、
 さらに夜市場めぐりに行った。」
 (劉 2006 : 254 (13) の改変 グロスと日本語訳は論者による)

つまり、「過」が継起性を表わす場合、テキストの最後のできごとには用いることができないということである。劉 (2006) はこの構文を「～過～了」構文と呼んでいる。

しかし、劉 (2006) の議論は完全に文レベルの「過」を無視し、すべてテキストレベルとして扱っている。また、なぜ継起性を表わす「過」がこのようにテキストレベルで、最後のできごとに用いることができないのか、その理由については説明していない。

なお、劉 (2006) は「過₁」と「過₂」を統語と意味によって区別できないと批判しているが、テキストレベルにおいて「継起性」と「先行性」によって区別できるかという点、必ずしもそうではない。

- (48) 他 是 改邪归正的 榜样。年轻时候 杀 过 人,
 3SG COP 改心する の 見本 若い頃 殺す PRF 人
 判 过 死刑, 減刑 出来 之后 卖 过 早点,
 判決する PRF 死刑 減刑する 出てくる の 後 売る PRF 朝食
 开 过 公司, 现在 已 是 亿万富翁 了。
 開く PRF 会社 現在 すでに COP 億万長者 SFP
 「かれは改心の見本である。若い時、人を殺して
 死刑の判決を下されたことがある。
 減刑されて出所した後は朝食を売ったことがあり、
 会社を経営したことがあり、今ではもう億万長者になっている。」

例 (48) のように、「過」を伴うできごと「殺人 (人を殺す)」、「判死刑 (死刑の判決を下される)」、「卖早点 (朝食を売る)」、「开公司 (会社を起こす)」は、確かにある時点 (例えば発話時点) より先行しているできごととに違いない。しかし、この場合、「過」はそれらのできごとの間に継起的な関係があることも表わしていると考えられる。つまり、人を殺し、死刑の判決を下され、減刑されて出

所して、まず朝食を売るような簡単な仕事をし、次に会社を起こし、最後には億万長者になったというように理解されるので、このテキストにおける「過」が先行性か、継起性かを表わしているのか、劉（2006）の解釈では区別できない。

劉（2006）で指摘されているように、「過₁」と「過₂」にわけるとそれまでのやり方では「完結」と「経験」を区別できない。また、例（48）のように、テキストレベルにおいても「継起性」と「先行性」を区別できない。果たして「過」は区別する必要があるのか、あるいは、一つの「過」は基本的意味を持ち、それが二つの意味に派生し、それらの間に連続性もあるように考えるか、これまでの先行研究ではそのような考え方が見られない。

2.2.8. 先行研究における「過」の問題と本論の立場

以上、中国語の動態助詞「過」に関する先行研究を概観した。それらの主張および問題については、以下のようにまとめることができる。

1. 「過」は「動詞補語」と助詞の2種類に分けることができる。助詞のほうは「経験」という意味を表わす。これを主張したのは、Chao（1968）と朱（1982）である。しかし、これらの研究においては、まだ文末、修飾節末、従属節末に分けての議論はなされていない。
2. 「過」は、「完結」と「経験」の2種類に分けることができる。これを主張したのは、呂（1999[1980]）、孔（1986）、刘（1988）である。呂（1999[1980]）、孔（1986）、刘（1988）は「過₁」と「過₂」の構文的な特徴まで議論している。呂（1999[1980]）は「過₁」と「過₂」が否定で区別することができる」と指摘している。孔（1986）は文末助詞の「了」と共起するかどうかによって区別できると主張している。刘（1988）は「過₁」がついている動詞の表わすできごととは既知の情報であり、「過₂」は単独では発話されにくいことを指摘している。これらの研究は大きな成果をあげているが、使用された言語データに対して文レベルとテキストレベルを区別していない。また、文末助詞「了」と共起するか否かの理由についても説明していない。さらには、「過₂」の単独では発話されにくいという現象についても解釈していない。
3. 「過」は「過去にそのできごとが1回以上経験されている」（the event has been experienced at least once）ことを表わす。この主張はLi and Thompson（1981）だけである。Li and Thompson（1981）もテキストレベルのことについて触れているが、その解釈は適切なものではないと考えられる。

4. テキストレベルにおいて「過」は継起性と先行性を表わす。この主張は劉（2006）だけである。劉（2006）で指摘されたように、「過」は「完結」と「経験」では区別できないが、劉（2006）が提案したテキストレベルにおいても「継起性」と「先行性」では「過」の区別ができない。また、劉（2006）が指摘した、「過」がテキストの最後のできごとに立てない現象についても、その理由が説明されていない。

以上の先行研究の問題点から、本論は下記のような中国語の動態助詞「過」の時間表現に関するものを本論の課題とし、検討していきたい。

- I. 文レベルとテキストレベルを区別して「過」の機能を議論する必要がある。
- II. 文レベルにおいて「過₁」は文末助詞「了」と共起しないと文が終結しにくいという現象に対して、その理由を説明する必要がある。また、「過₁」と「過₂」の連続性を明確する必要がある。
- III. テキストレベルにおいて「過₁」がなぜ文末に立たないのか、その理由を明確にする必要がある。また、テキストレベルの「過」と文レベルの「過」の連続性を検討する必要がある。

これまでの先行研究で見られたように、「過」を二つの「過」に分けたほうが、色々な現象について説明しやすくなる。本論は、文レベルにおける「完結を表わす動詞補語」の「過」をテキストレベルの「継起性」を表わす「過」に対応させ、「過₁」と呼ぶことにする。文レベルの「経験」を表わす「過」をテキストレベルの「先行性」を表わす「過」に対応させ、「過₂」と呼ぶことにする。ただ、これは論述の便宜のためであり、論者自身、中国語の助詞「過」を完全に「過₁」と「過₂」に分けられると考えているわけではない。むしろ、連続的なものと考えており、その連続性について本論で重点的に議論する予定である。

もちろん、本論はアイヌ語の「a」と中国語の「過」との対照研究を行うものである以上、それぞれの観点でそれぞれの文法および構文現象について、比較しながら議論していくことにする。

第3章 文レベルにおける「a」と「過」の意味機能

本章は、下記に繰り返す、2.1.7節で述べたアイヌ語の「a」の問題点と2.2.8節で述べた「過」の問題点に対して議論を行うものである。

○「a」の意味機能はパーフェクト (Perfect) なのか、それともパーフェクティブ (Perfective) なのか、あるいはそれ以外なのか、もう一度議論する余地がある。

○文レベルとテキストレベルを区別して「過」の機能を議論する必要がある。

第2章で述べたアイヌ語の「a」と中国語の「過」に関する研究から、「a」と「過」は互いに異なる用法があるものの、両方ともアスペクトと関わっていることが分かる。本論はその点を出発点として議論を始めることにする。

従来のアスペクト研究、特に日本語のアスペクト研究では、文法形式と動詞の語彙的意味の相関性がすでに指摘されている (金田一 1955, 奥田 1988a, 1988b, 工藤 1995 など)。すなわち、アスペクトの意味は、アスペクト形式と動詞の意味によって表わされる。故に、アスペクト研究においては、動詞の分類が重要な意味を持つことになる。本論では日本語の動詞分類の成果を参考にし、アイヌ語の「a」、中国語の「過」、それぞれと共起する動詞の分類を試みる。

3.1. 「a」と「過」のアスペクト研究における位置づけ

動詞分類は文法的なものとの相関性の中でしか行えない (工藤 1995 : 8)。故に、「a」と共起する動詞を分類する前に、アイヌ語のアスペクトについて少し触れておきたい。

語彙的アスペクトを含めたアイヌ語のアスペクト研究史については、田村 (2003) がすでに詳しく記述している。田村 (2003) は、工藤 (1995) の日本語における文法範疇の認定基準を援用し、アイヌ語には形態論的範疇のアスペクトが存在しないと主張している。

工藤 (1995) は文法性＝形態論的範疇の認定は、下記の5つの観点から考えられると述べている。

- ①義務性 (使用の強制)
- ②包括性 (あらゆる動詞, あるいは述語形式をまきこんでいること)
- ③規則性 (一様な形式的指標の存在)
- ④抽象性・一般性 (語彙的意味からの解放)
- ⑤パラダイグマティックな対立性 (相補的対立関係) (工藤 1995 : 29)

例えば、この 5 つ観点のうち包括性について言えば、アイヌ語の助動詞連語「wa an」は包括性がないと思われる。

- (49) ni ka wa ø-turse wa ø-kemaewen a korka,
 木 上 から 3SG.SBJ-落ちる て 3SG.SBJ-足が悪い PRF けれど
 tane ø-pirka wa... ø-totek wa ø-apkas, kor an.
 今 3SG.SBJ-よくなる て 3SG.SBJ-治る て 3SG.SBJ-歩く ている
 「木の上から落ちて足が悪かったけれど
 今は良くなって治って歩いている」(佐藤 2014 : 83)

- (50) acapo eun k-ek kunak ku-ramu.
 おじさん のところへ 1SG.SBJ-来る と 1SG.SBJ-思う
 hinak un acapo ø-apkas wa ø-an.
 どこ へ おじさん 3SG.SBJ-歩く て 3SG.SBJ-いる
 「おじさんに会いに来ようと思ったのに、
 おじさんどこへ行っているの？」
 (中川 1981 : 136 に基づき論者が作成)

- (51) teeta wano k-eyaykosiramsuypa kor k-an
 以前 から 1SG.SBJ-考える.PL て 1SG.SBJ-いる
 kusu somo yakka pirka.
 ので NEG でも 良い
 「そんなことはもうとつくに考えてある。」(中川 1981 : 136)

- (52) *teeta wano k-eyaykosiramsuypa wa k-an
 以前 から 1SG.SBJ-考える.PL て 1SG.SBJ-いる
 kusu somo yakka pirka.
 ので NEG でも 良い
 「そんなことはもうとつくに考えてある。」
 (中川 1981 : 136 に基づき論者が作成)

中川 (1981) によると、例 (49) にある動詞「apkas (歩く)」と例 (51) にある動詞「eyaykosiramsuypa (考える)」は継続形式「kor an」と共起できるが、継続形式「wa an」と共起することができない。動詞「apkas (歩く)」と「wa an」という形式が共起した場合、「wa an」は「継続形式」として見なされず、「wa (て)」

は接続助詞であり、「an」は「いる」という意味を持つ動詞である。つまり、「歩いた、そして、いる」として解釈される。例 (52) にある動詞「eyaykosiramsoyupa (考える)」は単に「考える」という行為そのものを表わし、「その結果何かを思いつく、理解する」ということには関与していないから、そもそも「wa an」と共起しない (中川 1981 : 136)。

上記の例文から分るように、従来の研究でいうアスペクト形式の使用状況は田村 (2003) の記述通りになっている。また、助動詞連語「wa an」について、佐藤 (2008 : 87) は、日本語の「ている」と同様、結果の存続を表わすが、比較的限られた意味の動詞としか用いられないようだと述べている。

つまり、包括性から言えば、「wa an」という形式はまだ完全に文法化していないと言える。本論では便宜上、「アイヌ語のアスペクト形式」という表現を使用する場合があるが、それは従来のアスペクト研究でいう文法形式を指しているわけではない。強いて言えば、これらの形式は工藤 (1995) でいう「準アスペクト」に相当するだろう。すなわち、語彙的な意味からすでに解放され、抽象化が進んでいるが、すべての動詞に使えるわけではないものである。

田村 (2003) では言及されていないが、本論における研究対象である「a」も、アスペクトにおいては、文法範疇において「wa an」と同じ状況だと思われる。パラダイグマティックな対立性から言えば、「a」と対立している形式は見当たらない。「a」と「ゼロ形態」³⁵が対立しているという見方を強いてとったとしても、例 (53) と例 (54) が示すように、同じく「食べる」というできごとを表わす場合、「a」を使っても、使わなくても良い場合があり、そうなると、「a」と「ゼロ形態」がどういう意味で対立しているのかの条件が分からず、解釈はできなくなる。

(53) kuneywa cep k-e a wa.
今朝 魚 1SG.SBJ-食べる PRF SFP

「今朝魚を私は食べたよ。(だからもう食事を済ませている。)」

(例 (17) の再掲)

³⁵ 本論は「a」と対立する要素が見当たらないと説明するため、「ゼロ」という概念を使っているが、「a」の研究にあたって「ゼロ」を立てることを提案しているわけではない。あらかじめ断っておく。言語学における「ゼロ」の定義は亀井ほか (1996 : 840) を参照されたい。

- (54) ku-ype kaspa humi ne kuni
 1SG.SBJ-食事する すぎる 感じ COP と
 ku-ramu pakno ku-ype.
 1SG.SBJ-思う まで 1SG.SBJ-食事する
 「私は食べすぎたんだろうと思うほど食べた。」(佐藤 2008 : 177)

また、「a」と対立する要素が見当たらない以上、例(53)と(54)が示すように、アイヌ語では文の中で必ず「a」と「ある形式」を使わなければならないという「義務性」も言えなくなる。つまり、助動詞「a」の研究においては、ある条件では「a」を使う、別の条件では「別の形式」などを使うというふうに考えられないので、「a」は「対立性」と「義務性」があるとは言えない。

以上で述べたアイヌ語の言語事実から、本論では「a」を文法化がまだそれほど進んでない「準アスペクト」の形式として扱うことにする。

さて、中国語の「過」は、アスペクトの動態助詞、あるいはアスペクト接尾辞などと呼ばれているが、実はアイヌ語の「a」と同じように、その使用は義務的ではない。

- (55) 我 问 过 老师 了。
 1SG 聞く PRF 先生 SFP
 「私はすでに先生に聞いているよ。」

- (56) *我 问 着 老师 了。
 1SG 聞く PRF 先生 SFP
 「私はすでに先生に聞いているよ。」

先行研究で論じられているように、「過」の機能は例(55)のように「Perfective」とされている。しかし、その機能と対立する「Imperfective」の動態助詞とされる「着(ている)」は、例(56)のように同じ動詞の後ろに立つことができない。すなわち、中国語においては「Perfective」の「過」と「Imperfective」の「着(ている)」はパラディグマティックな対立性(相補的対立関係)をなしていないのである。

「過」はまた、下記の例文にあるような動詞の後ろには立ちにくいとされる(刘 1988 : 13)。

(57) *他 是 过 老师
2SG COP PRF 教師
「彼は教師だった」

(58) *这 意味 过 战争。
これ 意味する PRF 戦争
「これは戦争を意味している」

例 (57) はコピュラ「是 (である)」の例文である。この場合、「過」がコピュラの後ろに立つと、その文は不自然になる。例 (58) では静態動詞「意味 (意味する)」の後ろに「過」が立っているが、その文は不自然なものになっている³⁶。これらの例文で示されるように、中国語の「過」は、先述した文法範疇において包括性を持っていないことが分かる。ゆえに、中国語の「過」はアイヌ語の「a」と似ていて、日本語の観点から見れば、文法範疇のパラダイグマティックな対立性と包括性を持っていないため、厳密には形態論のアスペクト形式とは言えない。

しかし、先行研究から見て取れるように、中国語の「過」も語彙的な意味からすでに解放され、その抽象化が進んでいる。本論はさしあたって、中国語の「過」をアイヌ語の「a」と同じように、工藤 (1995) がいう「準アスペクト」として扱うことにする。

3.2. 日本語から見たアイヌ語と中国語の動詞分類

アイヌ語と中国語の動詞分類を行う前に、まず日本語のアスペクト研究における動詞分類に簡単に触れておく。工藤 (1995) はアスペクトの観点から日本語の動詞分類を行ったものの中で最も詳しいものである。

工藤 (1995) はまず、アスペクト対立の有無から下記の表のように、日本語の動詞を 3 種類に分けている。

³⁶ 「過」と共起しない動詞は主に静態動詞であるが、この二つに限られない。存在動詞「在 (いる、ある)」、関係動詞の「像 (似ている)」、「(预示 (しめしている))」「象征 (象徴している)」などもある。

表 8：工藤（1995）による日本語の動詞分類
 （工藤（1995：69）に基づき論者が作成）

種類名称	代表例
(A) 外的運動動詞	開ける、切る、殺す、食べる、見る、読む、たたく、歩く、遊ぶ、動く、座る、行く、死ぬ、枯れる、曇る、結婚する
(B) 内的情態動詞	思う、考える、信じる、望む、心配する、感動する、苦しむ、驚く、あきれる、感じる、見える、痛む、疲れる
(C) 静態動詞	ある、いる、値する、甘すぎる／存在する、異なる、意味する／優れている、精通している、そびえている、面している

(A) 外的運動動詞 (dynamic verb) は、時間の中に成立（開始）・展開・消滅（終了）し、場合によっては、結果を残す、ものの動的な運動を捉えている動詞らしい動詞である。(A) 外的運動動詞に対して、(C) 静態動詞 (static verb) は、時間の中への現象を問題にしえない「関係・特性」をとらえているか、時間のなかに現象したとしても、時間的展開性のない「存在・空間的配置」をとらえているスタティックなものである。(B) 内的情態動詞は、(A) と (C) のどちらにも属しないものである。これらの動詞は時間的展開性において (A) の動詞と共通しているが、運動動詞の外的事象に関する動詞と異なり、「思考・感情・知覚・感覚」という人の内的事象をとらえている。時間の展開性があるので、「スルーシテイル」のアスペクト対立がある。内的な思考や感情、感覚は、話し手のみが直接感知（体験）できるものである。

工藤（1995）はまた、奥田（1977）がいう「主体動作」、「主体変化」の分別意味特徴から、「動作」「変化」と「主体」「客体」の観点を組み合わせて、(A) 外的運動動詞をさらに3種類に分けている。

- (A・1) 主体動作・客体変化動詞——開ける、折る、消す、倒す、曲げる、入れる、並べる、抜く、出す、運ぶ、作る
- (A・2) 主体変化動詞——行く、来る、帰る、立つ、並ぶ、開く、折れる、消える、曲がる、入る、出る、太る、就職する
- (A・3) 主体動作動詞——動かす、回す、打つ、蹴る、押す、食べる、見る、言う、歩く、泳ぐ、走る、泣く、飛ぶ、揺れる

（工藤 1995：71-72）

(A・1) 主体動作・客体変化動詞は、主体の観点から、その動作をとらえ、客体の観点から、その変化をとらえているので、「シテイル」と共起した場合は「動作継続」と「結果継続」の両方を表わすことができる。(A・2) 主体変化動詞は、その変化をとらえているので、「シテイル」と共起した場合は「結果継続」を表わす。(A・3) 主体動作動詞は、その動作の動きをとらえているので、「動作継続」を表わす。

また、これらの動作は「そこに至れば運動が必然的に尽きるべき目標としての内的時間的限界」の有無から、telic の内的限界動詞と atelic の非内的限界動詞にわけることができる。(A・1) 主体動作・客体変化動詞と (A・2) 主体変化動詞は、前者に属し、(A・3) 主体動作動詞は後者に属する。

先行研究の節で述べたように、アイヌ語の「a」の機能に関しては、(Perfect) なのか、それとも (Perfective) なのかという議論があった。先述の日本語の動詞分類における「主体」「客体」、「動作」、「変化」、「telic」、「atelic」のような意味特徴は、アイヌ語のアスペクト機能の解明にも役に立つと考えられる。

また、アスペクトの機能を研究する以上、対象とする動詞は時間的展開性を持たないといけない。ゆえに、「いる、ある」のような時間的な展開性を持たない静態動詞にも本節では触れているが、基本的には本論の対象外になる。本論でアスペクト機能を解明する場合に用いる動詞は、もっぱら、時間の中で動きを取る動詞に限定する。

3.2.1. 「a」と共起する動詞の分類

中川 (1981) と佐藤 (2006) は、すでにアスペクトの観点からアイヌ語の動詞分類を行っている。しかし、これらの研究は主にアスペクト形式「kor an」や「wa an」と共起する動詞を中心として分類したものである。本論の研究対象である「a」と共起する動詞については不足が感じられる。故に、本論は中川 (1981) と佐藤 (2006) の成果を参考にしながら、「a」と共起する動詞を中心とした分類を試みたい。

以下、工藤 (1995) の分類法に従いながら、本論で扱うデータの範囲内で、アイヌ語の「a」と共起する動詞を分類していくことにする。また、各種類の動詞について、その代表的なものを選び、例文で示すことにする。

(A・1) 主体動作・客体変化動詞 (内的限界動詞)

atte 「かける」、etoyta 「植える」 perpa 「わる、やぶる」、
単数 rayke/複数 ronnu (殺す)、uk 「取る」、yasa 「さく」

- (59) emo ka k-eto^{ya}, mame ka k-eto^{ya} a wa.
 イモ も 1SG.SBJ-を植える マメ も 1SG.SBJ-を植える PRF SFP
 「私はイモも植えて、マメも植えたよ。」(佐藤 2008 : 239)
- (60) kanna suy e-oyepi e-perpa a ruwe tap ne na.
 再び また 2SG-の食器 2SG.SBJ-を割る PRF ことこそ COP SFP
 「お前、また食器を割ったんだなあ。」(佐藤 2008 : 69)
- (61) sísam ku-ronnu a wa.
 和人 1SG.SBJ-を殺す.PL PRF SFP
 「私は日本人を(何人か)殺したよ。」(佐藤 2008 : 102)

(A・2) 主体変化動詞 (内的限界動詞)

単数 arpa/複数 paye 「行く」、ek 「来る」、hosipi 「もどる」、
 poro 「大きくなる」、単数 san/複数 sap 「下がる」、
 tokapmikor (昼寝する) us 「履く」、iwanke (元気になる)、
 eramuriten (機嫌よくなる)

- (62) yaykata k-arpa a wa.
 自分 1SG.SBJ-行く PRF SFP
 「私は自分で行ったよ。」(佐藤 2008 : 391)
- (63) okaypo utar tun ka ren ka ø-ek a wa.
 若者 たち 二人 も 三人 も 3SG.SBJ-来る PRF SFP
 「若者達が二人も三人も来たよ。」(佐藤 2008 : 65)
- (64) tanto anak ku-tokapmikor a wa.
 今日 TOP 1SG.SBJ-昼寝する PRF SFP
 「今日は私は昼寝したよ。」(佐藤 2008 : 220)

(A・3) 主体動作動詞 (非内的限界動詞)

e 「食べる」、hawe^{an} 「言う」、kere 「さわる」、nepki 「働く」、
 nu 「聞く」、nukar 「見る」

(65) k-eramuskari p ne kusu ku-kere a wa.
 1SG.SBJ-を見知らないもの COP ので 1SG.SBJ-に触る PRF SFP
 「見たことのないものであるので私はさわったよ。」(佐藤 2008 : 241)

(66) k-onaha k-unuhu ku-kasuy wa
 1SG-の父 1SG-の母 1SG.SBJ-を手伝う て
 poronno ku-nepki a wa.
 たくさんの 1SG.SBJ-働く PRF SFP
 「私の父母を私は手伝ってたくさん働いたよ。」(佐藤 2008 : 183)

(67) teta unarpe ku-nukar a wa.
 この間 おばさん 1SG.SBJ-に会う PRF SFP
 「この間、おばさんに私は会ったよ。」(佐藤 2008 : 186)

(B) 内的情態動詞

yaynu 「思う」

(68) ku-nukar pekor ku-yaynu a wa.
 1SG.SBJ-を見る かのよう 1SG.SBJ-思う PRF SFP
 「私は (確かに) 見たように思ったよ。」(今、現に、そう思っている)
 (佐藤 2006 : 64)

(C) 静態動詞

an 「いる、ある」

(69) okkayo turano menoko ø-an a wa.
 男 と一緒に 女の子 3SG.SBJ-いる PRF SFP
 「男と一緒に女がいたよ。」(佐藤 2008 : 384)

3.2.2. 「過」と共起する動詞の分類

中国語の研究においては、英語の動詞分類に則って中国語の動詞分類を行うものが多い。Smith (1994) は動的 (dynamic) と静的 (static)、内的限界 (telic) と非内的限界 (atelic)、継続 (durative) と瞬間 (instantaneous) という対立する意味分別特徴をもって中国語の動詞を 5 種類に分類している。

表9：Smith (1994) における中国語の動詞分類
(Smith (1994 : 108-109) に基づき論者が作成)

動詞種類	dynamic	telic	durative	代表例
活動型 (Activity)	「+」	「-」	「+」	走 (走る)、听 (聞く)、 推车 (カートを押す)
達成型 (変化と結 果あり) (Accomplishment)	「+」	「+」	「+」	盖一座桥 (橋を作る)、走 去学校 (学校に歩いて行 く)
達成型 (変化と結 果なし) (Semelfactive)	「+」	「-」	「-」	踢 (蹴る)、敲门 (ノック する)
到達型 (Achievement)	「+」	「+」	「-」	打破 (打ち破る)、睡着 (眠りに着く)
状態型 (State)	「-」	「-」	「+」	存在 (存在する)、知道 (わかる)、高兴 (喜ぶ)

この表にある「+」は、表最上段に示された意味特徴があるという事を示し、「-」の場合は、その逆の意味特徴があることを表わす。例えば、「dynamic」の行で「+」が示されている場合、その種類の動詞は動的 (dynamic) な動詞である。「-」が示されている場合、その種類の動詞は静的 (static) な動詞である。

Smith (1994) の動詞分類は工藤 (1995) と似ている。特にその意味分別特徴において、動的 (dynamic) と静的 (static)、内的限界 (telic) と非内的限界 (atelic) は完全に同じである。異なるのは、継続 (durative) と瞬間 (instantaneous) だけである。実は、この継続 (durative) と瞬間 (instantaneous) という分別要素は、日本語の研究ではすでに金田一 (1955) によって提唱されている。しかしその後、奥田 (1977) は時間の長さのかわりに、「主体の変化」か「主体の動作」かという新たな弁別要素を取り入れた動詞の分類を提唱した。工藤 (1995) はそれを継承し、先述の日本語の動詞分類を行ったのである。

Smith (1994) が挙げている例から見れば、その分類は動詞ではなく、動詞句のものであることがわかる。ただ、本論は動詞自体の分類を中心としたいため、「過」と共起する動詞に対しては、工藤 (1995) の分類体系に従うことにする。

また、刘 (1988 : 11-13) は、完結の「過」と経験の「過」をそれぞれ「過₁」「過₂」と呼び、「過₂」はすべての動詞と共起できるが、「過₁」が四百ぐらいの動詞としか共起しないと述べている。ここでは「過₁」と共起する動詞の観点から、分類を行っていくことにする。

(A・1) 主体動作・客体変化動詞 (内的限界動詞)

挂「かける」、种「植える」摔「わる、やぶる」、
杀(殺す)、拿「受け取る」、撕「さく」

(70) 这 田 已经 种 过 白菜 了。

この畑 すでに 植える PRF 白菜 SFP

「この畑は、すでに、白菜を植えているよ。」

(他の植物を植えることができないという意味)

(71) 快递 已经 拿 过了。

速達 すでに 取る PRF SFP

「速達はすでに受け取っているよ。」

(72) 烧鸡 用手 撕 过了。

揚げた鳥肉 で 手 捌く PRF SFP

「揚げた鳥肉はすでに手で捌いているよ。」

(A・2) 主体変化動詞 (内的限界動詞)

去「行く」、来「来る」、回「もどる」、
午休(昼寝する) 穿「履く、着る」

(73) 他 来 过 办公室 了。

3SG 来る PRF 事務室 SFP

「彼は事務室に来ていたよ。」

(74) 我 给 孩子 穿 过 衣服 了。

1SG あげる 子供 着る PRF 服 SFP

「私はすでに子供に服を着させているよ」

(75) 我 今天 午睡 过了。

1SG 今日 昼寝する PRF SFP

「今日は私はすでに昼寝したよ。」

(A・3) 主体動作動詞 (非内的限界動詞)

吃「食べる」、说「言う」、摸「さわる」 工作「働く」、
听「聴く」、看「見る」、问「聞く」

(76) 我 已经 看 过 了。

1SG すでに 見る PRF SFP

「私はすでに見ているよ。」

(77) 你 的 事 儿, 我 问 过 医 生 了。

2SG の こと 1SG 聞く PRF 医者 SFP

「あなたのこと、私はすでにお医者さんに聞いているよ。」

(78) 他 已经 和 我 说 过 了。

3SG すでに と 1SG 言う PRF SFP

「彼はすでに私に話しているよ。」

(B) 内的情態動詞

想「思う」

(79) 我 想 过 了。

1SG 考える PRF SFP

「私はすでに考えているよ。」

(C) 静態動詞

有「ある」

(80) 她 有 过 一 个 孩 子 了。

3SG ある PRF 一人 子供 SFP

「彼女にはすでに子供が一人いるよ。」

以上、日本語の動詞分類の研究成果を援用し、中川（1981）と佐藤（2006）を参照しながら、アイヌ語の「a」、中国語の「過」それぞれと共起する動詞に対して、アスペクトの観点から分類を行った。この分類は後述のアイヌ語の「a」と中国語の「過」の機能の解明に大いに繋がると考えられる。

3.3. 「a」の意味機能：「Perfective」と「Perfect」およびその他

3.3.1. 本論における「Perfective」と「Perfect」の定義³⁷

本論では、文法用語「perfective」と「perfect」をComrie（1976）に従って区別

³⁷ 個別言語で「perfective」と「perfect」を議論するとき、「perfective」と「perfect」の頭文字（initial

する。先行研究の記述からも分かるように、アイヌ語の「a」に関する研究では「完了」を「Perfective」に対応させることもあるが、「Perfect」に対応させることもある。本論では論述を明確にするため、先行研究の記述を引用する場合を除いては、「Perfective」を「完結」に対応させ、「Perfect」を「完了」に対応させることにする。

The term 'perfective' contrasts with 'imperfective', and denotes a situation viewed in its entirety, without regard to internal temporal constituency; the term 'perfect' refers to a past situation which has present relevance, for instance the present result of a past event (*his arm has been broken*). (Comrie1976:12)

Comrie (1976) のこの定義からいえば、「perfective」とは「imperfective」と対になり、もっぱらできごとを全体としてみなす機能である。「できごと全体」については、Comrie (1976) が下記のように詳しく述べている。

The whole of the situation is presented as a single unanalysable whole, with beginning, middle, and end rolled into one; no attempt is made to divide this situation up into the various individual phases that make up the action of entry. Verbal forms with this meaning will be said to have perfective meaning, and where the language in question has special verbal forms to indicate this, we shall say that it has perfective aspect. (Comrie1976 : 3)

すなわち、「perfective」はできごと内部のことに一切触れずに、できごとをまとめた全体として見るという意味的な概念である。「perfective」はできごとを全体的に見るので、できごとが完結していることを求めている。先述したように、アイヌ語には英語のような動詞の語形変化による文法的なアスペクト形式がないため、アイヌ語において「perfective」という意味機能を議論する際には、助動詞の形式を議論することになる。

また、「perfect」について Comrie (1976) は下記のように定義している。

The perfect is rather different from these aspects, since it tells us nothing directly about the situation in itself, but rather relates some state to a preceding situation. The perfect indicates the continuing present relevance of a past situation. one way in which the perfect differs from the other aspects that we have examined is that it expresses a relation between two time-points, on the one hand the time of the state

capial) を大文字にするのが慣例である。本論はこの慣例に従うことにする。

resulting from a prior situation, and on the other the time of that prior situation.
(Comrie1976 : 52 省略は論者による)

すなわち、「perfect」は、参照時点との継続的な関連性を表わすとのことである。前のできごとが終わって、その結果状態が維持されるということは多く見られるが、結果はできごとの完結に等しいわけではない。「perfect」におけるできごとの完結という意味は、意味論的な含意 (implication) であり、語用論的な推意 (implicature) によって取り消されることがある³⁸。

つまり、「perfective」と「perfect」の違いは、視点の違いのみである。つまり、参照時点より前のできごとを全体的に見ることに重点を置く文法形式は「perfective」を表わすものである。参照時点より前のできごとと参照時点に関連性があることに重点を置く文法形式は「perfect」を表わすものである。

3.3.2. 述語動詞の直後に立つ「a」の意味機能

先行研究の節で述べたように、アイヌ語の助動詞「a」の機能については、「Perfect」とするものと「Perfective」とするものがある。この節では「a」が「Perfect」を表わすのか、それとも「Perfective」を表わすのか、議論する。

また、先行研究で挙げた田村 (福田) (1960) は「完了」という言葉を使っていないため、詳しい議論に入る前に、本論は例文を挙げながら、その機能が「完了」だということを論証することにする。田村 (福田) (1960) の主張を図で表現すると、下記の図2のようになるだろう。

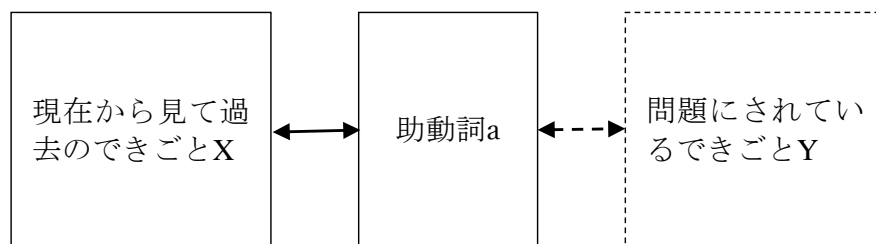


図2：田村 (福田) (1960) による「a」の機能

助動詞「a」は過去のできごとにつく。これはすべての先行研究で認められているので、議論する余地はない。田村 (福田) (1960) は「できごと Y」が問題視されない場合、「a」を使えないと述べているので、「a」が表わすのは二つのできごとの間のある種の関係性だと考えられる。このできごとの関係性は文レベルで考えれば、どうなるのだろうか。

³⁸ アイヌ語の「a」が表わす完結は意味論的なものであり、語用論的な推意によって取り消されることがある。この点については佐藤 (2006) を参照されたい。

- (81) ku-mímaki ani³⁹ kapú ku-kár wa k-é a wa.
 1SG-の歯 で 皮 1SG.SBJ-剥く て 1SG.SBJ-食べる PRF SFP
 「(わたしの) 歯で皮をむいてたべたよ。」(田村(福田) 1960 : 71)

- (82) (これかれについてあなたも聞いたかと聞かれたとき)

ku-nu a p un.
 1SG.SBJ-を聞く PRF もの SFP
 「聞いたよ。」(田村 1986 : 42-43)

例(81)は、田村(福田)(1960)によると、「りんごの皮をむくためにほうちょうを持って行って渡そうとしたらこう云った」というものである。発話時から見ると、「a」は主体動作動詞「e(食べる)」が表わすできごとと「ほうちょうはいらない」というできごとを関連付ける機能を持っている。あるいは「e(食べる)」とその結果の「リンゴはお腹に入っている」というできごととの間に関連をつけている。いずれにしても、「e(食べる)」とその結果のできごととの関連なので、「a」は「Perfect」を表わすと言える。

例(82)では、主体動作動詞「nu(聞く)」が表わすできごとに対して発話者が言いたいことは、その結果の「聞いている」だと考えられる。この関連性がつけられた場合に、「a」はやはり「Perfect」を表わすというふうに理解されることになる。ただ、「e(食べる)」と「nu(聞く)」のような主体動作動詞においては、その食べた結果にしても、聞いた結果にしても、それらは佐藤(2007)でいう知覚が不可能な、間接的な結果だと思われる。

その一方で、例文(81)の場合には、食べる行為は終わっているので、参照時点の今からすれば、「a」がついているできごと「e(食べる)」を一つの全体としてみなすこともできないわけではない。また、例(82)の場合にも、昔聞いたので、「nu(聞く)」という行為はすでに終わっていて、できごと「nu(聞く)」を一つの全体としてみなすこともできる。このことから、例(81)と(82)におけるような「a」は「Perfective」を表わすと主張している研究もある(吉川2020)。

しかし、先行研究の節で見たように、「a」の機能を解釈するときには、「結果は今におよんでいるような気持ち」、「比較という気持ち」、「文脈に依存する効力」というような記述がよく使われているので、「a」がついているできごととその他のできごととの関係がよく問題にされていることがわかる。Comrie(1976)の「perfective」と「perfect」の区別からすれば、「a」が表わす機能は、やはり

³⁹ 本論で例文を引用する際、アイヌ語における喉頭破裂音[ʔ]の音素表記/ʔ/は煩雑で読みにくいので、特に必要な場合を除き、省略する。

「Perfective」というよりは、「Perfect」の方に偏ると考えられる。このことは下記の主体変化動詞の例文を見れば、より一層明確になるだろう。

- (83) e-saha esir ø-ek a korka
 2SG-の姉 先 3SG.SBJ-来る PRF けれど
 nani ø-hosipi a wa.
 すぐ 3SG.SBJ-帰る PRF SFP
 「お前の姉が先程来たけれどすぐに戻ったよ。」(萱野 2002 : 138)

- (84) oka tane e-poro a ruwe tap ne na.
 INTER 今 2SG.SBJ-大きくなる PRF のこそ COP SFP
 「お前、大きくなったなあ。」(佐藤 2008 : 69)

例(83)では、「a」は主節の動詞「hosipi (帰る)」についている。前節のアイヌ語の動詞分類からすると、「hosipi (帰る)」は人の意志によって位置を変える主体変化動詞に属する。発話者は「hosipi (帰る)」というできごとが終わっていることにより、言及対象の人が「その結果として位置変化している」、すなわち「ここにはいない」という直接的な結果を強調しているように見える。

例(84)では、「a」がついている動詞は「poro (大きくなる)」という主体変化動詞である。「poro (大きくなる)」はものの無意志的な状態変化を表わすものに属するだろう。「成長する前の状態より大きくなった」という比較の視点があるので、「poro (大きくなる)」というできごととその変化の結果としての大きくなった状態が結ばれている。この場合の「a」の機能は「Perfect」としか言えないと考えられる。ちなみに、例(83)の「hosipi (帰る)」と例(84)の「poro (大きくなる)」の文は、いずれも、その変化に焦点が当たっているため、この場合の「Perfect」は佐藤(2006)がいう動作パーフェクトであろう。

また、概念的に「perfective」の終結性は表面化しやすい。これに対して「perfect」の終結性はあまり表面化しない。できごとの終結性を強調したいとき、「Perfect」を表わす「a」は、下記のように助動詞、あるいは補助動詞と共起することがある。

- (85) tane ku-ype nisa a wa.
 今 1SG.SBJ-食べる してしまった PRF SFP
 「もう私は食べてしまったよ。」(佐藤 2008 : 84)

例(85)にある助動詞「nisa」は田村(1997a : 37)によると、今はもうすんで

しまっていることを表わす。ここで「nisa」は、動詞「ipe (食事する)」の後ろに立って食べる動作が完結していることを表わす。逆に言うと、「a」が「Perfective」を表わすなら、助動詞「nisa (してしまった)」と意味的に重複することになるだろう。この場合、「a」は文脈的に「お腹がいっぱいになっている」などのできごとと関連付けられていると考えられる。つまり、例(85)の例文から言えば、「a」はやはり発話時との関連性を重視しており、「Perfect」を表わすと考えられる。

以上、平叙文におけるアイヌ語の「a」の機能を再検討した。平叙文におけるアイヌ語の「a」の機能は「Perfective」ではなく、「Perfect」であることが確認できた。しかし、「a」は構文上、色々な特徴があり、「Perfect」だけでは説明できないところがある。特に、田村(福田)(1960)が主張している「二つのできごと間の関係性、比較の気持ち」という記述をどのように説明するかは重要な問題である。以降で、引き続き、「a」の構文現象を説明しながら、その機能を再検討することにする。

3.3.3. 継続形式と共起する「a」の機能

文レベルにおいて、アイヌ語の「a」は述語動詞の直後に立つだけではなく、述部に現れる継続形式「kor an」や「wa an」と共起することもある。このような構造は中国語の「過」の構文には見られない。「過」は、完結を表わすにしろ、経験を表わすにしろ、基本的には動作が限界的(bounded)であることを求める。一方、継続を表す「着」は動作が非限界的(unbounded)であることを求めるので、中国語において「過」と「着」は意味的に矛盾し、同じ文で共起しないと考えられる。実際、例(87)のように、「着」と「過」が共起すると、その文が非文になる。

(86) tap pakno ku-ype kor k-an a wa.
 今 まで 1SG.SBJ-食事する ながら 1SG.SBJ-いる PRF SFP
 「今まで私は食事をしていたよ。」 (例(15)の再掲)

(87) *到 現在 我 吃 着 过 饭 啊
 まで 今 1SG 食べる DUR PRF ご飯 SFP
 「今まで私は食事をしていたよ。」 (例(16)の再掲)

例(86)にある助動詞連語「kor an」は、アイヌ語の動作継続形式である(佐藤 2008: 197)。継続形式と「Perfect」形式が共起していることは、英語の「Perfect Progressive」を想起させる。英語の「Perfect Progressive」と「Perfect」に関して

Leech (1987) は終結についての視点が異なると述べている⁴⁰。

(88) *Who's been eating my dinner?* (? 'Some of it is left'). (Leech 1987: 51)

(89) *Who's eaten my dinner?* ('It's all gone'). (Leech 1987: 51)

(90) *They've been widening the road* (? 'They are still at it'). (Leech 1987: 51)

(91) *They've widened the road* ('The job's finished'). (Leech 1987: 51)

例 (88) と (90) は「Perfect Progressive」の文であるが、その動作はまだ続いている可能性がある。例 (89) と (91) は「Perfect」の文であり、その動作はすでに終結している。また、Leech (1987) によると、意味的に強いて言えば、「Perfect Progressive」の方は最近の活動 (recent activity) を強調し、「Perfect」は現在達成 (present accomplishment) を強調する。

それでは、アイヌ語において「Perfect Progressive」形式と「Perfect」形式は、どのような違いがあるのだろうか。例 (92) は、例 (86) と意味内容はほぼ同じであるが、「Perfect」形式だけの構文である。

(92) tane ku-ype a wa.
今 1SG.SBJ-食事する PRF SFP
「もう私は食べたよ」 (佐藤 2006 : 64)

英語の研究成果を参考にすると、例 (86) と例 (92) の例文はそれぞれ、図 3 と図 4 のように図示することができる。

⁴⁰ この違いは両者を比較する場合に、より一層明確になる。Leech (1987: 51) は「where finality is not likely to be an issue, the two can be equally acceptable in the same situation」とも述べている。

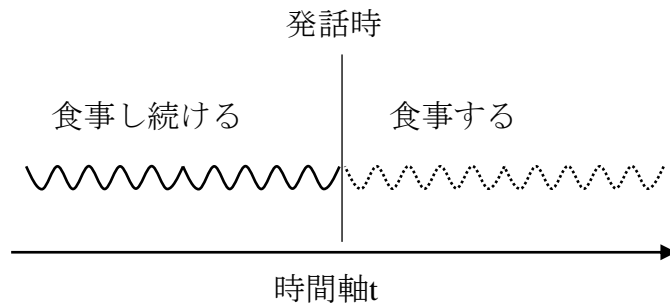


図 3 : 例 (86) が表わす意味

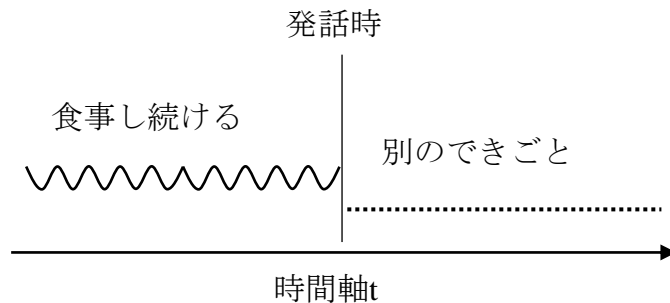


図 4 : 例文 (92) が表わす意味

図 3 と図 4 を比較すれば、図 3 の場合、すなわち継続形式「kor an」と「a」が共起した文は、発話時まで「ipe (食事する)」というできごとが続き、発話時以後もそれが継続する可能性があることを示している。

図 4 のように助動詞「a」だけの場合は、発話時に「ipe (食事する)」というできごとがすでに完結していることが含意されている。つまり、「a」は「kor an」と共起した場合、そのできごとが最近の活動であるということを強調し、完結したかどうかは問題にされていない。「a」だけの場合は、達成という意味が表面化し、動作の完結が認識される。

「a」は、図 3 のように、完結していないできごとや、図 4 のように、完結しているできごと、いずれとも共起できるので、前節で言及した「a」は「Perfective」ではなく、「Perfect」を表わすということを裏付けたと言えるだろう。

また、「kor an」と「a」が共起した文は、例 (86) のように、「ipe (食事する)」できごとが発話時以降にも続くと思われるものがあるが、「発話時以降にも続く」という含意が背景化し、そのできごとが単なる最近の活動として認識されるものがある。

- (93) esir eawne k-arpa akusu awun unarpe
 先程 隣へ 1SG.SBJ-行く したら 隣の おばさん
ø-isitayki koarikiki kor ø-an a wa.
 3SG.SBJ-機を織る 3SG.SBJ-に精を出す ながら 3SG.SBJ-いる PRF SFP
 「先程私が隣に行ったら隣のおばさんは
 機織りに精を出していたよ。」 (萱野 2002 : 54)

例 (93) で、おばさんが「isitayki koarikiki kor an (機織りに精を出している)」
 というできごとは、話者が先ほど隣へ行ったときのことであり、発話時には、も
 うすでに続いていない可能性がある。この場合、「isitayki koarikiki kor an (機織
 りに精を出している)」というできごとは完結したかどうかよりも、単なる最近の活
 動として認識されていると考えられる。つまり、アイヌ語において、「kor an」と
 「a」が共起した場合は、そのできごとが発話時現在まで続き、そのあとも続く
 可能性があるという意味を表わすことができ、また、その意味が背景化し、単な
 る最近の活動を表わすこともできるのである。

なお、「a」は結果継続の形式「wa an」と共起することもある。この構造に現
 れる動詞は変化動詞のみである⁴¹。

- (94) turano ku-yupo kamuy ø-cotca
 共に 1SG-の兄 クマ 3SG.SBJ 射る
 acapo na ø-iwanke wa ø-an a wa.
 おじさん まだ 3SG.SBJ-元気 て 3SG.SBJ-いる PRF SFP
 「共に私の兄がクマを撃ったおじさんまだ元気でいたよ。」
 (佐藤 2008 : 41)

- (95) okaypo ø-ek wa k-enewsar etokus
 若者 3SG.SBJ-来る て 1SG.SBJ-歓談しあう もうすぐしそうになる
 have ne wa sékor ku-yaynu kor
 の COP て と 1SG.SBJ-思う ながら
k-eramuriten kor k-an a wa.
 1SG.SBJ-喜ぶ ながら 1SG.SBJ-いる PRF SFP
 「若者が来て、もうすぐ私が彼と話をするというわけなのだな
 と私は考えて喜んでいたよ。」 (佐藤 2008 : 192)

⁴¹ アイヌ語の動作動詞、変化動詞、状態動詞などに関する分類は、母語話者でない論者にとっ
 ては特に難しい。ここの分類は佐藤 (2006) の分類を参照した。

例 (94) にある「*iwanke* (元気になる)」や例文 (95) にある「*eramriten* (機嫌がよくなる)」はいずれも主体変化動詞である。「*wa an a*」と共起した場合、「*iwanke* (元気になる)」、「*eramriten* (機嫌がよくなる)」という変化が起こった後に、その「元気である」、「機嫌がよい」状態が発話時点まで続き、発話時点でもその状態であるということを表わしていると考えられる。これは Leech (1987) がいう「*state-up-to-present*」と類似している。ただ、「*iwanke* (元気になる)」と「*eramriten* (機嫌がよくなる)」は、英語の「*sit*」のような変化動詞と異なり、変化時点は必ずしも明確ではない⁴²。

例 (94) の「*iwanke wa an* (元気でいる)」や例 (95) の「*eramriten wa an* (機嫌がよくなっている)」という継続形式から、「*a*」はこの場合、変化した後の状態と発話時現在の関連性を表わすと考えられる。つまり、「*a*」は「変化動詞+*wa an*」という状態が発話時現在でも鮮明に存続していることを含意しているのである。「*a*」はこの場合、動詞の変化と発話時点での結果を関連付けるので、「*Perfect*」を表わすと言えるだろう。

3.4. 中国語の「過₁」と「過₂」の意味

先行研究の節で触れたように、中国語のアスペクト助詞「過」は 2 種類があり、意味的にそれぞれ「完結」の「過₁」と経験の「過₂」に区別されている。「過₁」と「過₂」を区別する方法はいくつかある。統語的には文末助詞の「了」と共起するかどうかによって区別される (Chao 1968, 朱 1982, 孔 1986, 呂 1999[1980])。また、「過₁」を否定するのは「还没 (まだない)」なのに対し、「過₂」の場合は「没 (ない)」である (呂 1999[1980])。

(96) 我 回 过 家 了。

1SG 帰る PRF 家 SFP

「わたしは家に帰った。」

(97) 我 还 没 回 家。

1SG まだ NEG 帰る 家

「わたしはまだ家に帰っていない。」

(98) 我 回 过 家。

1SG 帰る EXP 家

「わたしは家に帰ったことがある。」

⁴² この点については佐藤 (2006) の脚注 22 を参考にしている。

(99) 我 没 回 过 家。

1SG NEG 帰る EXP 家

「わたしは家に帰ったことがない。」

例(96)では、文末助詞の「了」と共起しているので、「過」は「過₁」と解釈される。例(97)は例(96)の否定文である。一方、例(98)では、文末助詞の「了」と共起していないので、「過」は「過₂」と解釈される。例(99)は例(98)の否定文である。例(96)～例(99)からわかるように、「過₁」と「過₂」は統語的に、一方が「还没(まだない)」、もう一方が「没(ない)」によって否定され、形式的にそれぞれ異なっているのである。

例(96)と例(98)からすれば、図5のように、完結を表わす「過₁」と経験を表わす「過₂」は、文末助詞「了」の追加と削除によって、互いに変換できるというふうに捉えられる。

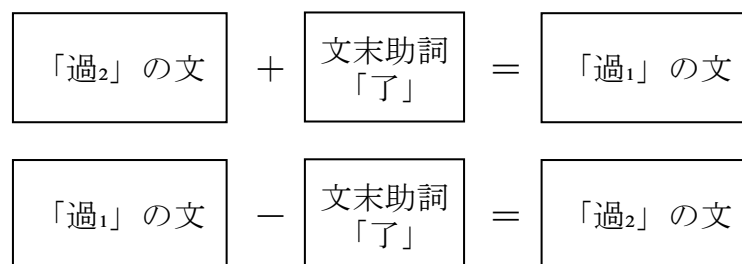


図5: 「過₁」と「過₂」の意味変換

他の文末助詞でも、追加や削除によって、「過」の変換を引き起こせるのではないかと考えられるが、実は「了」以外の文末助詞、例えば「吧」「呢」「吗」⁴³などは、追加と削除によって、そのような変換を引き起こせない。

(100) 我 回 过 家 吧。

1SG 帰る EXP 家 SFP

「私は家に帰ったことがあるだろう。」

(101) 我 回 过 家 呢。

1SG 帰る EXP 家 SFP

「私は家に帰ったことがあるよ。」

⁴³ 中国語の文末助詞 (sentence-final particle) については、Li and Thompson (1981) を参照されたい。

(102) 我 回 过 家 吗。

1SG 帰る EXP 家 SFP

「私は家に帰ったことがあるか。」

例(100)～例(102)は例(98)から「了」を取ってそれ以外の文末助詞を追加して作成したものだが、いずれも「過」は経験の「過₂」で解釈される。

ただ、文末助詞「了」がなければ「過」は必ず「過₂」に解釈されるかということ、実はそうでもない。例(103)では強いて「過」を「過₁」と解釈することができるが、すでに孔(1986)が指摘しているように、その文は終わらない感じになってしまう。

(103) *我 回 过 家。

1SG 帰る PRF 家

「私は家に帰った。」

例(103)にある「過」が「過₁」と解釈される場合、話し手はその後のできごとを言わないと、この文はまだ終わっていないように理解される。つまり、聞き手からその話の続きが期待されるのである。

以上の事実に基づき、中国語の「過」に関しては、文レベルにおいて、以下の検討すべき問題があると考えられる。

- I. 中国語の「過₁」と「過₂」が、先述のように文末助詞「了」の追加・削除によって互いに変換できるのはなぜなのだろうか。従来の研究ではあまり議論されていない。
- II. 中国語の「過₁」と「過₂」は分ける必要があるのか、分けられない場合、どのような連続性があるのか明確にする必要がある。

「過₁」と「過₂」は文末助詞「了」によって区別できることがわかったが、まず、文末助詞の「了」の機能について明確にする必要があると思われる。

中国語の助詞「了」に関しては、先行研究の2.2.5節ですでに触れている。孔(1986)は助詞「了」を三種類に分けて、文末助詞の「了」を「了₂」と呼んでいる。「了₂」は変化を表わすとしているが、例(104)と例(105)の違いは、変化という意味だけで説明するのは不十分だと思われる。

(104) 我 回 过 家 了。

1SG 帰る EXP 家 SFP

「わたしは家に帰った。」 (例 (96) の再掲)

(105) 我 回 过 家。

1SG 帰る EXP 家

「わたしは家に帰ったことがある。」 (例 (98) の再掲)

なぜかという、例 (104) と例 (105) のいずれも、「回家 (家に帰る)」という変化が起こっていることを表わしているからである。異なるのは、その動作「回家 (家に帰る)」の含意である。文末助詞「了」が付いている例 (104) の方は、発話時点で「回家 (家に帰る)」という動作がすでに完結していて、その次のできごと、つまり「そして何かをする」に視点が置かれる。文末助詞「了」が付いていない例 (105) の方は単なる「回家 (家に帰る)」という事実がすでに完結し、「すでに家にいない」という含意に視点が置かれる。

Li and Thompson (1981) は、文末助詞の「了」が現在関連状態 (currently relevant state) という伝達機能を持っていることを主張している。すなわち、文末助詞の「了」は、「あるできごとの状態がある特殊な状況と特別な現在関連性を持つ」(Li and Thompson 1981 : 240 訳は論者による)。

つまり、「過₁」と「過₂」の違いはこのように理解することができる。「過₂」を基準とすれば、「過₂」の「かつてのできごと」という視点は、文末助詞「了」の現在関連性によって、「過₁」の「次のできごと」という視点に変えられるのである。

「過₁」のこの文レベルの特徴は、劉 (2006) のテキストレベルにおける「過₁」の機能を想起させる。「過₁」はテキストレベルでは継起性を表わすとされている (劉 2006 : 252)。「過₁」の文レベルにおける視点変化は、テキストレベルの機能と繋がっているだろうが、さらに証拠を示して議論する必要がある。この議論は第 4 章で行うことにする。

では、文レベルで、「過₁」と「過₂」を意味で分けられるだろうか。次の例文を見てみよう。

(106) 我 刷 过 牙 了。

1SG 磨く PRF 歯 SFP

「わたしはすでに歯を磨いた。」

(107) *我 刷 过 牙

1SG 磨く PRF 歯

「わたしはすでに歯を磨いた。」

例(106)と例(107)はそれぞれ、できごと「刷牙(歯を磨く)」に文末助詞「了」が付いている文とついていない文である。例(104)と例(105)のできごと「回家(家に帰る)」の対と比較すると、例(104)と例(105)はいずれも自然な文なのに対して、例(106)と例(107)では一方は不自然になる。

この現象に対しては、二つの考え方があると思われる。一つはできごとによっては「過₂」と「了」が共起できないことがあるというものである。もうひとつは「過₁」と「過₂」はもともと同じ機能であり、使用文脈によって分化するというものである。前者については、3.2.2で述べたように、刘(1988)がすでに「過₂」はすべてのできごとを表わす動詞と共起することができるかと主張している。よって、考えられるのは後者の、「過」が使用文脈によって二つの「過」に分化するということである。

しかし、どのような文脈で「過」が二つの「過」に分化するのか、それぞれの機能は何なのか、後の章で平叙文以外の構文をも対象としながら、テキストレベルの機能と合わせて議論することにする。

3.5. 本章のまとめ

本章では、文レベルでアイヌ語の「a」と中国語の「過」の意味機能について再検討を行った。

アイヌ語の「a」は、文法論からすれば、厳密なアスペクト形式ではないが、その文法化の進んでいる程度から、準アスペクト形式として扱うことができると考えられる。「a」は、アスペクトの意味を表わす場合、「Perfective」とするか「Perfect」とするか論争がこれまでであったが、本論の検討によって、「a」は「Perfect」の意味に偏っていることが認められる。しかし、文レベルにおいては、田村(福田)(1960)における「できごとの間の関係性、比較の気持ち」という点は確認することができなかった。この点については、さらに文レベルの構文現象と一緒に議論する必要があると考えられるので、次の章で再度取り上げることにする。

また、中国語の「過」は継続形式「着」と共起することがないが、アイヌ語の「a」は継続形式と共起することができる。アイヌ語の継続形式「kor an」や「wa an」と共起する場合の「a」は、やはり「Perfect」を表わすということが確認できた。また、英語の「Perfect Progressive」の研究成果を参考に、「kor an a」は主体動作動詞と共起し、完結を問題とせず、最近の活動という意味を顕在化させると

ということがわかった。また、「**wa an a**」は主体変化動詞と共起し、「今でも鮮明に存続している」という意味を顕在化させることがわかった。

中国語の「過」に対する従来の研究は、完結を表わす「過₁」と「経験」を表わす「過₂」を認めているが、本論は文末助詞「了」の付加によって「過₁」と「過₂」が互いに変換できることを確認した。また、刘（1988）は「過₂」がすべてのできごとを表わす動詞と共起することができるかと主張しているが、実際には「過₂」が共起すると不自然になる文がある。以上の説明から、「過₁」と「過₂」は実は同じ「過」で、それぞれ使用文脈が異なる場合に分化したものだと考えられる。どのように分化するのかについては、更に構文現象を見ながら検討する必要があるが、それは次章で行う。

第4章 文レベルにおける「a」と「過」の構文問題

本章は、下記に繰り返す 2.1.7 節で述べたアイヌ語の「a」の問題点と 2.2.8 節で述べた「過」の問題点に対して議論を行うものである。

- 「a」は平叙文の文末には立つことができない、疑問文の文末には立つことがあるという構文現象について、その理由を探る必要がある。
- 文レベルにおいて「過₁」は文末助詞「了」と共起しないと文が終結しにくいという現象について、その理由を説明する必要がある。また、「過₁」と「過₂」の連続性を明確にする必要がある。

これらの問題点、具体的にはアイヌ語の「a」の構文的な特徴については、佐藤（2006：64）は、文法的な観点から言えば、「a」は平叙文を終止することがなく、接続助詞、名詞句、あるいは終助詞 wa が後続するのが一般的であると述べている。また、佐藤（2008：79）は、「a」が平叙文の文末に立たないという現象と対照的に、「a」が疑問文の文末に立つことができることを指摘している。

(108) ø-aptokar kor ø-ek a wa.
3SG.SBJ-雨に当たる ながら 3SG.SBJ-来る PRF SFP
「ずぶ濡れになって来たよ。」 (例 (13) 再掲)

(109) e-ype a?
2SG.SBJ-食事する PRF
「お前食事したか。」 (例 (25) の再掲)

例 (108) は、「a」が平叙文の述語部に現れているものである。この時、文末助詞「wa」が必要である。例 (109) は、「a」が疑問文の文末に現れているものである。この場合、「a」だけで文を終結することができる。

また、中国語の「過₁」は、一般的に文末助詞の「了」が必要であり、「了」がなければ、文が終わらない感じになることが指摘されている（孔 1986：274）。ただ、「過₁」は疑問文においても文末助詞「了」が必須である。

(110) 我 吃 过 了。
1SG 食べる PRF SFP
「わたしは食事した。」 ((11) の再掲)

(111) 你 吃 过 了?

2SG 食事する PRF SFP

「あなたは食事をしましたか？」

例(110)は、「過₁」が平叙文の述語部に現れているものである。この場合、文末助詞「了」が必須である。例(111)は、「過₁」が疑問文の文末に現れているものである。この場合も平叙文と同じく、文末助詞「了」が必須である。文末助詞の「了」がないと、例(112)のように、「過₂」として解釈されてしまう。

(112) 你 吃 过?

2SG 食べる EXP

「あなたは食べたことがある？」

中国語の「過₁」とアイヌ語の「a」はこのように、平叙文において類似した構文を持ち、疑問文において異なる構文を示している。本論はアイヌ語の「a」と中国語の「過」を比較しながら、この点について議論していくことにする。

また、中国語の「過」については、第3章で「過₁」と「過₂」に触れたが、「過₁」と「過₂」は完全には分けられないと述べた。本節では「過₁」と「過₂」が使用文脈によって分化するという問題を取り上げることにする。

4.1. モダリティ研究における平叙文と疑問文

「a」と「過₁」の平叙文と疑問文⁴⁴の構文問題を取り上げるにあたり、まず平叙文と疑問文の特徴について触れることにする。本論は日本語の研究成果を参照する立場をとっているため、まず日本語の平叙文と疑問文に関するモダリティ研究の成果を参考にしたい。モダリティ機能の観点から、日本語記述文法研究会(2003)は平叙文とその機能について下記のように述べている。

叙述のモダリティは、その文が表わす内容、話し手の判断などを聞き手に伝えることを表わすモダリティである。叙述のモダリティを担う文を平叙文という。

平叙文は、聞き手への情報伝達という、文のもっとも基本的な機能を担う文である。コミュニケーションにおいては非常に複雑な情報の伝達が行われ

⁴⁴ 本論でいう平叙文と疑問文は基本的に、述語が完備している文を指している。故に、述語完備文を対象とすることにする。「水！」や「水？」などの独立的な1語の文で、述語構造が未分化なものは対象としない。述語完備文と述語不完備文の違いは森山ほか(2000:15)を参照されたい。

るが、この目的を果たすことができるように、平叙文には述語の文法カテゴリーやモダリティのさまざまな類型がもっとも豊富に分化する。

(日本語記述文法研究会 2003:17)

この記述を簡単に言えば、平叙文の基本的な機能は、話し手による聞き手への情報伝達である。また、平叙文は述語の形態によって色々な機能を持っている。森山ほか(2000:16)によると、平叙文の述語形態は基本的に独立であり、文が終わる形になっている。すなわち、日本語の例で言えば、独立した平叙文の述語形態は、例(113)のように、4つの形がある。

(113) 行こう(意志形)・行け(命令形)・行く(終止形)・行くだらう

(森山ほか 2000:16)

以上の平叙文における形態は、独立終止系と呼ばれている。そのうち、「行く」のような終止形は無標叙述であり、基本的に話し手の断定を表わすとされている。また、独立終止系の形態と対照的な形態は、接続系の形態と呼ばれている。接続系の形態とは、下記のような連用形と仮定形のことである。

(114) 行き・行って・行けば・行くなら

(森山ほか 2000:17)

これらの形態は基本的に、完備した文では独立した終止を表わすことができない。述べ方としてのモダリティの議論には直接関与しない。

日本語の平叙文の特徴からすれば、アイヌ語の「a」は、佐藤(2006:64)が述べているように、それを含む構造が文の階層構造から言って中間段階に属していることを示すものと考えられる。中国語の「過」も似たような特徴を持っていると思われる。日本語の観点から見て、「a」がどのような段階にあるのか、その位置によってどのような機能が当てられるのか、詳しい議論は後述に譲ることにする。

また、日本語記述文法研究会(2003)は、疑問文の特徴及び機能を下記のように述べている。

疑問のモダリティは、話し手にとって不明なことがあるために、その命題に対して話し手の判断が成り立たないということを表わすモダリティである。疑問のモダリティを担う文を疑問文という。

……

疑問文が表わすもっとも中心的な機能は質問である。平叙文が基本的に聞き手に情報を与えることを目的とするのに対して、質問を表わす疑問文（質問文）は聞き手から情報を引き出すことを目的とする。

（日本語記述文法研究会 2003：21 省略は論者による）

この記述から、疑問文は聞き手から情報を引き出すことを目的とするので、聞き手からの回答が期待されることが前提であることがわかる。それに対して平叙文は伝達機能を持つので、聞き手が回答しなくてもよいというふうに理解される。

4.2. 平叙文における「a」と「過」の構文

4.2.1. アイヌ語の「a」の構文と機能

アイヌ語の平叙文が日本語の平叙文と同じ機能を持っているのなら、動詞の終止形で文が終結する場合、話し手の断定を表わすということになるだろう。

(115) ku-wentarap humi ø-wen⁴⁵.
1SG.SBJ-夢を見る の感じ 3SG.SBJ-悪い

「私は夢を見た感じが悪い（夢見が悪い）。」（佐藤 2008：176）

例（115）は、日本語の動詞の終止形で終わる平叙文に相当するアイヌ語の平叙文である。これは話者が自分の「夢見が悪い」というできごとを聞き手に伝える例である。この場合、アイヌ語の平叙文は日本語の平叙文と同じく、情報伝達機能をはたしていると思われる。ちなみに、この文は「私は夢見が悪い」というできごとに関する叙述で、日本語と同じく、話し手の断定を表わすと考えられる。

しかし、先行研究ですでに明らかにされているように、助動詞「a」は平叙文に現れる場合、必ず文末助詞と共起する。この現象が起こる理由については、下記のような二つの仮説を立てることができるだろう。

- ① 「a」は過去のことを表わすことができても、文レベルにおいて断定性を表すことができない。
- ② 「a」と共起する文末助詞が何らかの機能を持っている。

仮説①は、「a」が確定した情報を聞き手に伝達できない、あるいは平叙文における「a」までの情報が伝達性から見てまだ不十分だと考えるものである。この

⁴⁵ アイヌ語学では、形容詞という品詞を設けない。日本語の形容詞に相当するものは、アイヌ語学では形態論的にすべて自動詞に属する。

ことは、田村（福田）（1960）がいう「a」のできごとの間の関係を表わす機能を想起させる。「a」がいつも次のできごとと関係性を持つということが、「a」で文を終結してそのまま言い切ることができないことを裏付けている可能性があると思われる。

また、できごとの間の時間関係について、日本語のテキストレベルの研究では、日本語の「タ」は時間軸上におけるできごとの間の生起順序を表わすことができるとされている（工藤 1995 : 22）。テキストレベルでのできごとの時間順的な連鎖は継起性と呼ばれている。田村（福田）（1960）の記述を参照すると、「a」は日本語の「タ」のように、文レベルの場合、継起性という機能を表わしている可能性があると思われる。

仮説②は、「a」と共起する終助詞が文を終結したり、「a」の機能を補助したりする機能があるのではないかと考えるものである。それを明確にするためには、アイヌ語の終助詞の機能を明確にする必要がある。

「a」と共起して文を終止する終助詞は実際には、佐藤（2006）が指摘している「wa」以外にもいくつかある。本論で集めたデータの中から、終助詞で文が終結しているものを分けると、下記の3種類がある⁴⁶。

- (116) k-onaha ø-tapkar siri ku-nukar a wa
 1SG-の父 3SG.SBJ-踏舞 の様子 1SG.SBJ-見る PRF SFP
 「父が踏舞するのを私は見たよ。」（佐藤 2006 : 64）

⁴⁶ 次の例文の文末に現れる「ruwe tap ne na」は例文（118）にある「ruwe tapan na」と同じく、「ruwe ne」の改まった言い方、強調した言い方だと思われるので、同じ種類にまとめることにする。

- kanna suy e-oypepi e-perpa a ruwe tap ne na.
 再び また 2SG-の食器 2SG.SBJ-を割る PRF こと こそ COP SFP
 「お前、また食器を割ったんだなあ。」（佐藤 2008 : 69）

また、次の「na」で終わる例文は1例しかなく、どのような状況で使われたのか不明であるので、ここではその議論は行わない。

- hnta ekuskonna ø-poro haw e=sanke wa k=eramutuy a na
 なに 急に 3SG.SBJ-大きい声 2SG.SBJ-を出す て 1SG.SBJ-びっくりする PRF SFP
 「何だ突然大きな声を出して、びっくりしたよ」（田村 1996 : 94）。

- (117) \emptyset -esisuyatpa kor \emptyset -en-kore
 3SG.SBJ-を腕全体で急激に振る ながら 3SG.SBJ-1SG.OBJ-くれる
 kuni \emptyset -ye a p un
 と 3SG.SBJ-言う PRF もの SFP
 「(彼は) 腕を大きく振りながら、
 私にしてくれると言うことを言ったんだよ」(例 (23) の再掲)

- (118) tapne kane uirwakne utar ka,
 このように 兄弟 人々 も
 a-ukóytak-te a ruwe tapan na
 1PL.INCL-互いに話す-CAUS PRF こと SFP
 「このようにきょうだいの人々にも、話し合いさせたのですよ。」
 (例 (24) の再掲)

例 (116) ~ (118) では「述語動詞+a」の後ろに、それぞれ、「wa」、「p un」、
 「ruwe tapan na」が付加されて文が終結している。

終助詞「wa」は、田村 (1997a : 55) によると、語調をやわらげる役割を持つ。
 日本語の「~わ、~よ」に相当する (田村 1996 : 822)。

「p un」は、母音で終わる語「a」の後ろに現れた場合の「pe un」の交替形である。「pe」は「もの」という意味の形式名詞である。終助詞「un」は、田村 (1997a : 56) によると、名詞句と統合し、相手に話しかける時の口調をやわらげる役割を持つ。

終助詞連語⁴⁷の「ruwe tapan na」は「ruwe ne」を強調した形であり、「ruwe ne」は自分が体験したか、目撃した、証拠がある等によって、確信を持って述べる場合に用いる (田村 1997a : 70)。

上記の文が終結する要素のうち、「p un」は日本語の「ものよ」で訳すことができ、日本語の「ノダ」文に相当する意味を持つと考えられる。田村 (1996 : 1) は「a p un」を日本語の「...したのだよ、...したなあ」に対応させている。「ruwe ne」は日本語の「のである」に相当し、同じく「ノダ」文に相当するだろう。すなわち、「a」を含む文は終結する場合、「wa」と共起するか、「ノダ」に相当する語と共起するということになる。つまり、これらの要素は機能的に、話し手が聞き手へ話しかける役割を持つか、証拠性に基づく説明性を持つということである。

以上の仮説①と仮説②に対する説明をまとめると、「a」は平叙文において、断

⁴⁷ 「ruwe ne」は文を終結する機能を持っている。形式上、一つの語ではなく、二つの語によって形成されているので、ここでは終助詞連語と呼んでおく。

定性を持たないことがわかる。また、日本語の「タ」と類似してテキストレベルにおける継起性を表わす可能性がある。「a」と共起する終助詞の要素は、聞き手への話しかけの役割を持ち、説明する機能を持つと考えられる。

「a」が文レベルにおいて継起性を表わすと考えるなら、田村（福田）（1960）がいう「a」のできごとをつなげる機能と矛盾がないし、発話時を参照すれば、話しかけの機能を持つ終助詞「wa」、「un」と共起した場合、佐藤（2008）が言う現在時点との密接な関係づけがあることにも矛盾しない。

とすれば、アイヌ語の助動詞「a」の平叙文における構文と機能は下記の図 6 のように表わすことができるだろう。

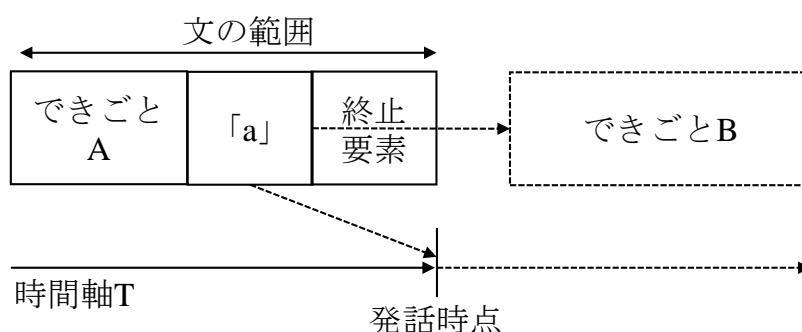


図 6 : 「a」の構文構造と機能

文レベルの場合、「a」は話し手が述べている「できごと A」とまだ述べていない「できごと B」との間の継起性を表わすとすれば、その時間順的な連鎖で、「できごと B」も言語化する必要がある。しかし、文の最後の終止要素によって、「a」の継起性機能が遮断されるので、「できごと B」は言語化することができなくなる。「できごと B」の言語化が終助詞によって遮断されたので、「できごと A」の結果は認知されにくくなる。これは佐藤（2007）における「a」が知覚不可能なパーフェクトを表わすという記述と一致している。この場合、話し手が話している文は「終止要素」まで完結したと理解される。また、終止要素の話しかけの機能によって、話題は聞き手の話に切り替わることになると考えられる。

逆に言うと、助動詞「a」は、先述した日本語の「行くだろう」の「だろう」のような心的態度を表わすモダリティ機能を持たないからこそ、「a」だけでは文を終止することができないのである。「a」を含む文のモダリティ機能は終止要素によって表されると考えられる。

また、アイヌ語の「a」の基本的な機能が継起性であれば、これまでの先行研究でいう「二つのできごとの関連性、比較する気持ち」や「パーフェクト」なども文レベルにおいて解釈できるし、テキストレベルに拡大しても、「a」のテキス

トレベルの機能も解釈できる可能性がある。

時間の流れの中で、「a」の文は発話と共に展開し、その後ろに終止要素が現れない場合、「a」自身が文を終止する能力がないため、次のできごとが言語化されることになる。この場合、図7のように、二つのできごとの間の継起性という機能は表面化し、発話時点と繋がる「Perfect」という機能は潜在化する。

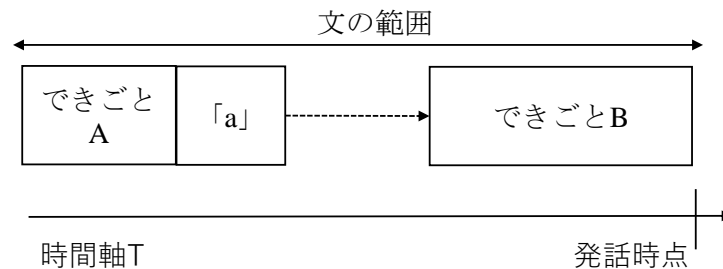


図7：継起性を表わすと思われる「a」

図7で示されているように、アイヌ語の「a」を含む文が終助詞で終わらない場合は、その文の範囲は「できごと A」から「できごと B」へ拡大し、全体的に一つのテキストになる。このような時間順的な連鎖は工藤（1995）の「タ」の機能を参考にして、継起性と呼ぶことができる。

つまり、「a」は文レベルにおいても基本的に継起性を表わすと考えられる。文レベルでは、終助詞などの終止要素で「a」の文が終止された場合、継起性という機能が潜在化し、「Perfect」という機能が表面化する。逆に、例(119)のように、テキストレベルでは「a」の現在との関連性が希薄になり、継起性が完全に解放され、他の文の継起関係を持つ接続助詞と共に使われることになる。

- (119) a-hokúhu ø-soyene a p, arpetpa wa
 1SG-の夫 3SG.SBJ-外へ出る PRF のに 向こう岸 から
 cip ø-yanke humi ø-as akus ora,
 船 3SG.SBJ-着ける の音 3SG.SBJ-立つ と そして
 humihi ka ø-isam
 の音 も 3SG.SBJ-ない
 「私の夫が外へ出ましたが、向う岸に舟を着ける音がしますと、
 それからは何の音もしません。」（田村 1989 : 2-3）

例(119)におけるできごと「soyene」(外へ出る)は、時間的にできごと「humi as」(音が立つ)の前に発生しており、「soyene」と「humi as」は時間軸上におい

て継起関係になっていると考えられるが、本章は主に文レベルの「a」の機能に関して議論するものであるため、テキストレベルにおける「a」の継起性という機能の議論は次の章に譲ることとする。

以上で議論したように、「a」は文レベルにおいて、継起性という機能を持っている可能性があると考えられる。「a」は継起性という機能を持っているので、「a」自身で文を終止することができない。「a」と終止要素が共起した場合、終止要素によって「a」の継起性という機能が遮断され、次のできごとが言語化されなくなり、文は終止要素を伴ったままで終わることができる。また、日本語の「だろう」などと比べて、「a」で文が終わらないのは、「a」が心的態度を表わすモダリティ機能を持たないからであると考えることができる。

4.2.2. 中国語の「過」の構文と機能

では、中国語の「過」は平叙文においてどうだろうか。まず、例(11)の「過₁」の例文を見てみよう。

- (120) *我 吃 过 饭。
1SG 食べる PRF ご飯
「私はご飯を食べて…」

例(120)「吃过饭(ご飯を食べて)」はとても不自然に感じられる。孔(1986)が指摘しているように、文がまだ終わっていないという感じがある。日本語のモダリティ研究の成果をふまえれば、過去の事に対する叙述なのに「過₁」が文を終止できないのはモダリティ機能を持たないためだと考えられる。このまま終わると、聞き手は「それからどうなったのか」という疑問を持つようになる。すなわち、田村(1997a)が記述した「a」の機能と同じく、「過₁」を使った場合は次のできごととも問題にされる。次のできごとが言語化されないと、例(120)のような「過₁」の文は成立しにくい。

しかし、次の例(121)と(122)のように、例(120)の文にもうひとつのできごと「去(行く)」や文末助詞「了」⁴⁸を追加すると、両方とも自然な文になる。

- (121) 我 吃 过 饭 就 去。
1SG 食べる PRF ご飯 すぐに 行く
「私は食べてから、すぐに行く」

⁴⁸ 「了」以外の文末助詞、例えば「吧」「呢」「吗」は現在との関連性を持たないため、これらが「過」と共起しても「過」は経験の意味しか表さない。

(122) 我 吃 过 饭 了。

1SG 食べる PRF ご飯 SFP

「わたしはご飯を食べた。」 (例 (5) の再掲)

例 (121) は、できごと「吃饭 (ご飯を食べる)」と「去 (行く)」が時間軸上で次々と起こることを表わしている。劉 (2006) のテキストレベルの研究では、この場合の「過₁」は継起性を表わすとされている。例 (122) の文末助詞「了」は Li and Thompson (1981 : 240) によると、現在関連状態 (currently relevant state) という伝達的機能を持つとされている。文末助詞「了」のある文は、「あるできごとの状態がある特殊な状況と特別な現在関連性を持つ」(Li and Thompson 1981 : 240 訳は論者による)。「吃饭 (ご飯を食べる)」というできごとは「了」によって現在関連性を持つので、「吃饭 (ご飯を食べる)」の結果が問われ、「過₁」が表わす次のできごととの関連性が希薄になると考えられる。

つまり、中国語の「過₁」は、アイヌ語の「a」と似ていて、文レベルにおいても、テキストレベルにおいても基本的には継起性を表わすと考えられる。文末助詞「了」がない場合、「過₁」の文は次のできごとを求められるため、そのまま終わることができない。「了」で終わる文においては、「了」の終止機能によって、「過₁」の継起性という機能が希薄になり、「了」の現在関連性という機能によって状態パーフェクトという機能が表面化する。「過₁」と「了」の構文は図 8 のように表現することができる。

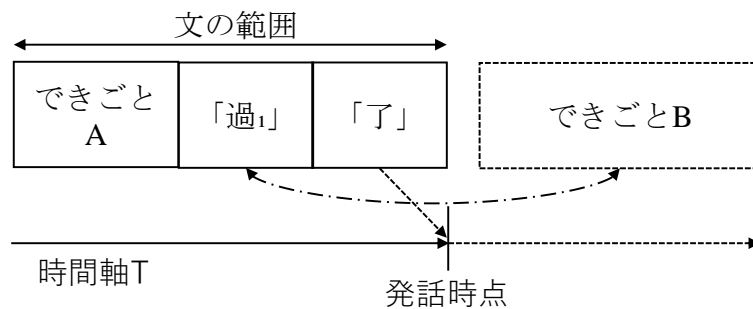


図 8 : 「過₁」と文末助詞「了」の構文

また、例 (121) のように、「過₁」が文末助詞「了」を伴わず、二つのできごとをつなげる場合がある。この場合の構造は図 8 から文末助詞「了」を取った形だと考えられる。その構造は図 9 のようになるだろう。

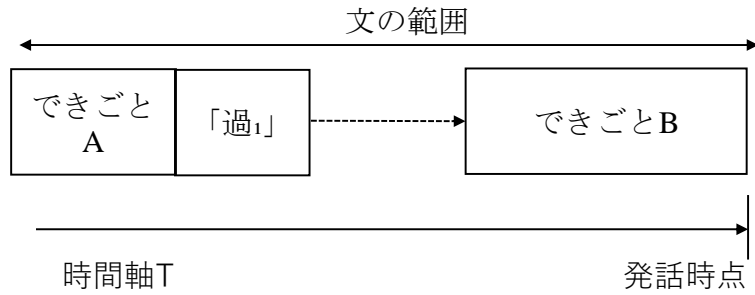


図 9：テキストにおける「過₁」の機能

この場合、文末助詞「了」によって希薄になった「過₁」の継起性という機能が解放され、「できごと B」は言語化されなければならない。「過₁」は他の継起関係を持つ接続助詞と共に、自然なテキストを形成することになる。この場合、「過₁」は発話時現在とのかかわりもなくなり、過去と未来の両方を表わすことができることとされている（孔 1986、刘 1988 など）。

それでは「経験」を表わす「過₂」はどうだろうか。本論の 3.4 節ですでに述べたように、「過₁」と「過₂」が互いに変換できるのは、使用文脈によって異なる意味機能に分化するためである。また、「過₁」と「過₂」の意味の違いは、構文上、文末助詞「了」によって「かつてのできごと」という視点が「次のできごと」という視点に変えられるからである。

つまり、「過₁」と「過₂」はもともと一つの「過」であり、「過」を使う時、はその使用文脈によって、視点が変化し、最終的に異なる意味になるのである。

「過₁」が平叙文においても継起性を表わしていることはすでに述べた。それでは、平叙文においては、「継起性」が基本的な機能なのだろうか、それとも「経験」が基本的な機能なのだろうか。この問題を解決するためにはまず、「過₂」の文レベルにおける使用文脈を検討する必要がある。

実は、2.2.6 節の先行研究の節ですでに述べたように、刘（1988：8）は「過₂」の使用条件を下記のように指摘している。

どのような状況において話し手はある動作が発生したことあるいはある状態が存在したことと言おうとして、「過₂」を使用するのだろうか。我々は六百万字の言語資料における「過₂」を分析した結果、話し手「過₂」を用いる時は、すべてなにかを説明、解釈するためであることが分かった。実際の言語使用において、「過₂」を含んだフレーズ、従属節あるいは文（以下「過₂の文」と略称する）は、常に意味的に関連を持つ別のフレーズ、従属節あるいは文（以下「関係の文」と略称する）と関わっている。時には「関係の文」は現れないこともあるが、ただ聞き手にとってそれが自明のことである。

もしある程度の言語的コンテクストがなければ、単独の「過₂の文」は意味上、自立することができないのである。（刘 1988：8 訳は論者による）

すなわち、中国語の「経験」を表わす「過₂」は発話で使われる場合、いつも別の関係の文を求める。その関係の文は言語化される場合とされない場合があるが、されない場合でもそれは聞き手と話し手の両方が知っているできごとである。

この「過₂」に対する説明は、アイヌ語の「a」に関する田村（福田）（1960）の記述を再び想起させる。アイヌ語の「a」は「過去のできごと」とそのあとの「できごと」の両方を問題にする場合に使われる。次のできごとは言語化されなくても良い。「a」と「過₂」のこの類似性は無視できない。4.2.1節ですでにアイヌ語の「a」は平叙文においても継起性を表わすと述べたが、中国語の「過₂」ももともとは継起性を表わしていたが、「過₁」と比べて使用条件が緩くなり、現在でいう「経験」の機能に分化したのではないかと考えられる。

このことを検証するために、平叙文だけの場合を考える。まず「過₂」と「過₁」の構文を比較されたい。

(123) 他 去 过 冲绳。
3SG 行く PRF 冲縄
「彼は冲縄に行ったことがある。」

(124) 他 去 过 冲绳 了。
3SG 行く PRF 冲縄 SFP
「彼はすでに冲縄に行っていた。」

(125) 我 吃 过 板栗。
1SG 食べる PRF 栗
「私は栗を食べたことがある。」

(126) 我 吃 过 板栗 了。
1SG 食べる PRF 栗 SFP
「私はすでに栗を食べていた。」

例（123）と例（125）は「過₂」の例文であり、例（124）と例（126）は「過₁」の例文である。例（123）～例（126）は中国語話者である論者としてはすべて自然な文である。ただ、例えば、知り合いと会ったばかりの時に、話し手が例

(123) のような「彼は沖縄に行ったことがある」、あるいは例 (125) のような「私は栗を食べたことがある」を発話すると、聞き手の頭の中には「なぜいきなりその話が出る？」あるいは「それからどうなる？」といった疑問が湧く。つまり、聞き手は、「彼は沖縄に行ったことがある」や「私は栗を食べたことがある」というできごとについて、その次のできごとを期待するのである。この場合の「過₂」は「過₁」のように次のできごとが言語化されないとその文が成立しないというふうにはなっていないが、やはり「過₂」が付いているできごととその次のできごとを求めることが分る。すなわち、平叙文において「過₂」を用いた文が単独で使われると、文としては不自然に感じられることがないが、発話としては不自然になる可能性が高いのである。

(127) 他 去 过 沖縄。所以 懂 一点 沖縄話。
3SG 行く PRF 沖縄 だから わかる すこし 沖縄語
「彼は沖縄に行ったことがあるので、沖縄語が少しわかる。」

(128) 我 吃 过 板栗。你 没有 吃 过。
1SG 食べる PRF 栗 2SG NEG たべる PRF
「私は栗を食べたことがある。あなたは食べたことがない。」

例 (127) は、例 (123) に次のできごとを追加して作成したものである。この場合は、次のできごと「懂沖縄話 (沖縄語がわかる)」と「去过沖縄 (沖縄に行ったことがある)」の間には因果関係があり、「過₂」を含む「去过沖縄 (沖縄に行ったことがある)」は意味上、完全な文になる。例 (128) は、例 (125) に別のできごとを追加して作成したものである。この場合は、別のできごと「没吃过 (食べたことがない)」と「吃过板栗 (栗を食べたことがある)」は対比という関係になっている。「過₂」を含む文「我吃过板栗 (私は栗を食べたことがある)」はより完全な文になる。この因果関係や対比という意味は田村 (福田) (1960) におけるアイヌ語の「a」に関する記述とかなり類似している。

つまり、平叙文において「過₁」と「過₂」は同じく継起性を表わす「過」から分化したものであると考えられる。「過」の意味分化は下記のように条件づけられると思われる。

表 9：平叙文における助詞「過」の機能分化

	分化	分化した意味	次のできごとを求める性質	文末助詞「了」との共起関係	視点
「過」 継起性	「過 ₁ 」	継起性・完結	○	共起する	次には
	「過 ₂ 」	継起性・経験	△	共起しない	かつて

○：必ずある △：なくても良い

同じく継起性を表わす助詞「過」から分化した「過₁」と「過₂」は、次のできごとを求めるといった性質においてはほぼ同じである。ただ、視点の異なりによって「過₁」は文末助詞「了」と共起し、「過₂」は文末助詞と共起しない。文末助詞「了」と共起する場合、その視点は「次には」に重点が置かれ、「過」は完結の「過₁」として解釈される。文末助詞「了」と共起しない場合、その視点は「かつて」に重点が置かれ、「過」は経験の「過₂」として解釈される。

以上、従来の研究において完結を表わすとされる「過₁」と経験を表わすとされる「過₂」の関係について議論した。本論は文レベルの平叙文において、「過₁」と「過₂」の意味的な交換性及び構文的特徴に基づき、「過₁」と「過₂」は同じく継起性を表わす「過」から分化したものであることを主張する。「過₁」は、文末助詞「了」を通して発話時点と関わり、継起性が希薄になり、文を終止することができる。終止要素がない場合は、いずれも次のできごとを求めるといった性質が解放され、その次のできごとが言語化されないと、文が成立しない。「過₂」は視点が「かつて」に置かれることで、継起性が希薄になり、ある程度文を終止することができるが、やはり次のできごとが言語化された方が、完全な文として認められやすい。

4.3. 疑問文における「a」と「過」の構文

アイヌ語の疑問文について、佐藤（2008：136）は、形式的に「諾否疑問文」と「疑問詞疑問文」の2種類に分けることができるとする。本論はアイヌ語の「a」と対照させるため、中国語の「過」が用いられた疑問文もこのように分けることにする⁴⁹。

⁴⁹ アイヌ語の疑問表現については田村（1997：72-74）が詳しく記述している。本論で収集したアイヌ語の「a」に関する疑問文の数が限られているため、ここでは可能性を指摘するにとどめる。日本語記述文法研究会（2003）、林（2020）などのような、日本語に対する意味機能に基づいた「不明項特定要求」、「判定要求」、「判定誘発」などの分け方は取らないことにする。

4.3.1. 諾否疑問文における「a」と「過」の構文

諾否疑問文は「はい、いいえ」で答えられるような疑問文である（佐藤 2008 : 136）。日本語の「はい、いいえ」に当たる回答表現は、アイヌ語においては一般的に「ruwe un、somo」で表わされ、中国語においては「是、不是/没有、还没有」で表わされる。

例（129）はアイヌ語の「a」を含む諾否疑問文である。例（130）は中国語の「過₁」を含む諾否疑問文である。

(129) aokáy⁵⁰ ipe-an a ruwe?
 INDF.PRON 食事する-INDF.SJB PRF の
 「あなた、お食事をお召し上がりになりましたか。」（佐藤 2008 : 209）

(130) 你 吃 过 蛋糕 了?
 2SG 食べる PRF ケーキ SFP
 「あなたはすでにケーキを食べましたか？」

実は、アイヌ語において助動詞「a」を含む諾否疑問文は多くの場合、例（129）のように「ruwe（の）」で終止する。田村（1997a : 72）によると、例（129）の文末の「ruwe」は上昇調のイントネーションをとる。

中国語の「過₁」も例（130）のように、「過₁」の場合、文末助詞の「了」で終止する⁵¹。この場合、「了」のイントネーションも疑問の上昇調になる。

例（129）、例（130）の文を参考に、また、前節の平叙文における「継起性」の議論を踏まえると、アイヌ語の「a」の諾否疑問文と中国語の「過₁」の諾否疑問文の構造は、それぞれに図 10 と図 11 のように示すことができる。

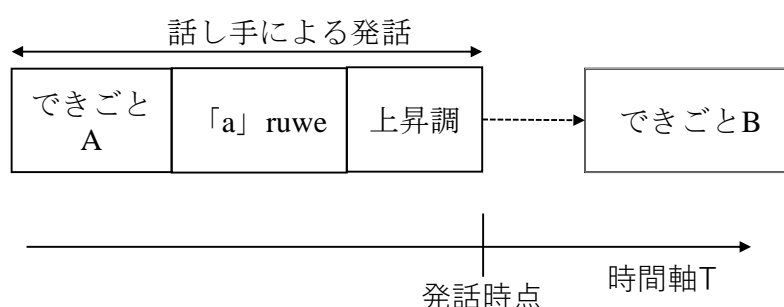


図 10 : アイヌ語「a」の諾否疑問の構造

⁵⁰ アイヌ語では、女性から成年男子へ尊敬の意を表わす場合に、不定人称代名詞、あるいは不定人称接辞が使われるとされている。

⁵¹ 朱（1982 : 202）は、疑問文は平叙文に、イントネーションを加えて構成されると述べている。

を表わす「過₂」になる。

(132) 你 吃 过 蛋糕?

2SG 食べる EXP ケーキ

「あなたはケーキを食べたことがありますか？」

ただ、この場合、中国語の「過₂」は現在関連性を持つ文末助詞の「了」と共起していないので、視点が「かつて」に置かれただけであり、本来の機能である「継起性」を表わさないわけではない。疑問文における「継起性」は上昇調のイントネーションによって表されているので、「過₂」の機能が背景化しただけである。

また、「a」を含む諾否疑問文の構文的条件は、イントネーションによって緩くなったと思われるが、「a」だけで終わる文と「a ruwe」で終わる文の意味にはどのような違いがあるのだろうか。

「ruwe (の)」は、田村 (1997a : 72) によると、日本語の「ノ」に相当し、疑問文においても文を名詞化する機能がある。日本語の研究を参照すると、日本語の「ノ」は諾否疑問文において、想像内容が事実と一致するものであるか否かを問う機能を持つとされている (林 2020 : 91)。日本語の「ノ」のこの機能を参考にすると、アイヌ語の「ruwe」を伴う「a」の諾否疑問文は話し手の想像内容を前提とする事実確認を行う疑問文だと考えられる。逆に、「ruwe」を伴わない「a」の諾否疑問文は単なる事実確認を行うものであり、想像内容を前提としていないと考えられる。

(133) e-teke e-pirpa a?

2SG-の手 2SG.SBJ-洗う PRF

「お前は手を洗ったか。」(佐藤 2008 : 78)

(134) toan kur ekasi utar káne ø-kor-e a ruwe?

あの 人 おじいさん たち お金 3SG.SBJ-を持つ-CAUS PRF の

「あの人がおじいさん達にお金をあげたのか。」(佐藤 2008 : 119)

例 (133) は「ruwe」を伴わない「a」の諾否疑問文である。この場合は、話し手は「お前は手を洗った」という内容を想像せずに、ただ「手を洗ったかどうか」という事実を確認しようとして発話したと思われる。例 (134) は「ruwe」を伴う「a」の諾否疑問文である。この場合は、話し手は頭の中で、「あの人がおじいさん達にお金をあげた」という内容を想像して、その事実を確認したものだと思

われる。

「ruwe」の有無による機能の違いは、「ruwe」の平叙文における機能からもうかがえる。田村（1997a : 39）によると、「ruwe」は述べた事柄について話し手の確実であるという態度を表現することができる。つまり、「ruwe」を伴う「a」の諾否疑問文は、モダリティ的に話し手の確信の度合いが上がるということである。

本論で収集したデータでは、「ruwe」を伴う諾否疑問文が多く、「ruwe」を伴わない諾否疑問文はかなり少ない。ただ、それらの文は論者がフィールドワークを行って直接確認したものではないため、そのモダリティ的な機能については推測を述べるにとどめることにする。まとめて言えば、ニュアンス的に「ruwe」を伴う「a」の疑問文は想像内容に基づく事実確認という質問方であり、「ruwe」を伴わない「a」の疑問文は想像内容に基づかない事実確認という質問方だと思われる。

4.3.2. 疑問詞疑問文における「a」と「過」の構文

では、アイヌ語の「a」の「疑問詞疑問文」と中国語の「過」の「疑問詞疑問文」はどうだろうか。まず、アイヌ語の「a」と中国語の「過」の「疑問詞疑問文」の例文を見てみよう。

- (135) mak an pe kusu e-moyre a ruwe an⁵²?
どうあるものわけ 2SG.SBJ-遅れる PRF の COP
「どういうわけで遅くなったの?」 (田村 1984 : 12-13)

- (136) 你 在 哪里 洗 过 手 了?
2SG で どこ 洗う PRF 手 SFP
「あなたはどこで手を洗ったか?」

- (137) 你 在 哪里 洗 过 手?
2SG で どこ 洗う PRF 手
「あなたはどこで手を洗ったことがあるか?」

アイヌ語の「a」の疑問詞疑問文は、論者が集めたデータでは、例（135）の1例しかない。例（135）は、姉が自分のうちに妹を呼んだが、妹の方はなかなか来ず、ようやく二人が会えた時に、姉から妹へこのように質問したというものである。ゆえに、この文におけるできごと「moyre（遅れる）」は、話し手と聞き手

⁵² ruwe an は ruwe ne の疑問形式である。

の両方にとって既知となっている。そのため、話し手は発話するとき、想像内容に基づいて質問したのではなく、すでに事実になっているできごとについて質問したのである。よって、この場合は、確実であるという態度を表わす「ruwe」を使うのがふさわしいと考えられる。例文が少なく、これも推測にとどまるが、疑問詞疑問文におけるできごとは、すでに事実になっているため、質問するとき「ruwe」を使用しないと、逆に不自然になるのではないかと思われる。つまり、疑問詞疑問文において「a」は文末に立つことができないと推測されるのである。

例(136)は中国語の「過₁」の例文である。これから文末助詞「了」を取れば、例(137)のような「過₂」の例文になる。この状況は、諾否疑問文における状況と同じだと考えられる。すなわち、中国語の「過₁」は疑問詞疑問文においても文末に立つことができない。なぜかという、「過₁」は疑問詞疑問文において、完了の意味を表わすため、「了」によって発話時点と繋がる必要があるからである。

また、中国語の「過₂」は疑問詞疑問文において、現在関連性を持つ文末助詞の「了」と共起しないので、元の「過」の「継起性」から、視点が「かつて」に置かれることになる。この場合、「経験」という意味が表面化する。

4.4. 本章のまとめ

本章では、平叙文と疑問文におけるアイヌ語の助動詞「a」と中国語のアスペクト助詞「過」を比較した。アイヌ語の「a」と中国語の「過₁」は平叙文の文末に立たないが、アイヌ語の「a」は疑問文の文末に立つという現象について議論した。そして、文レベルにおけるアイヌ語の「a」と中国語の「過」について下記のような結論を得た。

1. アイヌ語の「a」と中国語の「過₁」が平叙文の文末に立たないのは、どちらも「継起性」を表わすためである。中国語の「過₁」もアイヌ語の「a」も、文の中の終止要素によって、次のできごとを求める「継起性」という性質が潜在化し、文を終止することができる。逆に、終止要素がない場合は、どちらも次のできごとを求めるため、次のできごとが言語化されないと、文が終わらない感じになる。また、アイヌ語の「a」と中国語の「過₁」のいずれもモダリティ機能（断定性など）を持たない。中国語の「過₁」が文末助詞「了」を通して、発話時点と関わるのに対して、アイヌ語の「a」はそれ自身で発話時点と関わる。
2. 文レベルにおいて、これまで議論されてこなかった中国語の「過₁」と「過₂」の間に、文末助詞「了」による変換があることを確認した。「過₁」と

「過₂」は、同じく「継起性」を表わす「過」から、使用文脈によって分化したものだと考えられる。「過₁」は常に「了」を利用して現在時点とつながっているため、その視点は「次には」に置かれ、「継起性」が顕在化している。「過₂」は現在関連性を持つ「了」と共起しないので、視点が「かつて」に置かれて、「継起性」が潜在化し、「次のできごと」との関連性が認識されにくくなるが、「次のできごと」が言語化された方が「過₂」の文はより完全な文として認められるようになる。

3. アイヌ語の「a」は諾否疑問文の文末に立つことができる。その理由は、疑問文のイントネーションによってできごとの間の継起関係が表われ、「a」の構文的条件が緩くなるためである。中国語の「過₁」はアイヌ語の「a」と異なり、常に「了」を利用して現在時点とつながっているため、諾否疑問文の文末に立たない。また、まだ推測の段階であるが、アイヌ語の「a」が諾否疑問文の文末に立つのは、その文が想像内容に基づく事実確認を行うためのものであるからだろう。想像内容に基づく事実確認を行う場合、「a」の諾否疑問文は「ruwe」を伴う必要がある。
4. 疑問詞疑問文における中国語の「過₁」は、諾否疑問文の場合と同じく、「了」を利用して現在時点とのつながりを持つ必要があるため、文末に立つことができない。また、これも推測になるが、アイヌ語の「a」の疑問詞疑問文で述べられたできごとはすでに事実になっているため、確実であるという態度を表わすには「ruwe」が使われる。そのため、「a」は疑問詞疑問文の文末に立つことができない。

以上、文レベルでアイヌ語の「a」と中国語の「過」に関して議論したが、特に「a」に関するアイヌ語の言語データが限られているため、「a」が疑問詞疑問文の文末に立つことができないということについては、十分な議論ができなかった。また、「a」と「ruwe」が共起する疑問文と共起しない疑問文について、母語話者に確認することができず、データも限られているため、その結論は推測にとどまったが、今後、さらに資料を集めて推測した部分を検討していきたい。

なお、本章で扱った文レベルにおけるアイヌ語の「a」と中国語の「過」の「継起性」という機能は、さらにテキストレベルで検討する必要がある。それについては次の章で取り上げることにする。

第5章 テキストにおける「a」と「過」の機能

本章では、文レベルを超えて、テキストレベルにおけるアイヌ語の「a」と中国語の「過」に関する諸問題を取り上げる⁵³。本章は、下記に繰り返す、2.1.7節で述べたアイヌ語の「a」の問題点と2.2.8節で述べた「過」の問題点について議論を行うものである。

- 「a」のテキストレベルにおける時間表現の機能を考究する必要がある。
- テキストレベルにおいて「過₁」がなぜ文末に立たないのか、その理由を明確にする必要がある。また、テキストレベルの「過」と文レベルの「過」の連続性を検討する必要がある。

本論で集めた「a」のデータの多くは、一つの文ではなく、ukoysoytak（会話）、uwepeker（昔話）、upaskuma（伝説）のようなテキストレベルのものである。例（138）と例（139）は、そのようなテキストから抜粋したものである。

- (138) nea kararak tono ø-nikne inaw ø-nikne sake
その さきぼそ鳥 神 3SG.SBJ-固い 御幣 3SG.SBJ-固い 酒
sekor ø-hawan a korka, pirka inaw ø-pirka sake
と 3SG.SBJ-を言う PRF が 良い 御幣 3SG.SBJ-良い 酒
ani a-nomi a⁵⁴ a-nomi a,
で 1SG.SBJ-を祭る REDU 1SG.SBJ-を祭る REDU
「あのさきぼそ鳥の神は、粗末な御幣、粗末なお酒
と言っていたけれども、私は良い御幣、良いお酒をつくって、
本当にていねいにお祭りをしました。」（萱野 2005 : 71-72）

⁵³ 文とテキストは明確に線引きすることが難しい。これは従来の日本語の研究でも指摘されている（野田ほか 2002）。日本語の研究では概ね単文、複文、テキストに分けて議論することが多いが、論者が入手したアイヌ語のデータは ukoysoytak（会話）、uwepeker（昔話）、upaskuma（伝説）のようなものが多く、母語話者ではない論者にとって、日本語のような区分をするのは困難である。故に、本論は従来の研究と完全に合致していないが、単文と複文の述語部に現れる「a」を文レベルと見なし、従属節と連体修飾節に現れる「a」をテキストレベルと見なし、議論を進めることにする。

⁵⁴ アイヌ語の「...a...a」は、単独の助動詞「a」と意味が異なり、行動が連続的に繰り返されることを表わす助動詞である（田村（福田）1960 : 72）。

- (139) ahup-an ruwe ne hine hotke-an puyar pok ta
 入る-1PL.SBJ の COP て 寝る-1PL.SBJ 窓 の 下 に
 a-aki⁵⁵ tura a-ehotkehi a-kar hine
 1SG-の弟 と一緒に 1PL-の寝床 INDF-作る て
 hotke-an a p wentarap-an akusu
 寝る-1PL.SBJ PRF が 夢を見る-1PL.SBJ と
 「家の中へ入れられ、その夜は上座の窓、窓の下で
 弟と二人分の寝床が用意され、
 弟と二人で寝ました。そしてその夜、夢を見たのですが、」
 (萱野 1998b : 84)

例 (138) と例 (139) はいずれも物語の一部である。助動詞「a」はいずれにおいても従属節に現れ、会話のように発話時現在と関わりを持たない。故に、この場合の「a」の機能は文レベルというパーフェクト (Perfect) などでは解釈できないと考えられる。

文レベルにおけるアスペクトの機能はテキストレベルでは異なる機能を持つ。この点については、すでに日本語のアスペクト形式と中国語のアスペクト形式の研究で明らかにされている (工藤 1995、須田 2010、劉 2006 など)。アイヌ語の「a」はアスペクト形式 (本論では準アスペクト) である以上、テキストレベルにおいて、日本語や中国語のアスペクト形式と類似した機能を表わすのではないかと考えられる。従来の「a」に関する研究にはこの点に関する議論が見られないので、本章でこの考え方が成り立つかどうか検討することにしたい。

また、テキストレベルにおける中国語の「過」の機能については、先行研究の 2.2.7 節ですでに述べたように、劉 (2006) が従来の研究と同じく、「過」を「過₁」と「過₂」に分けて、その機能がそれぞれ継起性と先行性であるということを主張している。しかし、2.2.7 節で指摘したように、次の例の「過」は継起性と先行性のいずれとも解釈することができる。

- (140) 他 是 改邪归正的 榜样。年轻时候 杀 过 人，
 2SG COP 改心する の 見本 若い頃 殺す PRF 人
 判 过 死刑， 减刑 出来 之后 卖 过 早点，
 判決する PRF 死刑 減刑する 出てくる の 後 売る PRF 朝食
 开 过 公司， 现在 已 是 亿万富翁 了。
 開く PRF 会社 現在 すでに COP 億万長者 SFP

⁵⁵ アイヌ語の不定人称接辞「a-」は、物語の中で1人称の人称接辞として使われる場合には単複の区別がない。また、不定人称接辞「a-」は使役として使われることがある。

「かれは改心の見本である。若い時、人を殺して
死刑の判決を下されたことがある。
減刑されて出所した後は朝食を売ったことがあり、
会社を経営したことがあり、今ではもう億万長者になっている。」
(例 (48) の再掲)

例 (140) のように、「過」が用いられたできごと「殺人 (人を殺す)」、「判死刑 (死刑の判決を下される)」、「売早点 (朝食を売る)」、「开公司 (会社を起こす)」は、ある時点よりも先行して発生したできごとには違いない。しかし、この例の「過」はそれらのできごとの間に継起的な関係があるということも表わしていると考えられる。人を殺し、死刑の判決を下され、減刑されて出所して、まず朝食を売るような簡単な仕事をし、次には会社まで起こし、最後には億万長者になったというように理解されるので、このテキストにおける「過」が先行性を表わしているのか、継起性を表わしているのか、劉 (2006) の説では区別できなくなる。

故に、中国語の「過₁」と「過₂」のテキストレベルにおける連続性について改めて考える必要がある。本章ではその連続性について議論を行うことにする。

5.1. テキストとテキスト文法 (Text Grammar)

議論に入る前に、まずテキストの概念及び本論の考察範囲について触れておきたい。

本論で使うテキストと言う用語は、英語の Text の訳語である。テキストとは「意味的にまとまりをなす文 (連続)」のことであり、話し言葉におけるものも書き言葉におけるものもそれに含まれる。また、テキストは多くの場合 2 文以上から構成される (Halliday&Hasan 1976 : 1)。テキストは一般的に書き言葉を指すことが多く、談話という用語は話し言葉を指すことが多い。よって、書き言葉を持たないアイヌ語に対してテキストという用語を用いると、上記の慣行に反するが、ここでは工藤 (1995 : 19) に従い、話し言葉と書き言葉を一括してテキスト⁵⁶と呼び、本論で集めたアイヌ語のデータ ukoysoytak (会話)、uwepeker (昔話)、upaskuma (伝説) にもテキストという用語を適用することにする。

また、言語学において、テキストを対象とする研究はテキスト言語学と呼ばれることが多い。本章では庵 (1999 : 4-6) に従い、テキスト言語学とテキスト文法を区別する。テキスト文法 (text grammar) とは、テキストレベルの問題の内、文法能力が関与する問題を扱う分野とされる。

⁵⁶ 工藤 (1995) は Text のことをテクストと呼んでいる。

テキストレベルの文法は文法であり、一般化できるものである。これは寺村(1984)の作文における例で説明することができる。

(141) * (前略) その夜、山ノ上旅館で泊まっていた。翌日の朝、早く起きて、山にのぼった。(寺村 1984 : 144 (71) の改変 下線は論者による)

(142) (前略) その夜、山ノ上旅館で泊まった。翌日の朝、早く起きて、山にのぼった。(寺村 1984 : 144 (71) の改変 下線は論者による)

例(141)は外国人の留学生が作成した文である。このテキストにおいてアスペクト形式「ていた」を使うのは、日本人母語話者にとってはおかしいとされている。通常は、例(142)のようなアスペクト形式「た」が使われる。泊まったということは何時間か継続したので、継続性を表わす「ていた」が使われたと思われるが、例(141)と例(142)のテキストを考えた場合、「ていた」とすると、そのテキストの時間的結束性は崩れることになる。「た」の場合は、そのテキストにおけるできごとの連鎖が保たれ、自然な文になる。

そこで、本論の考察範囲はテキスト文法に限定する。また、テキスト文法と語用論 (Pragmatics) の区別も、下記の庵(1999)の記述に従う。

テキスト文法はテキストレベルでしか解決できない文法的現象を取り扱う分野であり、テキスト言語学の中心的位置を占める。ここで言う「文法」は「母語話者が持つ一般化が可能な規則 (rule) の総体」を意味し、「適切な言語運用のために必要とされる原理 (principle) の総体」を扱う「運用論」とは区別される。(庵 1999 : 4)

すなわち、本章では語用論的な考察ではなく、アイヌ語の話し言葉のデータをテキスト文法の範囲内で考察するものである。

5.2. タクシス機能と継起性

テキスト文法において時間表現に関するのはタクシスである。一般言語学の研究では、タクシスはヤーコブソン(1973)よってはじめて下記のように定義された。

タクシスは発言事象に関説せず語られる事象をもうひとつの語られる事象と関連させて特徴づける。

(ヤーコブソン 1973 : 156)

すなわち、タクシスは発話時点とはかかわりなく、伝達される事象を他の伝達される事象との関係によって特徴づけるものである。この定義は動作の間の時系列における論理関係を想定している。つまり、動作の間の「同時-先行-後続」という関係が問題にされている。工藤（1995：21）はこの概念を継承して、テキストの時間的構造の問題を扱う際、タクシスを「一つのできごとと他のできごととの外的時間関係」と定義している。

しかし、タクシスは同じ時間表現のアスペクトやテンスとどのような違いがあるのだろうか。工藤（1995）はタクシスとテンス、アスペクトの関係について、「発話時との関係」と「外的時間関係」という二つのパラメータに従い、下記のような区別を行っている。

表 10：工藤（1995）におけるテンス、アスペクト、タクシスの区別⁵⁷
（工藤（1995：23）に基づき論者が作成）

	発話時との関係	外的時間関係
テンス	+	+
アスペクト	—	—
タクシス	—	+

（注：「+」関係あり、「—」関係なし）

テンスが現在との関連性を表わす時、発話時と関係づけられ、「過去」、「現在」、「未来」を表わす。テンスが現在関連性を持たない場合、相対テンスになり、できごとの間の時間関係を表わすことになる。アスペクトは発話時と関係を持たない、もっぱらできごとの内部の時間概念である「完了」、「継続」などを表わす。タクシスは発話時と関係を持たない、もっぱらできごとの間の時間関係を表わす。テンス、アスペクトとタクシスのこの関係は、マ스로フ（2018[1984]）で挙げられているラテン語の例がよく説明していると思われる。

(143) “Veni, vidi, vici” 「来た、見た、勝った」
（マ스로フ 2018[1984]：3）

この例文では、アスペクト的に、「来る」「見る」「勝つ」の三つの動作が限界まで達成されたという完了の意味が表わされている。また、テンス的に、話し手の発話した時点から見て、3つの動作のいずれもすべて過去のことである。さら

⁵⁷ 表は論者の手によってまとめたものであり、注も論者がつけたものである。

に、タクシスの、3つの動作が発話された順番に発生したという連鎖的な時間的順次性を表わしている。

また、日本語の研究成果では、工藤（1995）によると、タクシス機能には3つの下位分類がある。それぞれ継起性、同時性、後退性である。日本語の場合、文レベルのアスペクトの完成性（完結）、継続性、パーフェクト性は、基本的にテキストレベルのタクシスの継起性、同時性、一時後退性と照応しているとされる（工藤 1995 : 114）。なお、日本語の研究では、パーフェクト（Perfect）は「時間の後退性」という機能と同時に、「原因・理由の説明性」という「ノダ文」と共通するムード性とも絡み合っているとされる。

日本語の研究成果を参考にすると、文レベルにおいて過去・完了を表わすとされるアイヌ語の助動詞「a」はテキストレベルでは継起性、あるいは一時後退性を表わす可能性があるかと推測される。以下、テキストにおける中国語の「過」の機能と比較しながら、アイヌ語の「a」のテキストレベルにおける機能を考察していくことにする。

5.3. 田村（福田）（1960）と佐藤（2006）の示唆的な記述

「a」のタクシス機能と明確に述べられていないが、田村（福田）（1960）と佐藤（2006）の研究ですでにそれと類似する見方が示唆されていると思われる。再び引用するが、田村（福田）（1960）は「a」の機能を下記のように考えている。

「現在問題になっている時よりも以前に行動が行われたこと」を表す《…した》。現在からみて実際には過去のできごとであっても、それ以後のできごとが問題にされているのでなければこの助動詞は用いられない。

（田村（福田） 1960 : 71）

この記述では、「a」が明らかにできごとの間の関係を表わすとされている。「a」の時間を表わす性質を、テキストレベルで考えれば、「a」はできごとの間の時間関係である「同時-先行-後続」のいずれかを表わしているに違いない。また、「a」の構文的特徴について、佐藤（2006）は下記のように記述している。

a は明白に過去に属する事実に対しても用いられる。例 : k-onaha tapkar siri ku-nukar a wa 「父が踏舞するのを私は見たよ。」他方、文法的な観点から言えば、a は平叙文を終止することがなく、接続助詞、名詞句、あるいは終助詞 wa が後続するのが一般的である。このことは、a を含む構造が文の階層構造から言って中間段階に属することを示すものと考えられる。（佐藤 2006 : 64）

「a」が終助詞を後続するのは、文あるいは主節の文末であろう。「a」が接続助詞を後続するのは、おそらく従属節に現れる場合である。後者の場合、「a」が現れる環境は、すでに単文ではなく、複文になっている。本論は従属節を含む文を広い意味のテキストとして考えているので、この場合の「a」はテキストレベルのものとして扱うことになる。「a」が名詞句を後続している場合も、同じく、すでに文末ではなく、連体修飾節に現れているとみなすので、この場合の文もテキストとして考える。

以上の示唆的な研究から、従属節や修飾節にもしばしば現れる「a」も、できごとの間の時間関係を表わす役割があると推測できる。以下、従属節、修飾節、主節における「a」に分けて、先述のテキストレベルの諸研究の成果を参考にし、アイヌ語の「a」がテキストレベルにおいてどのような機能を表わしているのか、考察していくことにする。

5.4. 従属節における「a」の機能：継起性

本論で集めたデータのうち、従属節における「a」は、単独で動詞の直後に現れる場合があり、他の時間を表わす要素、例えば継続形式の「kor an」や「wa an」と一緒に現れる場合もある。また、時間表現と関連する意志表現と共起することもある。以下、動詞の直後に現れる「a」、意志表現と共起する「a」、継続形式と共起する「a」の順で議論することにする。

5.4.1. 動詞直後に現れる「a」

従属節の述語動詞の後ろに現れる「a」は、どのようなタクシス機能を表わすのだろうか。まず、アイヌ語の「a」の例文を見てみよう。

- (144) a-hokúhu ø-soyene a p, arpetpa wa
 1SG-の夫 3SG.SBJ-外へ出る PRF のに 向こう岸 から
 cip ø-yanke humi ø-as akus ora,
 船 3SG.SBJ-に着ける の音 3SG.SBJ-立つ と そして
 humihi ka ø-isam
 の音 も 3SG.SBJ-ない

「私の夫が外へ出ましたが、向う岸に
 舟を着ける音がしますと、

それからは何の音もしません。」(例(119)の再掲)

(145) pínay ukowtur ta ø-paye a p
 谷 の間 に 3SG.SBJ-行く .PL PRF のに
 néa pínay uwekari ø-soske hine,
 その 谷 両方から 3SG.SBJ-はがれる て
 「谷の間に行きましたところ、
 その谷が両方からくずれて、」 (田村 1985 : 72-73)

(146) hetak, tókap eci-é kuni p,
 さあ お昼 2PL.SBJ-を食べる べき もの
 tun atarimay usa ø-pirka aep,
 二人 分 いろいろな 3SG.SBJ-良い 食べ物
 e-se wa os e-arpa.
 2SG.SBJ-を背負う て の後 2SG.SBJ-行く
 e-arpa kuni e-epakasnu a
 2SG.SBJ-行く の 2SG.SBJ-を教える PRF
 ciki kari e-arpa nankor na.
 なら そこから 2SG.SBJ-行く だろう SFP
 「さあ、あなたがたがお昼に食べるもの、
 二人分の、いろいろな上等な食べ物
 を背負って、あとから行きなさい。
 行き方を教えられたなら、
 そこから行くんですよ。」 (田村 1986 : 8-9)

例 (144) は渡し守の妻の話に出てくるものである。自分の夫は昨夜、人に呼ばれてその人を渡そうとして舟を向こう岸まで漕いだ。妻の方は夫の一連の動作を聞いていた。できごと「soyene (外へ出る)」は時間的にできごと「humi as (音が立つ)」の前に発生した。つまり、「soyene (外へ出る)」と「humi as (音が立つ)」は時間軸上において次々と発生したと考えられる。

例 (145) は、沙流川流域の村へ夜襲に来た人が村の人に追われ、谷の間から逃げたが、その時その谷がなぜか知らないが両側から崩れ、夜襲した人を殺したという話に出てくるものである。夜襲した人たちがちょうど谷に「paye (行く)」と、その谷が「soske (はがれる)」ということが発生したので、二つのできごとは時間的に次々と起こっているように読める。

例 (146) は、アイヌの若者が和人のところに交易に行くところで、和人夫婦の養子で気性が激しいアイヌ人と友達になり、和人夫婦から、山の中にいる息子を訪ねることを頼まれたという話に出てくるものである。和人夫婦はアイヌの

若者に教えられたらそこに行くんだよと述べている。その動作「epakasnu (教える)」は動作「arpa (行く)」の前に発生し、動作「epakasnu (教える)」と動作「arpa (行く)」は時間的に継起的な関係を持っていると思われる。

例 (144) (145) (146) のそれぞれのできごとの間の時間関係を時間軸で表わすと、図 12 のようになるだろう。

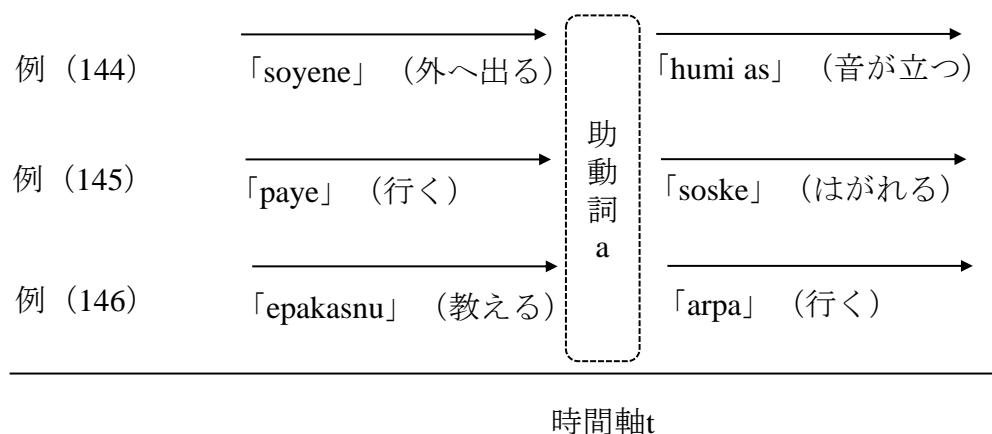


図 12 : 例文 (144) (145) (146) が表わす時間関係

例文 (144) (145) (146) にある「a」が後続した動詞は、すべて「a」によってその後ろの動詞と関連付けられている。時間軸上の関係からすると、「a」の前のできごとと「a」の後ろのできごとは連鎖的な時間的時性を持っていると考えられる。故に、「a」は図 12 で示されるように、できごとの継起的な関係、すなわち、継起性を表わすと考えることができる。

5.4.2. 意志 (未来) を表わす助動詞と共起する「a」

アイヌ語の意志を表わす助動詞「etokus (もうすぐする)」「kusu ne⁵⁸ (するつもり)」は、佐藤 (2008 : 192) によると、時間的な未来を表わすことができる。ゆえに、この節では同じ時間表現である「a」とこれらの助動詞が共起した場合に、「a」が何を表わすのか、考えてみたい。

ただ、本論で集めたデータの中には、助動詞「etokus」と「a」が共起した例文は見つからない。そこで、以下では、「a」と「kusu ne」が共起した例文だけを対象とする。

⁵⁸ 田村 (1995 : 369) も「kusu ne」を未来の表現として記述している。

- (147) *núman k-ek kusu ne a korka,*
 きのう 1SG.SBJ-来る つもり PRF けれど
toy or un pe ka, tane túnasno
 畑 ところ の もの も 今 早く
a-uyna kuni hi néno ø-an
 INDF-取り入れる.PL べき の そのように 3SG.SBJ-ある
 「きのう来るつもりだったけれど、
 畠のものも、もう早く
 とり入れなきゃならないようだ。」(田村 1984 : 12-13)

- (148) *oro péka ø-karkarse wa ø-ran pe ne hike,*
 そこを 3SG.SBJ-転がる て 3SG.SBJ-下りる もの COP と
ø-iperusuy wa ø-e kusu ne a p
 3SG.SBJ-おなかがすく て 3SG.SBJ-を食べる つもり PRF のに
ene ø-karkarse.
 このように 3SG.SBJ-転がる
 「その穴をころがって落ちたのですが、
 おなかがすいて食べようとしたのに、
 このようにおにぎりがころがってしまったのです。」(田村 1986:22-23)

例 (147) は、姉が妹に「なぜ呼んでも来なかったのか」と質問したときの妹の回答である。その回答の内容から見ると、「*ek kusu ne* (来るつもりだ)」はその次のできごとの「*uyne* (取り入れる)」の前に起こっている。「来ようとする」というできごとは「*a*」によって完結させられ、その次の畑のものを「*uyne* (取り入れる)」というできごとに移っている。この場合、「*a*」は、やはり継起性を表わすと考えられる。

例 (148) は、小さな和人が糠のおにぎりを食べようとして、そのおにぎりが何かの拍子で穴に落ちてしまったという話に出てくるものである。「*e kusu ne* (食べようとする)」はその次のできごと「*karkarse* (転がる)」の前に起こっている。時間軸上、「*e kusu ne* (食べようとする)」と「*karkarse* (転がる)」は「*a*」によって時間の間隔がなくなり、隣接関係をなしていると考えられる。すなわち、二つのできごとは連鎖的な順次性を持つ。この場合、「*a*」は継起性を表わすと考えられる。

以上の「*kusu ne*」の例文を見ると、アイヌ語の「*a*」は未来を表わす意志助動詞と共起した場合も、「継起性」を表わすと言えるだろう。

5.4.3. 継続形式「wa an」と共起する「a」

アイヌ語の「a」は、継続のアスペクト形式「wa an」とも共起することができる。この点において中国語の「過」とは事情が異なる。中国語の「過」はアスペクトの継続形式「在」「着」と共起することができないからである。また、中国語の継続形式「着」は、テキストにおいて同時性を表わすとされている(劉 2006: 260)。文レベルで動作パーフェクトとされる「a」と状態パーフェクトとされる「wa an」とが共起した場合、「a」はテキストレベルでどのような機能を果たすのだろうか。以下では、「a」と「wa an」が共起した例文を考えることにする。

- (149) tapne, sine po a-kor wa án-an a korka,
 このように 一人 息子 1SG.SBJ-を持つ て いる-1SG.SBJ PRF けれど
 a-poho i-y-okpare wa, siknak-an
 1SG-の息子 1SG.OBJ-挿入音-を虐待する て 目が見えない-1SG.SBJ
 「かくかくしかじかで、私には一人息子がいましたが、
 息子が私を虐待して、目が見えなくなりました。」(田村 1985 : 8-9)

- (150) néno cís-an kor hotke-an wa án-an
 そのように 泣く-1SG.SBJ ながら 横になる-1SG.SBJ て いる-1SG.SBJ
 a p oro ta, a-yup-útari ekimne ø-earki híne
 PRF のに そこに 1SG-の兄-たち 山へ 3SG.SBJ-に来る て
 「そのまま泣きながら横になっていましたが、
 そこに、兄たちがやって来て、」(田村 1988 : 24-25)

例(149)は、一人息子を持つお婆さんが、親不孝の息子とその妻に虐待されて、眼が見えなくなったという話に出てくるものである。息子を「kor wa an (持っている)」ことは話者の視点から、次のできごと「okpare (虐待する)」をのべるときにはすでに背景化していると思われる。話の筋は、息子を「kor wa an (持っている)」からすぐに「okpare (虐待する)」、そして「siknak (目が見えなくなった)」に移ったと考えられる。

例(150)は、ある女性が自分の小さい兄と一緒に山の狩り小屋に行った時、神の授かりで妊娠したが、村の人に兄弟間の不祥事として笑われ、また、自分の親や兄たちに殴られて、狩り小屋へ追放されたという話に出てくるものである。その女性が狩り小屋に着き、「hotke (横になった)」とたん、兄たちがすぐに狩り小屋「earki (に来る)」ということが発生した。ゆえに、そのストーリーは「a」によって、「hotke wa an (横になっている)」という状態が背景化され、「earki (に来る)」に移ったと考えられる。

例 (149) と (150) のできごとの時間的順序は図 13 のように表わすことができる。

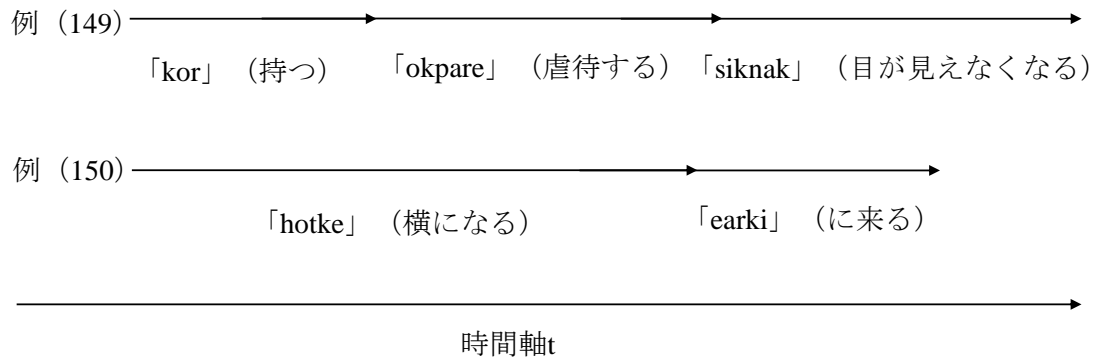


図 13 : 例文 (149) と (150) が表わす時間関係

図 13 で示されるように、例 (149) と例 (150) のできごとは時間軸上、「次からつぎへと」起こり、物語のストーリーを時間軸上どんどん先に進めているように感じられる。故に、「a」は継続形式「wa an」と共起した場合も、タクシスの継起性を表わすと考えられる。ただ、上記の例文から、継続形式「wa an」はできごとを状態化するので、そのできごとの状態は背景化する可能性があると思われる。では、継続的形式「wa an」単独の場合は、どのようなタクシス機能を持っているのだろうか。

(151) inkar-an akusu, mun-um ta cise ka ape ka
 見る-1SG.SBJ と 草-の中に 家 も 火 も
 ø-isam uske ta ray-an wa án-an.
 3SG.SBJ-ない ところに 死ぬ-1SG.SBJ て いる-1SG.SBJ
 「気がついてみますと、草むらに家も火も
 ないところに、私は死んでいました。」(田村 1988 : 60-61)

(152) kiyanne a-yupi hoski ø-ahun. poniwne ayupi
 年上 1SG-の兄 先に 3SG.SBJ-入る 年下 1SG-の兄
 os ø-ahun. iyotta iyos no ahun-an.
 後に 3SG.SBJ-入る 一番 後 で 入る-1SG.SBJ
 ruwe, osisoun wa, rukiyanne tu menoko,
 の 右座 から 少し年上 二人 女の子
 ø-usamerok wa ø-oka.
 3PL.SBJ-並んで座る て 3PL.SBJ-いる

「上の兄が最初に入り、下の兄が
 その後に入り、一番最後に私が入りました。
 右座に少し年上のふたりの女性が
 並んで座っていました。」(田村 1989 : 12-13)

例(151)は、沼貝の神様が人間に悪いことをしたため、死んでしまったという物語に出てくるものである。死んだ後、魂は身体から離れたが、生きている時と同じように世界を観察している、という場面である。つまり、この例文は魂が述べたものである。できごと「*inkar* (見る)」よりできごと「*ray* (死ぬ)」は先に起こっている。そして、「*inkar* (見る)」は「*ray wa an* (死んでいる)」という状態の中で起ったできごとである。

例(152)は、3兄弟が美しい娘たちがいる狩り小屋へ入る時の描写である。3兄弟のそれぞれのできごと「*ahun* (入る)」は時間軸上次から次へと起こっているが、その家にいる姉妹の「*usamerok wa an* (並んで座っている)」状態は、3つの「*ahun* (入る)」が発生したときも、ずっと継続している状態である。

これらの物語にある「*inkar* (見る)」と「*ahun* (入る)」は物語の時間を前に勧めているが、「*wa an*」が後続している「*ray* (死ぬ)」と「*usamerok* (並んで座る)」は、その時間の前進をいったん停止し、「*inkar* (見る)」と「*ahun* (入る)」の背景的事実を説明していると思われる。

以上の説明から、文レベルで状態パーフェクトを表わすとされる継続形式「*wa an*」はテキストレベルでは背景を説明する機能を持つと言えるだろう。また、「*wa an*」に「*a*」が後続した場合、「*wa an*」の背景を説明する機能は潜在化し、「*wa an*」によるストーリーの停滞はそこでいったん終了し、継起性を表わす「*a*」によって物語のストーリーのさらなる前進が促されていると考えられる。

5.4.4. 継続形式「*kor an*」と共起する「*a*」

前節で述べたように、中国語の「過」はアスペクトの継続形式「在」「着」と共起することができない。中国語の観点から見ると、アイヌ語の「*a*」は異常な存在である。アスペクトの継続形式「*wa an*」と共起するだけでなく、動作継続の「*kor an*」とも共起することができるからである。では、アイヌ語の「*a*」と動作継続の「*kor an*」が共起した場合は、どのような機能を表わすのだろうか。

(153) *mak ne siri* *ø-an* *sekor, ku-yaynu* *kor*
 どう COP の様子 3SG.SBJ-ある と 1SG.SBJ-を思う ながら
oka-an *a* *p oraun, ene,* *sicigaci cup* *sekor,*
 いる.PL-1PL.SBJ PRF のに それから このように 7月 月 と

sísam itak ani a-ye, sicigaci cup, yōka sekor a-ye
 和人 言葉 で INDF-言う 7月 月 4日 と INDF-言う
 yakun aynu itak ne a-ye yakun tupesan to,
 なら アイヌ 言葉 COP INDF-言う なら 八つの 日
 sicigaci tupesan tóho wano, nísapno ø-an pe,
 7月 八つの の日 から 急に 3SG.SBJ-ある もの
 sísam tumi, easir, ø-hopuni.

和人 戦争 それこそ 3SG.SBJ-起きる

「どうしたことだろうと、私は思いながら
 私達はいたが、今度は、このように、七月の月と
 日本語で言う、七月の月、八日という
 ならばアイヌ語で言うなら、八日、
 七月八日から、急なこと、
 日本の戦争がとうとう、勃発した。」(田村 1984 : 46-47)

この例文は、二人の姉妹が日本の戦争について話をしている内容の一部である。二人は戦争が勃発した日のいろいろな異常な事態を思い出しながら話している。このテキストでは、「yaynu kor oka (思っている)」に「a」が後続している。色々な異常事態が起こっていて、あれこれを考えて、なぜだろうと発話者は思っていたら、ついに「tumi hopuni (戦争が起きた)」。この場合、「a」は「yaynu kor oka (思っている)」という継続しているできごとを、その継続性を無視して、そのまま「hopuni (起きる)」と関係づけている。この状況で、「a」は「yaynu kor oka (思っている)」と「hopuni (起きる)」の二つのできごとの継起関係を表わしていると考えられる。

- (154) tu kamuy sinrit re kamuy sinri
 二人の 神 先祖 三人の 神 先祖
 a-opéntari kamuy-oroytak-an
 1SG.SBJ-神々の名前を呼び並べる 神-のこころの話す-1SG.SBJ
 kor án-an a p, a-kor nusa or un,
 ながら いる-1SG.SBJ PRF のに 1SG.SBJ-を持つ 祭壇 ところ へ
 kararak sine p, pet pes ø-san híne,
 カラス 一羽の もの 川 に沿って下の方へ 3SG.SBJ-下りる て
 nani a-kor nusa or ta ø-rew híne cise
 すぐ 1SG.SBJ-を持つ 祭壇 ところに 3SG.SBJ-鳴くて 家

hekoteno ø-an wa, ø-hepoki
 の方へ 3SG.SBJ-いる て 3SG.SBJ-頭を下げる
 ø-hetari kor, ene ø-hawean hi,
 3SG.SBJ-頭を上げる ながら このように 3SG.SBJ-言う こと
 「二人も三人もの神々の先祖に
 お願いして、祈っていましたが、
 私の祭壇のところへ、
 カラスが一羽、川上の方から川ぞいに下って来て、
 すぐに私の祭壇にとまって、家
 の方を向いて、首を上下に振り
 ながら、こう言いました。」(田村 1997b : 40)

例(154)は、自分の息子が山へ猟に行ったが、話し手がそれを心配して、神様へ祈っていたところ、カラスの神様がやって来て、息子の状況を告げるという話に出てくるものである。「kamuy-oroytak kor an」はたくさんの神様へ祈り続けるということを表わしている。神様へ祈ったら、カラスの神様が川へ「san (降りてくる)」というできごとが起った。この場合も、因果関係で解釈できないわけではないが、やはり、「a」が後続することで、「kamuy-oroytak kor an (神様へ祈り続ける)」というできごとの継続性が背景化され、「kamuy-oroytak kor an (神様へ祈り続ける)」とカラスの「san (降りてくる)」の継起性が前景化したと思われる。つまり、この例文の場合も、「a」は継起性を表わすと言えるだろう。

(155) ahun-an híne suke-an kor án-an a p
 入る-1SG.SBJ て 炊事する-1SG.SBJ ながら いる-1SG.SBJ PRF のに
 rápok, a-ponyupi ø-ahun híne, *konto*
 している間 1SG-小さい兄 3SG.SBJ-入る て 今度
 sukeepakas-an kor ekesinne i-yosikkurkote
 炊事に立ち働く-1SG.SBJ ながら あちこちに 1SG.OBJ-をじっと見つめる
 「そして家の中へ入って炊事をしていましたが、
 その間に小さい兄が家の中に入って来て、今度私が料理して
 立ち働いていますと、あちこち私を目で追ってじっと見えています。」
 (田村 1988 : 22-23)

例(155)は、小さい兄が自分の妹がなぜ妊娠しているのか不審に思い、問いかけようとする場面である。妹が「suke kor an (炊事している)」と、その小さい兄が家の中に「ahun (入る)」。この文脈では、「suke kor an (炊事している)」は

終止し、物語のストーリーはすでに次のできごと「ahun (入る)」に移ったと考えられる。ゆえに、継続動作「suke kor an (炊事している)」と「ahun (入る)」は継起的な時間関係になり、「a」はこの例文でも継起性を表わすと言えるだろう。

以上の例文で分かるように、「a」は動作継続の「kor an」と共起した場合、その継続の動作は終止し、テキストのストーリーは次のできごとに移る。このことから、「a」はやはり継起性を表わすと考えられる。

また、「kor an」は動作継続だけではなく、慣習的な動作をも表わすことができるとされている (佐藤 2008 : 197)。本論で集めたデータの中には、この慣習的動作を表わす「kor an」と共起した「a」の例文がある。では、この場合の「a」は何を表わすのだろうか。

- (156) tapne kane, a-unúhu, sísam mosir ta ø-an wa ora,
 このように 1SG-の母 和人 島 に 3SG.SBJ-いる てそれから
 tun a-ne wa,yam patek a-e kor
 2人 1SG.SBJ-COP て 栗 ばかり 1PL.SBJ-を食べる ながら
 oka-an a p ora ene, tanto ne he,
 いる.PL-1PL.SBJ PRF のに それから このように 今日 COP にも
 ukuran ne he tap, i-yutek hawe
 昨夜 COP にも 1SG.OBJ-挿入音-を使い-にやる の
 ene ø-an hi ne wa kusu, yam o
 このように 3SG.SBJ-ある の COP ので 栗 3SG.SBJ-入る
 saranip a-se wa, yán-an ruwe tapan na.
 籠 1SG.SBJ-を背負う て 上げる-1SG.SBJ の COP SFP
 「かくかくしかじかで、私の母が、和人の島に暮らしていてそして、
 私たち二人で、栗ばかり食べて暮らしていましたが、
 このように、今日だか、ゆうべだか、
 こうして私を遣わしたから、栗の入った
 籠を私は背負って上って来たのですよ。」 (田村 1984 : 36-37)

- (157) kesto kesto, ø-sirpekertere wa, sirpeker (ko) kotpok ta
 毎日 毎日 3SG.SBJ-夜明けを待つ て 夜明ける 直前 に
 ø-soyne, sirkunne kotpok ta ø-ahun kor
 3SG.SBJ-出かける 日が暮れる 直前 に 3SG.SBJ-入る ながら
 ø-an a p, ø-hopuni ø-moyre siri ø-an?
 3SG.SBJ-いる PRF のに 3SG.SBJ-起きる 3SG.SBJ-遅い の様子 3SG.SBJ-いる

「毎日毎日、夜が明けるのを待って、夜が明ける間際（まぎわ）に出かけて、日が暮れる間際に家に帰って来ていたのに、今日は寝坊しているんだねえ」（田村 1997b : 30）

例（156）は、アイヌの女神がアイヌモシリ（北海道）から和人の島へ逃げたという物語の一部である。自分の夫が妾のところに行って帰って来ないので、女神は家出した。和人の国で自分が妊娠したことに気づき、それから神の子供を産み、育て、アイヌモシリへ帰らせるという話に出てくるものである。例（156）はその神の子供が話した内容である。その話の筋から、「e kor oka⁵⁹（食べている）」は「kor an」の慣習的動作を表わす用法であり、栗を食べて暮らしているという意味になる。その慣習のある暮らしは、籠を背負って「yan（上がる）」というできごとが現れるまで継続していたと思われる。つまり、「a」が「e kor oka（食べている）」に後続したのは、「e kor oka（食べている）」と籠を背負って「yan（上がる）」というできごとに区切りをつけるためである。「e kor oka（食べている）」という慣習的な状態から籠を背負って「yan（上がる）」というできごとへ切り替えていることから、「a」は継起性を表わすと考えられる。

例（157）は、働き者の妹の夫を嫌い、兄弟で妹の夫を殺す話に出てくるものである。妹の夫はその兄弟の計画を知ると、病気を装い、いつものように早起しなかった。そこで、兄弟が妹の夫はどうしているのだろうと話しているのである。「kor an（ている）」は「soyne（出掛ける）/ahun（入る）」に後続して、妹の夫の慣習的な動作を表わしている。その状態は今日の「hopuni moyre（起きる、遅い）」まで続いている。この例文の文脈からすると、ストーリーは、「soyne/ahun kor an（出掛け/入っている）」がいったん終了し、その次のできごと「hopuni moyre（起きる、遅い）」に移ったと思われる。故に、慣習的な「kor an」の後ろに後続する「a」は、その状態とできごとの継起性を表わすと考えられる。

以上の説明から、アイヌ語の「a」は慣習を表わす「kor an」と共起した場合でも、継起性を表わすと言えるだろう。

5.5. 連体修飾節における「a」の機能

5.5.1. 動詞直後に現れる「a」

中国語の「過₁」は例（158）のように連体修飾構造に現れる場合は、先行性を表わすとされている（劉 2006 : 259）。

(158) 老家 的 农村 已经 变成 城市 了。
故郷 の 農村 すでに に変わる 都市 SFP

⁵⁹ oka は an の複数形である。

我曾经住过的房子，早已不见踪影。
 1SG 昔 住む PRF の家 早くすでに NEG 現れる 痕跡
 「故郷の農村はすでに都市に変わっていた。
 私がかつて住んでいた家は、すでに跡形もなくなっていた。」

例(158)では、「過」がついているできごと「住(住む)」は、できごと「变成城市(都市に変わる)」よりも前に起こったことである。この例文では、できごとを記述する順序とできごとが生じた順序が異なる。記述の順序が変わっても、連体修飾構造における「過」がついているできごとは、生起順的に先に起こったと理解される。この場合、「過」は先行性を表わすとされている。

それでは、アイヌ語の「a」は連体修飾構造においてどのような機能を表わすのだろうか。まず、連体修飾構造における「a」の例文をいくつか見ていくことにする。

(159) h́ine ora ø-a⁶⁰ a uske ta suy
 そして そこに (奥様が) 3SG.SBJ-座る PRF ところに また
 ø-arpa h́ine ø-mono a.
 3SG.SBJ-行く て 3SG.SBJ-正座する
 「そして奥様は坐っていたところに、
 また戻って行って、坐りました。」(田村 1985 : 18-19)

(160) ruwe ne akusu or néa kiyanne a-yupi,
 の COP と そこ あの 年上 1SG-の兄
 a-se a kam ø-ahupte-yar
 1SG.SBJ-背負う PRF 肉 3SG.SBJ-入れる.PL-CAUS
 「するとあの上の兄が、私の背負って来た
 肉を家の中に入れさせました。」(田村 1989 : 18-19)

例(159)では、助動詞「a」は連体修飾構造に位置している。助動詞「a」はできごと「a(座る)」に後続しているが、「a(座る)」はその後ろのできごと「mono a(正座する)」よりも先に起こっている。例(160)も同じように、助動詞「a」がついている「se(背負う)」というできごとは、「a」がついていない「ahupte(入れる)」よりも先に発生していることが文脈からわかる。つまり、例(159)と(160)においては、「a」がついているできごとは記述上でも発生順でも先に叙述されている。このように、記述の順序とできごとの生じた順序が同じであることから、

⁶⁰ アイヌ語では、動詞「a(座る)」と助動詞「a」は同じ形態である。

「a」は連体修飾構造においても継起性を表わすと言えるだろう。さらに例文を追加して検討してみよう。

- (161) *ø-iruka ne yakka, sine cup tane ø-ehanke pakno,*
 3SG.SBJ-短い COP でも 一つの月 今 3SG.SBJ-に近づく ほど
uwenewsar-as. ku-koytak ka
 互いにいろいろ話し合っ^て楽しむ-1PL.SBJ 1SG.SBJ-に話しかける も
en-koytak ka ki a ku-kor oper,
 1SG.OBJ-に話しかける も する PRF 1SG.SBJ-を持つ おじょうちゃん
tane, ø-kor, kiyanne sensey utar ø-arki ø-túnas wa,
 今 3SG.SBJ-を持つ 年上 先生 たち 3PL.SBJ-来る.PL 3PL.SBJ-早いで
turano, kotan un ø-hosippa kuni, ø-ye akusu
 一緒に 村 へ 3PL.SBJ-帰る.PL べき 3SG.SBJ-言う と
orano ku-cis anki ku-yaynu.
 それから 1SG.SBJ-泣く しそうに 1SG.SBJ-を思う
 「短い間だったけれど、もう一ヵ月近くなるほど、
 楽しく語り合った。私が彼女に話したり
 彼女が私に話したりした私のお嬢さんが、
 今、自分の、年上の先生たちが来るのが早くなって、
 一緒に、くにへ帰るのだと、言うので
 私は泣きそうな気がする。」(田村 1984 : 54-55)

- (162) *ne ø-emeske su ani ne wa oka a-se rok*
 その 3SG.SBJ-欠ける 鍋 で その 1SG.SBJ-を背負う PRF.PL
cékunip ne ciki kam ne ciki, a-sap-te híne
 食べ物 COP したら 肉 COP したら 1SG.SBJ-出る.PL-CAUS て
a-supá híne, a-e-ré ka ki a-e ka ki.
 1SG.SBJ-を煮る て 1SG.SBJ-食べる-CAUS も する 1SG.SBJ-食べるも する
 「その欠けたなべで、そうした私が背負って来た、
 魚やら肉やらを出して
 煮て、男にも食べさせ、私も食べました。」(田村 1985 : 36-37)

例 (161) にある「ki (する)」の内容は「ku-koytak ka en-koytak ka (私は話しかけるも、私は話しかけられるも)」である。この「お互いに話をする」動作は「kukor oper (私のお嬢さん)」を修飾している。文脈からすると、「a」が後続する「お互いに話をする」というできごとは、それより後ろのできごと「sensei arki

(先生が来る)」と「hosippa (帰る)」よりも時間的に先に起こっている。3つのできごとの間に、ある種の連続性があり、時間軸上で次から次へと発生しているように感じられる。故に、この場合の「a」もやはり継起性を表わすと考えられる。

例(162)にある「se (背負う)」は、「sapte (出す)」、「supa (煮る)」、「ere (食べさせる)」、「e (食べる)」などのできごとよりも時間的に先に起っている。また、背負って来て、それから肉を出し、それから後の一連の動作が起っているように読めるので、「a (rok)」はこの場合も継起性を表わすと言えるだろう。

以上、従属節に現れる「a」の機能を検討した。アイヌ語の「a」は中国語の「過₁」と異なり、従属節に現れる場合でも、やはり継起性を表わすことが分かった。

5.5.2. 継続形式「wa an」と共起する「a」

アイヌ語の「a」は連体修飾構造に現れる時、動詞の直後だけに後続するのではなく、継続形式(wa an)と一緒に現れる場合もある。この場合の「a」はどのような機能を持っているのだろうか。まず、そのような例文を見てみよう。

- (163) nérok, tap nispa ne wa, usa ø-yay-puni
 その 今 金持ち COP て いろいろ 3SG.SBJ-REFL-を持ち上げる
 ki wa ø-oka rok pe tane anak
 3SG.SBJ-する て 3PL.SBJいる.PL PRF.PL もの 今 TOP
 eci-áttomsama emawrari nispa katkemat eci-né kuni p
 2SG.OBJ-に忠実に従う 紳士 淑女 2PL.SBJ-になる べき もの
 kusu, tan usa ø-okay pe a-se ruwe ne na
 ので この 色々 1PL.SBJ-ある.PL もの 1SG.SBJ-を背負う の COP SFP
 「その、今まで金持ちで、いろいろ馬鹿にしていた者が、今は
 あなた方に忠実に従うような、長者夫婦にあなた方はなるのです。
 そのために、私はこのいろいろなものを背負って来たのですよ。」
 (田村 1985 : 42-44)

- (164) sekor ø-hawean kor apa pa ø-eun'eun
 と 3SG.SBJ-言う ながら 戸口 の向こう 3SG.SBJ-グズグズする
 hi ta, néa i-ka opas wa ø-an a kamuy,
 ところ に その 1SG.OBJ-助ける て 3SG.SBJ PRF 神様
 nep ka ø-cotca humi ne kotom an.
 何 も 3SG.SBJ-を射る の音 COP よう COP

わす。例 (165) を例 (163)、例 (164) と比較すると、例 (163)、例 (164) の「wa an」を含むできごとが継続性を持っていても、「a」の継起性によってその継続した状態は点として見なされ、テキストにおけるできごとの間の継起関係が形成される。この点から言えば、連体修飾節に現れる「wa an a」と「a」の機能は「wa an」のもとの機能である継続性が「a」によって背景化されたため、両方とも継起性を表わすと考えられる。

5.5.3. 継続形式「kor an」と共起する「a」

前節では、「wa an a」と「a」の機能を比較した。では、連体修飾節において、アイヌ語のもう一つの継続形式「kor an」と「a」が共起する場合、「a」の機能はどうなるのだろうか。

- (166) néa ø-suke kor ø-an a ø-pon menoko,
 その 3SG.SBJ-炊事する ながら 3SG.SBJ-いる PRF 3SG.SBJ-小さい 女の子
 si-senpir unno ø-an kor ø-yaykonupeatte kor,
 REFL-の背後 へ 3SG.SBJ-いる ながら 3SG.SBJ-一人で涙を流す ながら
 ø-iki kor ø-an pe ne noyne yaynu-an.
 3SG.SBJ-物事する ながら 3SG.SBJ-いる もの COP らしい 思う-1SG.SBJ
 「その炊事をしていた若い女の人は、
 蔭の方を向いて、涙を
 流しているように思われました。」(田村 1985 : 20-21)

- (167) tap k-eywanke kor k-an a kem oar ø-isam.
 今 1SG.SBJ-を使う ながら 1SG.SBJ-いる PRF 針 全く 3SG.SBJ-なくなる
 「今私が使っていた針、まったくない。」(佐藤 2008 : 78)

例 (166) の「a」は「suke kor an (炊事している)」に後続している。文脈からすると、「suke kor an (炊事している)」はその次のできごと「yaykonupeatte (一人で涙を流す)」と継起的な関係になっている。この場合、「suke kor an (炊事している)」はまだ継続している可能性がないわけではないが、やはり「a」の継起性によって、視点が次のできごとに移ったと思われる。すなわち、「suke kor an (炊事している)」は点として認識され、その継続性が背景化され、次のできごととの継起関係が前景化される。

例 (167) も同じであろう。「eywanke (使う)」は「isam (なくなる)」まで続いていたので、「kor an」が使われたと思われる。しかし、その継続した「eywanke kor an (使っている)」は修飾節では点として認識され、次のできごと「isam (な

くなる)」と継起的な関係になっている。この場合、「kor an」の継続性は背景に退き、「a」が表わす継起性が前面に現れる。

連体修飾節における「kor an」の継続性が背景に退いたことによって、「kor an a」と「a」の機能は接近し、両方とも継続性だけを表わすようになったと考えられる。

5.6. 主節における「a」の問題

本論で集めたテキストに関するデータの中で、「a」が主節、あるいは、最後の節に現れているのは以下の2つの例文だけである。

- (168) e-saha esir ø-ek a korka
2SG-の姉 先 3SG.SBJ-来る PRF けれど
nani ø-hosipi a wa.
すぐ 3SG.SBJ-帰る PRF SFP
「お前の姉が先程来たけれどすぐに戻ったよ。」(例(83)の再掲)

- (169) okaypo onuman ipe ø-ki wa ø-ek a ruwe?
若者 夕食 3SG.SBJ-する て 3SG.SBJ-来る PRF の
「あんちゃん、晩ご飯食べて来たの」
tane ku-ype a wa.
今 1SG.SBJ-食べる PRF SFP
「もう私は食べたよ」(佐藤 2006 : 64)

例(168)の主節にある「a」は、先述の文レベルの平叙文と同じように、終助詞の「wa」を伴って、その文は終止している。例(169)は質問と回答からなる会話文である。テキストにおける聞き手の回答だけを見れば、普通の平叙文であり、「a」は終助詞「wa」を伴っており、その文は終結している。

以上の「a」は主節あるいは主節に近い状況にあるものの、先述の平叙文で述べた「a」の「継起性」という機能から言えば、終助詞「wa」がないと、「a」を含む主節はそのまま終わらないと考えられる。では、終助詞を伴わない「a」はテキストの主節に現れることができるのだろうか。本論で集めたデータには、そのような例文は見つからなかった。

アイヌ語のテキストにおける「a」のこの構文現象は中国語の「過」を思い起こさせる。中国語の継起性を表わす「過」は構文上、最後のできごとにつくことができない(劉 2006 : 255)。

(170) *他 吃 过 饭, 洗 过 碗, 出 过 门。

3SG 食べる PRF ご飯 洗う PRF 碗 出る PRF ドア

「彼はご飯を食べて、お碗を洗って、出かけて」

例 (170) の場合、できごと「吃饭 (ご飯を食べる)」、「洗碗 (お碗を洗う)」までは「過」は継起性を表わしていると考えられるが、最後のできごと「出门 (出かける)」に「過」が付されると、このテキストはまだ終わっていないという感じが引き起こされる。すなわち、このテキストは聞き手に次に何かが起こると予測させる。その理由は「過」が表わす継起性にあると考えられる。継起性を表わす「過」自身は次のできごとを求める性質を持っているため、テキストの最後のできごとの後ろに現れた場合、さらにその続きがあると聞き手に認識させ、文が終わらなくなり、そのテキストが不自然なものとして認識される。

アイヌ語の「a」も同じ理由で、継起性を表わすので、最後のできごとにつくことができないと思われるが、下記の例文を見てみよう。

(171) rán-an wa sittemraypa-an kor,

降りる-1SG.SBJ て 手探りする-1SG.SBJ ながら

rán-an a p,

降りる-1SG.SBJ PRF のに

hemanta wa ka a-eókok híne,

何 にも 1SG.SBJ-に引っかかる て

rik péka, néa eun ewonne-an

高い所 を あの へ 顔を洗う-1SG.SBJ

uske un, empuyna-an híne,

ところ へ のめり落ちる-1SG.SBJ て

temcaricari-an a p sekor,

手をばたばたさせる-1SG.SBJ PRF のに と

ekuskonna a-sikíhi ø-makkosanpa.

突然 1SG-の目 3SG.SBJ-ぱっと開く

「下りて行って、手探りしながら、

下りて行きましたが、

何かひっかかって、

高い所から、あの顔を洗う

所へ、のめり落ちて、

手をバタバタさせたときに、

突然、目がパッと開きました。」(田村 1985 : 6-7)

- (172) herikasino inkar-an akusu, tókap ne kunak a-ramú rapok
 上の方へ 見る-1SG.SBJ と 昼間 COP と 1SG.SBJ-を思う 途中
 sirkunne a p, nis or ta,
 空が暗くなる PRF のに 空 ところに
 sir epitta nociw kur ka ø-maknatara.
 様子 皆 星 姿 上 3SG.SBJ-あかあかと明るい
 「上の方を見たところ、昼間だとばかり思っているうちに
 暗くなったのだが、空に、そこらじゅうに
 星が一面に輝いていた。」(田村 1984 : 46-47)

- (173) ora nókunneywano hopuni-an a p ora su
 それから 夜明けに 起きる-1SG.SBJ PRF のに それから 鍋
 sikteno suke-an híne sama a-omáre.
 いっぱいに 炊事する-1SG.SBJ て そば 1SG.SBJ-に置く
 「それから、私はまだ暗いうちに起きて、鍋
 いっぱいに料理をつくって、おじいさんのそばに置きました。」
 (田村 1997b : 74)

例文 (171) のできごと「ran (降りる)」と「temcaricari (手をぱたぱたさせる)」には「a」が後続していて、時間的順序の継起性を表わしているが、最後のできごと「makkosanpa (ぱつと開く)」には「a」がついていない。例 (172) では、できごと「sirkunne (暗くなる)」に「a」がついているが、一連のできごとの最後のできごと「maknatara (輝く)」には「a」が後続していない。例 (173) では、「a」が「hopuni (起きる)」に後続しているが、そのテキストの最後のできごと「omare (置く)」には現れていない。

以上の構文的特徴から、アイヌ語の「a」は、中国語の「過」と同じく、継起性を表わすからこそ、最後のできごとの後に立つことができないと考えられる。つまり、継起性を表わす「a」は、できごとの間のある何らかの結束性を示す機能を持っているので、最後のできごとのところに立つと、また次のできごとが求められるということになってしまうのである。次のできごとが求められると、テキストが終わっていないという感じを引き起こすことになる。

故に、アイヌ語の「a」は、テキストレベルでそのテキストを終止する要素がなければ、「a」はその継起性機能によって最後のできごとにつけることができないのである。

5.7. 中国語の「過」の連続性問題

中国語の「過」は、劉 (2006) が指摘しているように、テキストレベルでは継起性と先行性を表わす。本節では、先行研究の節でも触れたが、「過₁」と「過₂」のテキストレベルにおける連続性、および、テキストレベルと文レベルにおける機能の連続性について議論を行いたい。

まず、テキストレベルにおける「過₁」と「過₂」は連続性を持っていると思われる。このことは劉 (2006) における継起性の「過」の例文をすこし改変すると、その例文における「過」が先行性を表わす、あるいは継起性と先行性の両方を表わすようになることからうかがえる。

- (174) 吃 过 饭, 王福 将 书 用 布 包 了,
食べる PRF ご飯 王福 で 本用いる 布 包む SFP
夹 在 腋下, 说 是 他 爹 一定 来了,
挟む に 脇下 言う COP 2SG 父親 きっと 来る SFP
要 赶快 去, 便 跑 走 了。
すべき 早く 行く そこで 走る 行く SFP
「食事が済むと、王福はノートを風呂敷に包んで
脇にはさみ、「父ちゃんもきているはずなので、
急いでいかななくては」と言うと、走って出ていった。」
(劉 2006 : 252 (9))

- (175) 那一次 吃 过 饭, 王福 将 书 用 布 包 了,
その時 食べる PRF ご飯 王福 で 本用いる 布 包む SFP
夹 在 腋下, 说 是 他 爹 一定 来了,
挟む に 脇下 言う COP 2SG 父親 きっと 来る SFP
要 赶快 去, 便 跑 走 了。
すべき 早く 行く そこで 走る 行く SFP
我 到 现在 也 没 见 他。
1SG まで 現在 も NEG 会う 2SG
「その時、食事が済むと、王福はノートを風呂敷に包んで
脇にはさみ、「父ちゃんもきているはずなので、
急いでいかななくては」と言うと、走って出ていった。」
私は現在に至るまで彼を見ていない。)
(劉 2006 : 252 (9) の改変)

例 (174) は、劉 (2006) がいう継起性を表わす「過」の例文である。例 (175)

は、例 (174) にできごとの過去の時点と発話時現在の時点を明確にした内容を追加したものである。例 (175) における「過」が付いているできごと「吃饭 (ご飯を食べる)」はこの場合、最後の「現在」という発話時点より先行して発生している。ゆえに、「過」の機能は劉 (2006) がいう先行性で解釈できるが、この場合、「過」が付いているできごと「吃饭 (ご飯を食べる)」は同時に、後ろのできごと「包 (包む)」及び、そのあとの「夹 (挟む)」と、時間軸上で次から次へと起こるといふ継起的な関係を持っているので、「過」の機能は継起性で解釈しても良いと思われる。すなわち、例 (175) のように、明確な過去の参照時点があり、また、いくつかの継起的なできごとで構成されるテキストにおいて、「過」は先行性とも継起性とも解釈できる。

また、劉 (2006) がいう先行性の例文も、下記のようにすこし改変すると、継起性を表わすこともできると思われる。

- (176) 孙 一 上 台， 就 像 日 本 人 那 样 鞠 了 一 个 九 十 度
 孫 と 上る 演台 すぐ 似る 日 本 人 よう お辞儀する PRF 一 つ 九 十 度
 的 躬， 说：“各位 父老兄弟们……” 他 讲 得 精 彩 极 了，
 の 拝み 言う 各位 同胞 2SG 話す の 精 彩 と とも SPF
 他 受 过 这 一 类 的 专 门 训 练。
 2SG 受ける PRF この ひとつ 種類 の 専 門 訓 練
 「孫は演台を前にして立つと、日本人のように九十度のおじぎを
 してから口を開いた。「同胞のみなさん……」すこぶる精彩を放った
 話しぶりだ。彼は、この種の専門的訓練を受けていたのだ。」
 (劉 2006 : 256 (16))

- (177) 他 受 过 这 一 类 的 专 门 训 练。 于 是，
 2SG 受ける PRF この ひとつ 種類 の 専 門 訓 練 すると
 孙 一 上 台， 就 像 日 本 人 那 样 鞠 了 一 个 九 十 度
 孫 と 上る 演台 すぐ 似る 日 本 人 よう お辞儀する PFV 一 つ 九 十 度
 的 躬， 说：“各位 父老兄弟们……” 他 讲 得 精 彩 极 了，
 の 拝み 言う 各位 同胞 2SG 話す の 精 彩 と とも SPF
 「彼は、この種の専門的訓練を受けていたのだ。そして、
 孫は演台を前にして立つと、日本人のように九十度のおじぎを
 してから口を開いた。「同胞のみなさん……」
 すこぶる精彩を放った話しぶりだ。」
 (劉 2006 : 256 (16) の改変)

例(176)は、劉(2006)がいう「過」が先行性を表わす例文である。記述順(テキストで述べられる順序)と実際の生起順は逆になっている。例(177)は、「過」が付いているできごと「受訓練(訓練を受ける)」を前に出し、記述順と生起順を同じ順序にしたものである。この場合、確かに「受訓練(訓練を受ける)」は、後ろの「上台(演台に上る)」と「説(言う)」よりも時間的に先行しているが、同時に、「受訓練(訓練を受ける)」と後ろの「講(話す)」は因果関係になっている。「受訓練(訓練を受ける)」は「過」を後続することで、その「訓練を受けている」状態と「講(話す)」は継起的な関係になっていると思われる。ゆえに、例(177)の文における「過」は単なる先行性を表わすのではなく、継起性をも表わしている。

以上で説明したように、中国語では、文脈の解釈によって、「過」が継起性、先行性、継起性+先行性を表わすことができる。では、「過」の基本的機能は継起性と先行性のどちらなのだろうか。

第4節の「過」の文レベルにおける構文問題ですでに議論したように、文レベルでは、「過₁」は文末に立たず、「過₂」の文は単独では成立しにくい。その理由は、「過」は次のできごとを求める性質を持っているからであるとした。そのことから、「過」の元の機能が継起性であると仮定した。

文レベルのこの継起性をふまえると、テキストレベルにおいても、継起性が基本的機能だと考えられる。そうすると、同じ形式「過」が文レベルとテキストレベルにおいて統一され、連続性が与えられる。ただ、継起性と先行性は下記のような構文的条件によって分化したと思われる。

表 11：テキストにおける助詞「過」の機能分化

	分化	分化した意味	次のできごとを求める性質	他のできごととの関係	参照時点
「過」 継起性	「過 ₁ 」	継起性	○	時間の前後関係	不明
	「過 ₂ 」	先行性	△	時間の前後関係 及び因果関係	明確

○：必ずある △：なくても良い

同じく継起性を表わす助詞「過」から分化した「過₁」と「過₂」は、次のできごとを求めるという性質においては同じである。ただ、「過₂」は因果関係によってそのできごとの間の「次から次へと」発生する時間的制約が緩くなり、できごとの間の時間が長く認識されると、「過」の意味が先行性になっていく。また、先行性を表わす場合、文脈上、明確な参照時点が必要である。

5.8. 本章のまとめ

本章では、記述的な観点から、日本語の研究成果を参考にしつつ、中国語の「過」とも比較しながら、アイヌ語の「a」のテキストにおける機能を記述した。また、中国語の「過₁」と「過₂」の連続性についても議論した。そしてアイヌ語の「a」の機能、および中国語の「過₁」と「過₂」に関して下記の結論を得た。

1. テキストレベルにおいて、「a」は従属節に現れても、連体修飾節に現れても、同じく継起性というタクシス機能を表わす。
2. 従属節と連体修飾節における「a」は、未来を表わす助動詞「kusu ne」や継続形式「wa an」、「kor an」と共起することがある。この場合、形式「kusu ne a」、「wa an a」、「kor an a」における「kusu ne」、「wa an」、「kor an」の表わす未来や動作継続、結果継続の意味がすべて背景化し、「a」の継続性という機能がテキストで表面化する。「kusu ne a」、「wa an a」、「kor an a」の機能は「a」に接近し、いずれも継起性を表わすのである。なお、「wa an」自身はテキストレベルにおいて背景説明の役割を持ち、一時後退性を表わす。
3. 中国語の「過」と同様、「a」は継起性を表わすとき、一連のできごとの最後のできごとにつくことができない。すなわち、「a」は終止要素のないテキストの文末に立つことができない。その理由は、継起性を表わす「a」が次のできごとを求めるので、「a」がテキストの文末に立つと、テキストが未完結になってしまうからである。
4. 中国語の「過₁」と「過₂」は、テキストレベルで分けることはできないが、同じく継起性を表わす「過」が分化したものだと考えられる。その基本的機能が継起性という機能であり、文脈が参照時点を明確にし、あるいはできごとの間の関係が因果関係になっている場合、できごとの間の「次から次へと」という時間的順次性が緩くなり、先行性として解釈される場合がある。

以上、テキストレベルにおける結果から、第4章で検証した文レベルの「a」の機能を加えて、継起性というタクシス機能はアイヌ語の「a」の基本的機能であると考えられる。文レベルで、「a」が文末に立たないのは、その継起性の機能による構文的現象である。テキストレベルにおいて、「a」は終止要素がないと、同じく、継起性という機能によって、その文が終わらないと思われる。

なお、アイヌ語の「a」は、テキストレベルでモダリティ形式とされる「ruwe ne (のである)」や「hawe ne (のである)」などによく共起する。これらの形式は、「pe ne (ものである)」と同じく、できごとをいったん名詞化する。「a」がその名詞化されたできごとの後ろでどのような機能を表わしているのか、本論ではそれを分析するまでにはいたらなかった。残された問題はまだまだ数多くある。これらの問題については今後の課題としたい。

第6章 結論とまとめ

本論は、時間表現におけるアイヌ語の「a」と中国語の「過」に関する対照研究である。アイヌ語の「a」と中国語の「過」に関する先行研究の問題点を指摘し、それぞれの点について議論を行った。

本論が特に従来の研究と異なっているのは、文レベルとテキストレベルを明確に区分したうえで議論を行ったことである。その理由は、アイヌ語の「a」に関する文レベルの研究があまり蓄積されておらず、文レベルでまだ解決されていない問題が数多く残されているからである。また、中国語の「過」については、これまで文末、従属節、修飾節に分けての議論が行われておらず、それぞれのレベルにおける議論での「過」の機能も定論になっていない。

そのため、本論はまず、第3章で文レベルにおけるアイヌ語の「a」と中国語の「過」について考察を行った。アイヌ語の「a」も、中国語の「過」も、文法論からすれば、厳密なアスペクト形式ではないが、その文法化の進んでいる程度から、準アスペクト形式であるとした。「a」がアスペクトの意味を表わす場合、従来「Perfective」とするか「Perfect」とするか論争がこれまでであったが、本論の検討によって、「a」は「Perfect」の意味を表わすと認められた。

また、中国語の「過」は継続形式「着」と共起しないのに対して、アイヌ語の「a」は継続形式と共起することができる。アイヌ語の動作継続を表わす「kor an」や結果継続を表わす「wa an」と共起する場合、「a」はやはり「Perfect」を表わしていることが確認できた。なお、英語の「Perfect Progressive」から見て、「kor an a」は主体動作動詞と共起すると、完結を問題とせず、最近の活動という意味が顕在化する。「wa an a」は主体変化動詞と共起すると、「今でも鮮明に存続している」という意味が顕在化することがわかった。

従来の研究では、中国語の「過」は完結を表わす「過₁」と「経験」を表わす「過₂」に分けられているが、本論は文末助詞「了」と共起することによる視点変換で「過₁」と「過₂」が互いに変換できることを確認した。

第4章では、平叙文と疑問文におけるアイヌ語の助動詞「a」と中国語のアスペクト助詞「過」の構文現象を考察した。アイヌ語の「a」と中国語の「過₁」が平叙文の文末に立たないのはいずれも「継起性」を表わすためである。中国語の「過₁」もアイヌ語の「a」も、文の中の終止要素によって、「継起性」の次のできごとを求めるという性質が潜在化し、文を終止することができる。終止要素がない場合は、いずれも次のできごとを求めると、次のできごとが言語化されないと、文が終わらない感じになる。

また、中国語の「過₁」と「過₂」は、同じく「継起性」を表わす「過」から、使用文脈によって分化したものだと考えられる。「過₁」は常に「了」を利用して

現在時点とつながっているため、その視点は「次には」に置かれ、「継起性」が顕在化している。一方、「過₂」は現在関連性を持つ「了」と共起しないので、視点が「かつて」に置かれ、「継起性」が潜在化し、「次のできごと」との関連性が認識されにくくなるが、「次のできごと」が言語化された方が「過₂」の文はより完全な文として認められやすくなる。

なお、アイヌ語の「a」は諾否疑問文の文末に立つことができる。その理由は疑問文のイントネーションによってできごとの間の継起関係が表わされ、「a」の構文的条件が緩くなるのである。中国語の「過₁」はアイヌ語の「a」と異なり、常に「了」を利用して現在時点とつながっているため、諾否疑問文の文末には立たない。また、推測の段階であるが、アイヌ語の「a」が諾否疑問文の文末に立つのは、その文が想像内容に基づかない事実確認をするものになっているためである。想像内容に基づく事実確認の場合、「a」の諾否疑問文は「ruwe」を伴う必要がある。そして、疑問詞疑問文における中国語の「過₁」は諾否疑問文の場合と同じく、「了」を利用して現在時点とのつながりを持つ必要があるため、文末に立つことができない。また、これも推測になるが、アイヌ語の「a」の疑問詞疑問文で述べられたできごとはすでに事実になっているため、確実の態度を表現するには「ruwe」が使われる。そのため、「a」は疑問詞疑問文の文末に立つことができない。

第5章では、テキストレベルにおけるアイヌ語の「a」と中国語の「過」を考察した。テキストに関する文法概念は、主に日本語の研究成果を参考にした。アイヌ語の「a」については、テキストレベルにおける「a」は、従属節に現れても、連体修飾節に現れても、同じく継起性というタクシス機能を表わす。さらに、従属節と連体修飾節における「a」は、未来を表わす助動詞「kusu ne」や継続形式「wa an」、「kor an」と共起することがあるので、これらの現象についても考察を行った。その結果、形式「kusu ne a」、「wa an a」、「kor an a」における「kusu ne」、「wa an」、「kor an」が表わす未来や動作継続、結果継続の意味がすべて背景化し、「a」の継続性という機能がテキストで表面化していることがわかった。

「kusu ne a」、「wa an a」、「kor an a」の機能は「a」に接近し、いずれも継起性を表わすことがわかった。なお、「wa an」自身はテキストレベルにおいて背景説明の役割を持ち、一時後退性を表わす。

そして、中国語の「過」と同様、「a」は継起性を表わすとき、一連のできごとの最後のできごとにつくことができない。すなわち、「a」は終止要素のないテキストの文末に立つことができない。「a」はやはりテキストレベルにおいても次のできごとを求めるので、「a」がテキストの末に立つと、そのテキストは未完結になってしまうのである。

なお、中国語の「過₁」と「過₂」はテキストレベルでは分けることができない

が、同じく継起性を表わす「過」から分化したものだと考えられる。その基本的機能は継起性であり、文脈上、参照時点が明確にされ、あるいはできごとの間の関係が因果関係になっている場合、できごとの間の「次から次へと」という時間的順次性が緩くなり、先行性として解釈される場合がある。

第3、4、5章の結果をまとめると、アイヌ語の「a」と中国語の「過」の基本的機能は継起性であると認められる。アイヌ語の「a」は継起性を持っているため、継起性の次のできごとを求めるという性質から、「a」は平叙文の文末には立たず、テキストレベルでは最後のできごとの後ろに立つことができない。中国語の「過」も同じである。ただ、「a」の方の機能が未分化なのに対して、中国語の「過」の基本的機能である継起性は使用文脈によって先行性に分化したりするのである。

以上、アイヌ語の「a」と中国語の「過」に関して、文レベルとテキストレベルに分けて考察した。しかしながら、アイヌ語のデータが限られているため、一部の考察が十分ではなかった。例えば、アイヌ語の「a」はテキストレベルではモダリティ形式とされる「**ruwe ne** (のである)」や「**hawe ne** (のである)」などとよく共起する。これらの形式は、「**pe ne** (ものである)」と同じく、できごとをいったん名詞化する。「a」がその名詞化されたできごとの後ろでどのような機能を表わしているのか、本論ではそこまで分析するにはいたらなかった。

また、中国語の「過」の「過₁」と「過₂」の機能分化についても議論が十分ではなかった。助動詞「過」は動詞の意味である「通過」と関わっているのだろうか。通時的な考察も合わせて行う必要がある。残された問題はまだまだ数多くある。これらの問題については、今後の課題としたい。

謝 辞

北海道大学へ留学して今年ですでに7年目になります。博士課程の途中で、自分の人生観が変わり、現実のさまざまなできごとに対して疑問を持ったりして学術研究が全然進まなかった時期がありました。博士を諦めるか諦めないかの間で迷っていた時、恩師佐藤知己先生は、君を諦めないよと何度も言ってくださいました。そのおかげで自分は何とか最後まで頑張ることができました。勉学から生活まで熱心に励ましていただいた佐藤知己先生に、まず感謝の意を表わしたいと思います。また、言語科学講座の清水誠先生、加藤重広先生、李連珠先生、池田証壽先生、野村益寛先生をはじめ、講座の諸先生方からも、学問だけではなく、研究者のあるべき姿、人生に対する考え方も賜りました。改めて諸先生方へ感謝を申し上げたいと思います。

私は中国の中部・河南省の出身で、田舎生まれのものです。小学校から高校までの間は、学費のため、いつも父に連れられて同じ村の人のところに、お金を借りに行きましたが、そのことは今でも鮮明に覚えています。貧しいからと言って頑張って勉強して、お金を稼いで将来いい生活を送りたいとは考えていませんでした。ひたすら勉強して、将来的に世の中で何かの役に立てればそれでいいと思っていました。

大学時代は、アルバイトをして学費を稼ぎ、貸与型奨学金を受けて何とか卒業することができました。大学在学中の恩師劉濤、楊華先生のお陰で、早々にパナソニックへの就職が決まりました。そして、パナソニックで5年間働き、大学時代の借金を返済し、すこし貯金ができたく所で、日本に留学して言語学を勉強しようと思えました。決意したきっかけは広東語の勉強でした。私は広東語を勉強してから、すこしずつ中国の「少数民族」が持つ言語の状況を調べるようになりました。当時の中国では、多くの言語が話者の減少により、消滅寸前になっていることに気づき、私はそれらの言語の復興に興味を持ち、先進国の消滅危機言語の研究成果を学び取りたいと考えました。

日本へ留学したのは、日本の「少数民族」であるアイヌの言語を研究するためです。当時、アイヌ語はすでにユネスコから消滅危機のある言語として認められていました。私は、アイヌ語の現状、研究方法、復興の取り組みなどに特に関心を持ち、北海道大学文学研究科に入学しました。

アイヌ語を勉強し始めると、アイヌ語の現状をより深く理解するようになりました。当時、アイヌ語は自分が想像していたよりもはるかに衰退が進んでいました。フィールドワークをしようと思っても、なかなか母語話者が見つからない状況でした。その後、佐藤先生のすすめで、やむを得ず文献資料を中心とした研究に舵を切りました。また、私が中国語の母語話者なので、アイヌ語と中国語

の対照研究をやってみたらどうかという佐藤先生のアドバイスもありました。私はその道に沿って、修士論文からこの博士論文まで歩いて来ました。佐藤先生の励まし、ご鞭撻がなければ私はすでに研究を途中でやめていたと思います。改めて、指導教員である佐藤知己先生に心からの感謝を申し上げたいと思います。

私はまた、社会人としての責任を十分に果たしていない自分を大目に見てくれている妻にも感謝したいです。妻は、私の実家の今にも倒れそうな家も気にせず、結納金も求めず、周りの反対も意に介さず、私と結婚し、また私の日本への留学にもついてきてくれたのですが、大変ありがたく思っています。留学中は、二人ともアルバイトをしていました。妻は自分たち二人の生活だけではなく、互いの実家の父母にも金銭面で気を配っていました。私がこうして博士課程を修了し、論文を出せるのは側にいてくれる妻のお陰です。

学業上では、同じ研究室の諸先輩方、後輩たちとは、いつも勉強会を行ったり、議論したりしていました。そのお陰で、一般言語学の知識や日本語の知識まで、多くの知識を得ることができました。この場を借りて感謝を申し上げたいと思います。生活上では、同じ研究室の先生方、先輩方、後輩たちには、色々なコミュニケーションの機会を作っていただき、これについても感謝の意を表わしたいと思います。特に指導教員である佐藤知己先生には生活面で私の状況にご配慮していただき、できる限り、私に勉学関連のアルバイトをする機会を作ってくださいなど、私にとっては多くの面で本当に助かりました。ここで改めて感謝を申し上げたいです。

また、勉学や生活に欠かせない資金に関して、公益財団法人ヒロセ財団には一貫して私の修士段階から博士終了までを支えていただきました。ヒロセ財団の支援がなければ、私は安心して留學生活を送ることはできなかつたでしょう。また、ヒロセ財団が開催した交流会や修学旅行のお陰で、日本文化に対する知識が一層深まりました。ヒロセ財団およびお世話になったヒロセ財団の方々には心より感謝を申し上げたいと思います。

なお、私のわがままを許し、陰で私の留學を支えてくれた、母国にいる両親、妻の両親に感謝の意を表わしたいと思います。勿論、兄といとこたち、地元の親戚たち、親しい友人たちも色々な面で支援してくれました。すべての皆さんに感謝したいと思います。

最後になりますが、博士論文を審査していただいた言語科学講座の野村益寛先生、表現文化論講座の武田雅哉先生、佐藤知己先生より、多くの重要なご指摘・コメントを賜りました。心から感謝申し上げます。

これからは、恩師佐藤知己先生をはじめ、すべての皆さまのご期待に応えられるように、常に感謝の気持ちを持ち、日々精進していきたいと思つています。

参考文献

- Batchelor, John (1903) *A Grammar of The Ainu Language*. Yokohama : Kelly & Walsh.
- Chao, Yuenren (1968) *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- 趙元任 (1980) 『中國話的文法(增訂版)』(丁新邦譯)香港: 中文大學出版社。(Chao, Yuenren (1968) *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.)
- 趙元任 (2005) 『漢語口語語法』(呂叔湘譯)北京: 商務印書館。(Chao, Yuenren (1968) *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.)
- 知里真志保 (1973/1954) 「アイヌの神話」(『知里真志保著作集』1.153-222. 東京: 平凡社 所収)
- 知里真志保 (1974/1936) 『アイヌ語法概説』(『知里真志保著作集』4.1-197. 東京: 平凡社 所収)
- Comrie, Bernard (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Halliday, M.A.K & Hasan Ruqaiya (1976) *Cohesion in English*. London: Longman.
- 服部四郎・知里真志保 (1960) 「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」『民俗学研究』24 (4) : 31-66.
- 林淳子 (2020) 『現代日本語疑問文の研究』東京: くろしお出版.
- Huang, C.R & Shi, D (2016) *A Reference Grammar of Chinese*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 井上優 (2002) 「「言語の対照研究」の役割と意義」国立国語研究所編『日本語と外国語との対照研究 X 対照研究と日本語教育』3-20.東京: くろしお出版.
- 庵功雄 (1999) 「テキスト言語学の観点から見た談話・テキスト研究概観」『言語文化』36: 3-19.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編) (1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』東京: 三省堂.
- 加藤重広・滝浦真人(編) (2016) 『語用論研究法ガイドブック』東京: ひつじ書房.
- 萱野茂 (1998a) 『萱野茂のアイヌ神話集成 ウウエペケレ編 I』4. 東京: 平凡社.
- 萱野茂 (1998b) 『萱野茂のアイヌ神話集成 ウウエペケレ編 II』5. 東京: 平凡社.
- 萱野茂 (1998c) 『萱野茂のアイヌ神話集成 ウウエペケレ編 III』6. 東京: 平凡社.
- 萱野茂 (2002) 『萱野茂のアイヌ語辞典 (増補版)』東京: 三省堂.
- 萱野茂 (2005) 『新訂復刻 ウウエペケレ集大成』東京: 日本伝統文化振興財団.
- 木村英樹 (1997) 「動詞接尾辞“了”の意味と表現機能」『大河内康憲教授退官記

- 念中国語学論文集』157-179.東京：東方書店.
- 木村英樹 (2006) 「「持続」・「完了」の視点を超えて」『日本語文法』6 (2) : 45-61.
- 金田一春彦 (1955) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15: 48-63.
- 金田一京助 (1931) 「アイヌユーカラ語法摘要」『アイヌ叙事詩ユーカラの研究 2』2-233.東京：東洋文庫.
- 孔令达 (1986) 「关于动态助词“过₁”和“过₂”」『中国语文』193.272-276.
- 久保寺逸彦 (1977) 『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』東京：岩波書店.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』東京：くろしお出版.
- Leech, Geoffrey N (1987) *Meaning and the English Verb*. Second edition. New York: Longman Inc.
- Li, Charles N and Thompson, Sandra A (1981) *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- 劉綺紋 (2006) 『中国語のアスペクトとモダリティ』大阪：大阪大学出版会.
- 刘月华 (1988) 「动态助词“过₁过₂了”用法比较」『语文研究』26: 6-16.
- 劉月華 (2001) 「動態助詞「過₁」「過₂」「了₁」の用法比較」于康・張勤 (編) 『中国語言語学情報 4 テンスとアスペクトⅢ』95-124 東京：好文出版. (刘月华 (1988) 「动态助词“过₁过₂了”用法比较」『语文研究』26: 6-16.)
- 呂叔湘 (1999/1980) 『現代漢語八百詞 (增訂本)』北京：商務印書館.
- 呂叔湘 (2003) 『中国語文法用例辞典 (改訂版)』(牛島徳次・菱沼透監訳) 東京：東方書店. (呂叔湘 (1999/1980) 『現代漢語八百詞 (增訂本)』北京：商務印書館.)
- マスコフ・ユーリー・S (2018/1984) 『アスペクト論』(林田理恵・金子百合子訳) 東京：ひつじ書房.
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 (2000) 『日本語の文法 3 モダリティ』東京：岩波書店.
- Moseley, Christopher (ed.) (2010) *Atlas of the World's Languages in Danger*. Third edition. Paris: UNESCO Publishing.
- 村崎恭子 (1979) 『カラフトアイヌ語—文法篇—』東京：国書刊行会.
- 中川裕 (1981) 「アスペクト的観点から見たアイヌ語の動詞」『言語学演習』81: 131-141.
- 中川裕 (1995) 『アイヌ語千歳方言辞典』東京：草風館.
- 日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法 4』東京：くろしお出版.
- 野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則 (2002) 『日本語の文法 4 複文と談話』東京：岩波書店.
- 奥田靖雄 (1977) 「アスペクトの研究をめぐって——金田一の段階——」『宮城教

- 育大学国語国文』8: 51-63.
- 奥田靖雄 (1988a) 「時間の表現 (1)」『教育国語』94: 2-17.
- 奥田靖雄 (1988b) 「時間の表現 (2)」『教育国語』95: 28-41.
- Refsing, Kirsten (1986) *The Ainu Language: The Morphology and Syntax of the Shizunai Dialect*. Denmark: Aarhus university press.
- 佐藤知己 (2006) 「アイヌ語千歳方言のアスペクト—kor an、wa an を中心として」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』12: 43-67.
- 佐藤知己 (2007) 「再びアイヌ語千歳方言のアスペクトについて」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』13: 1-14.
- 佐藤知己 (2008) 『アイヌ語文法の基礎』東京: 大学書林.
- 佐藤知己 (2012) 『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』1.
札幌: 北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 佐藤知己 (2013) 『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』2.
札幌: 北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 佐藤知己 (2014) 『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』3.
札幌: 北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 佐藤知己 (2015) 『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』4.
札幌: 北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 佐藤知己 (2016) 『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』5.
札幌: 北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 佐藤知己 (2017) 『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』6.
札幌: 北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 佐藤知己 (2018) 『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』7.
札幌: 北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 佐藤知己 (2019) 『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』8.
札幌: 北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 佐藤知己 (2020) 『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』9.
札幌: 北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 佐藤知己 (2021) 『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』10.
札幌: 北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- Smith, Carlota S (1994) Aspectual Viewpoint and situation type in Mandarin Chinese. *Journal of East Asian Linguistics* 3: 107-146.
- 田村雅史 (2003) 「アイヌ語におけるアスペクトに関する従来の記事の概観」『itahcara (イタハチャラ)』1: 17-24.
- 田村 (福田) すゞ子 (1960) 「アイヌ語沙流方言の助動詞—アイヌ語の助詞についての報告その1—」『民族学研究』24 (4) : 67-78.

- 田村すず子 (1984) 『アイヌ語音声資料 1』 東京：早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子 (1985) 『アイヌ語音声資料 2』 東京：早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子 (1986) 『アイヌ語音声資料 3』 東京：早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子 (1988) 『アイヌ語音声資料 5』 東京：早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子 (1989) 『アイヌ語音声資料 6』 東京：早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』 東京：草風館.
- 田村すず子 (1997a) 「アイヌ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典コレクション：日本列島の言語』 1-88. 東京：三省堂.
- 田村すず子 (1997b) 『アイヌ語音声資料 10』 東京：早稲田大学語学教育研究所.
- 寺村秀夫 (1982) 「言語の対照的分析と記述の方法」 森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明 (編) 『講座日本語学 10 外国語との対照I』 2-14. 東京：明治書院.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 東京：くろしお出版.
- 鷺尾龍一・三原健一 (1997) 『ヴォイスとアスペクト』 東京：研究社出版
- ヤーコブソン・ロマーン (1973) 『一般言語学』 (川本茂雄監修 田村すず子・村崎恭子・長嶋善郎・八幡屋直子訳) 東京：みすず書房.
- 吉川佳見 (2020) 「アイヌ語における「完了」表現があらわす証拠性」 『北方言語研究』 10: 203-218.
- 朱德熙 (1982) 『语法讲义』 北京：商务印书馆.
- 朱德熙 (1995) 『文法講義』 (杉村博文・木村英樹訳) 東京：白帝社. (朱德熙 (1982) 『语法讲义』 北京：商务印书馆.)